
閉鎖インサイド

式織 檻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

閉鎖インサイド

【Nコード】

N7875E

【作者名】

式織 檻

【あらすじ】

閉鎖された場所「那頭奈学園」。そこで起こる奇妙な現象、そして事件……。

序章「エンター」（前書き）

本作は、賞応募に際し削除させて頂いた同作品の再投稿となっております（作品の削除は極力行わないべきであることは存じておりますが、賞応募の際はWEBデータは消すのがマナーであること、そして削除する以外に方法が見つからなかったので、やむなく削除させて頂きました。申し訳ありません）。結構加筆修正はなされておりますが、お話としては変わりはありません。

> 前回コメントを頂いた皆様

削除に際し、コメントまで削除されてしまい申し訳ありませんでした。頂いたコメントはこちらで大切に保管させていただいております。

また、加筆修正の際、それらのコメントが大変参考になりました。心より感謝申し上げます。

序章「エンター」

「『全寮制』ってのは、一体何のための制度なんだ？」

僕がこの疑問について改めて考えたのは、『なすな那頭奈学園高等部』の入学式の前日のことである。

制度の意義なんて高校によってまちまちで、遠方に住んでいる学生を通いやすくするためとか、親元から離れて自立心を養うためとか、はたまたただ単にその学校にそういう歴史があるからとか、その辺りがセキズイ反射的に思い浮かぶ。細かいことを考えれば、それこそ時と場合と人と物によるものであり、際限なんてありやしないが、一般的な建前としてはそんなところだ。

そしてこの『なすな那頭奈学園』だって、大同小異に過ぎないだろう。仮にも県内有数の進学校で、進路指導の際に中学教師がちらつかせる高校リストの上位にちよくちよく名を連ねるくらいには知られてる学園なんだ。そんな一般性とかけ離れてると思えない。違えてるはずもない。僕もせいぜい、これからの三年間でその恩恵にあずかれるだけあずかればいい。

そんな風な結論を出して、僕はその時考えるのを止めた。これ以上考える必要もないと思ったからだ。

だがしかし、僕がこれから通い始めるこの学園に関しては違ったのだ。

生徒を閉じ込めるためだったのである。

生活のほとんどを学園の中でまかなわせることによって、常に生徒を学園の監視下に置いておくことが目的なんだそうだ。わざわざそのためだけに、数年前、結構な予算をつぎ込んで生徒全員分の寮を敷地内に建設したらしい。何とも豪気な話だ。

僕がこのことを知ったのは、入学直後——入学式の一時間半後のことである。

緊張半ば、退屈半ば、驚き少々と言ったところの式やホームルームを終えた後の小休憩。新しい仲間との世間話もそぞろに目新しい校舎内を見て回っていた最中に、廊下ですれ違い様に声をかけてきた親切的先輩におどろおどろしくもそんな話を聞いたわけだが、僕はたいして深刻に考えなかった。

監視されて困るのは、監視されて困るようなことをしてるからであって、そういうことをしなければいいだけの話だ。年相応の自制心は持ち合わせていると自負している僕にとって、別段無理難題というわけでもない。いくら何でも教育機関が、知る権利と犯罪の境界を飛び越えてまでプライバシーに踏み込んでくるなんて考えられないし、僕には何ら不都合はない。そう考えていた。

しかし結局のところ、『閉じ込められた』ことにより一番右往左往したのは、何だかんだ言って僕だったのかもしれない。

——そしてその『閉鎖』に最も抗ったのも、他でもない、僕だったのかもしれない。

第一章「チャット」―1

「でもさあ、『誤り探し』ほど心許ない問題もないと思わない?」

今日一日の学業を終え、風呂上り以上にすっきりした心持ちで自分の席で伸びをしていた僕に、いくらか舌足らずなくせに声量が大きいせいでやたら明瞭に聞こえる声が、後ろから投げかけられてきた。

腕を肩の上上げたまま首だけ回すと、カチューシャで髪を後ろに流してるおかげで陰ることなく輝いてる丸眼鏡を携えた、この上なく見知った女子生徒の微笑。その目はレンズ越しに、完全に僕にロックオンされている。

僕は腕を下ろしつつ、

「……………何だつて?」

「だからさあ、さっきの問題だよ」

笑顔を崩さないままスタスタと僕の方に寄ってきて、風邪っぽいで現在寮の部屋で布団にくるまってるであろう僕の隣の木内の席に腰掛けながら、そう答える彼女。肩にかかる髪を揺らし、言葉を続ける。

「先生が出題してたじゃない。ほら、『次のうち誤っているものを挙げなさい。A、四面楚歌 B、感難辛苦 C、四季折々 D、空前絶後』ってやつ」

「……答えはBで間違いなかったと思うけど?」

「いやいや、そうじゃあないよ。もっと根本的な部分。そもそも、『何が誤りか』ってことだよ。もちろん、辞書には『感難辛苦』なんて言葉は載ってないよ——これはこれで言い得て妙だとは思っけど——だけど、『辞書に載ってない』ってだけで、本当に『誤り』にしちゃっていいのかってことだよ」

嬉々と話してるのが傍から分かるくらい、はきはきした口調で語ってくる。その表情を見る限り、こいつは僕がこの話題に乗り気じ

やないということにまったく感知していないようだ。僕の顔を真っ直ぐ見てくるせに、僕の心情を読み取ろうとする雰囲気は皆無である。

「そもそも、『誤り』っていうのは『正解』ありきのものだからね。『正解』の反対が『誤り』なんだよ。だから、何が『正解』なのか、その定義を教えてくださいな。話は始まらないとも思うんだけど。でもそんな説明をしてたら、その説明文を読むだけで授業時間が終わっちゃうもんね。だから常識に頼らざるを得ないんだろうけどさあ」まるで会話が弾んでいるかのような口調。

僕は「何でこいつはこうなんだろう？」と、心うちで呟いた。

僕が不満に思っているのは——オタクと称される人間は一般的に知識欲が強く、特定の分野で人並み以上の知識を蓄えてるものであり、人間である以上自分の能力を他人に表現したいと思うのはある意味自然で、総じてオタクは聞いてもないことを他人に語り聞かせる傾向があること——ではない。そんなのは元から分かりきっていることだ。問題はその前の部分。なぜ、この女子——風宮すだれ——がオタクであるのか、というレベルの話だ。

「じゃあこの場合は、一体何が『誤り』なのか？ 例えば辞書が間違ってる可能性もあるし、実はその四字熟語が作られた当時は『感難辛苦』の方が正しくて、それが誤って伝えられたって可能性もあるでしょ？ 実の実は両方が正しい可能性もあるし、誤りも何も、正解すら存在しない可能性だってあるよ。なのに何でそんな検証もせずに、『誤り』がBだって言い切れちゃうんだろう？」

両腕を広げ、手の平を天井に向けるすだれ。体全体で僕に伝えようとしているようである。そのせいで僕が余計にげんがりしているとも知らずに。

そもそもこいつはいわゆるパソコンオタクであり（自室には自作パソコンが五台並べられている、豪勢なもんだ）、辞書オタクでも四字熟語オタクでもない。ただ単にこういう思考実験が好きなだけである。そこにこいつのオタク属性が発揮されてるおかげで、僕は

割を食っているというわけだ。

「ミステリ小説にしたってそうだよ。幾人が限られたメンバーの内、探偵が、一人——あるいは数人——の犯人を追いつめてくつていう図式がよく見られるけど、それだけで犯人を断定しちゃっていいのか、疑問に思わない？ 例えば探偵以外がすべてグルで、アリバイも証言も全部嘘で塗り固められてる可能性だってあるわけでしょ？ たった一人の探偵には、それを確かめる術はないんだから。つまりこの場合、犯人じゃなくて探偵が『誤り』なんだよ。事実を曲解してる唯一のロールなんだからね」

棒立ちしてるのにも疲れ、僕は椅子に腰を降ろす。……そろそろ、すだれが言ってる意味が分からなくなってきた。

「もちろんこれは、物語一般にだって言えることだよ。特に一人称視点で書かれてるもの。そこには色んな人物が登場して、彼ら彼女らとの会話を駆使してストーリーを進めてくわけだけど、『自分』以外のすべての登場人物が嘘しか言わなくて、『自分』が知らないうちに間違った方向へ誘導されてる可能性だってなきにしもあらずだよ。危険極まりないよねえ。『自分』にはどうしようもないんだから」

ああ誰かこいつを止めてくれ、と思つて周囲を伺つたが、僕達の半径三メートル以内には誰一人いない。自然にそうなったのかもしれないが、みんなが故意に避けている可能性も否定できなかった。薄情なもんだ。前者なら神様仏様が、後者なら級友が、ね。

「さらにさらに、だよ。フィクションに限ったことじゃないよ。例えば今の粉雪君だつて、あたしが言つてることが嘘なのか本当なのか、測りかねてるでしょ？ あたしだつて、君が言つてることが本当なのか実際には分かりやあしないよ——もちろん、この半年間の友情と信頼に基づいて、君が言うことはすべて真実だと信じて聞いているけど——だから嘘発見器なんてものが必要になったりするんだろうけどさあ、その機械を作った人が嘘つきでないとはいえないからね。だからあたしは君が嘘をつく可能性も理解してるんだ

よ、という結論を出したところで本題に入るんだけど――」

今までののは全部前置きだったのか、と決め球をホームランされたピッチャー並みに呆けつつも、僕は

「……………何でしょう？」

「粉雪君、昨日何してたの？」

……………本題は信じられないくらい簡潔だった。

僕はすだれの顔をジト目で眺め、今までの五分間を返せと思いがら、

「……………昨日？　昨日は、日曜日を満喫してたけど？」

「うふふ、違うよ。あたしが聞きたいのはそこじゃあないよ。分か
つてて言ってるでしょ？　ふふ。そういうワンクッションも嫌いじ
やないけどさあ」

くすくす笑いながら、木内の机に右ひじをつくすだれ。あごを右
手で支えながら、

「じゃあ、もつと具体的に聞こうか？　粉雪君、君は昨日の昼過ぎ、
どこへ行ってたの？」

すだれは目を細め、僕の胸の内を見透かすような眼差しと声音で
言う。

——やっぱり、それを聞いたかったわけか。

とんでもないところから前置きが始まったもんだから測りかねて
いたが、後半は頭の片隅で予想できていた。今日、今、このタイミ
ングで、すだれが僕に話しかけてきた目的、その理由。そんなこと
だろうと思っていた。

僕は肩をすくめながら、

「……………別にどこでもいいだろ。うちは土日しか外出できないんだ。
そりゃあ、行きたい場所はいくらでもあるさ」

「うふふ。確かに校則のせいで、我が校の生徒は平日に学校の塀の
外に出ることは原則として認められてないね。だから、どこか行き
たい場所へ行くには土日を選ばなきゃならないのは当然だけどさあ。
そう簡単な話じゃないでしょ？　たとえ土日でも、外に出るには面

倒くさい申請書を書かなきゃならないし、しかも外出中はずっと監視されなきゃいけないんだから。そのせいで、クモの子を散らすように週末に生徒が学校から散らばってくなんて現象は起こらないわけだけど。だからこそ、そんな苦勞をしてまで君が行きたかった場所はどこなのか、すごく興味あるんだよ」

言いながら、すだれは僕の顔から視線を外さない。僕はさっきから洪面を作り続けてるってのに、やたら興味深そうな表情を僕に向けている。僕の顔の何がそんなにもしろいんだろうか？

僕は視線を床に落としつつ、

「……………本屋とゲーセンだよ」

椅子から立ち上がりながら、投げやりにそう答えた。まあ、いわゆる根負けってやつだろう。変に隠して、氣力を使い果たす方が損だ。

僕は机の脇に立てかけてあった空っぽの鞆を持ち上げ、

「聞きたいのはそれだけ？　じゃあ、僕は部屋に戻るよ」

「あ、待ってよ。一緒に行こうよ」

思いついたように言い、すだれは慌てて自分の席に駆けていった。多分、鞆を取りに行ったんだろう。だが、僕はその背中を一瞥して構わず先に教室を出た。これ以上、こいつの与太話に相づちを打つたりしたくないし。……………まあ、廊下で追いつかれるのは目に見えてるけど。

——結局僕らは、囲いの中で鬼ごっこしてるようなもんなんだ。

第一章「チャット」―2

つまるところ、風宮すだれが僕に執ように話しかけてくるのは、僕が彼女を避けないからである。……いや、より正確に言うならば、僕が『避けることを知らなかった』からだ。

現在の僕は、できることなら彼女と距離をとりたいと常日頃、昼夜を問わず思っている。彼女の独唱を耳に通す時間なんて、人生の無駄なものベスト3に入るくらい殊更なものだ。身になった試しがない。人生に限りがあることを知っているならば、即刻削除すべき項目である。

そう理解しつつも僕がそれを回避できなかったのは、入学当初に問題がある。

たかだか半年前に僕は初めてこの校舎に足を踏み入れたわけだが（入学試験は別の校舎で行われた）、同じ中学からこの『那頭奈学園』に入学したやつは、僕以外に誰一人いなかった。なもんで、顔見知りとは皆無。入学式が終わって通された一年五組の教室で、若い男性教師（うちの担任、倉林先生であることはこの後の自己紹介で知った）が「十分休憩したらホームルームを始めます」と言い残して去った後、周りが顔馴染み同士でローカルな世間話を始める中、僕はどうしようもなく独り手持ち無沙汰になっていた。

そんな僕に「やあやあ、初めまして」と颯爽と声をかけてきたのが、何を隠そう、風宮すだれだったのである。

その独特な言葉遣いと口調のせいで、最初のセリフもシーンもしっかり覚えていた。今さっきと同じカチューシャに丸眼鏡というアイテムを装備したすだれが、手をひらひらと振りながら僕に近づいてきたのだ。

正直に言えば、その時の僕は、彼女に話しかけられて悪い気はしてなかった。

寂しかったりつまらなかったりする時は、どんなものでもおもし

るく感じるものである。だから、彼女がいきなり「高校における第二外国語教育の一般化」について語り始めた時も、少し変わってるなあという感想を持っただけで、むしろ一生懸命に合いの手を入れてやったものだ。

それがいけなかったのだろう。

そこからズルズルと、まるでスーツケースを転がすように、すだれの独り言の傍聴人という役職が半年間続くことになったのである。クラスの他の生徒は、元々知っていたのか、僕との会話を聞いて気付いたのか、いち早く危機を察知してすだれとある程度の距離をとっている。つまり僕は、『すだれ地雷』が至る所に埋められた砂漠に一人の取り残されたようなもんだ。

今さら彼女を避けるにしてもすでにタイミングを外してしまっているし、彼女がそれを許さないだろう。諦めの境地が見えてきた今日この頃である。

——そんなことを思いつつ、

ため息をつきながら、僕はタイル張りの廊下を早足で歩いている。何でまた僕が、この後には何も予定がないのにも関わらず早足で、しかも最短経路を選んで廊下を歩いているのかと言う理由は、今さら特に説明する必要もないだろう。確かにこの後すだれに追いつかれるのは確定事項だが、しかし今のうちにできるだけ先へ進んでおけば、この後すだれと会話する時間は減っていくのである。我ながら何ともみみっちい……………もとい、涙ぐましい日々の努力というわけだ。

心の涙を拭いつつ、後ろから今にもすだれの足音が聞こえてくるんじゃないかと内心びくびくしながら、廊下の角を左に曲がろうとした瞬間、

いきなり目の前に影が現れた。

「うおっと」

「キヤッ」

甲高い悲鳴と共に、肩にドンという衝撃。

倒れないように足を踏ん張りながら、一体何が起こったのかと前を見ると、どしんと床にしりもちをつく女子生徒と、ひゅーんと飛んでいく花瓶。きれいな軌道を描きながら、空中で水を四方に撒き散らしている。

そして重力にしたがって落ちていき、床上数センチ、がしゃんという破壊音を僕が覚悟したところで――

――花瓶が、止まった。

完全に宙に浮いている。口を上から少し傾けたくらいの姿勢で停止し、そのまま動かなくなった。廊下のタイルには丸い影がくつきりできている。

ふと、しりもちをついたままの女子に視線をやると、右手にカードを握り締めてその花瓶を見つめていた。間一髪間に合ったのだらう。

僕は、ふうと安堵のため息を漏らした。

そしてぶつかったのが誰だったのかと、再度その女子の顔を見る。栗色の髪を後ろで一つに縛っている、少々吊り上った目をした女子。眉間にシワを寄せ、僕を見上げている。彼女は、僕もよく見知った顔――うちのクラスの野中解離かいりだった。

ぶつかったのが僕だと確認した乖離は、立ち上がりながら、

「ちよつと、危ないじゃない」

「あ、ごめん」

反射的に謝ってしまう僕。………てか、お互い様なんじゃないか？ そっちにも非があるんじゃないのか？

しかし僕が反論を口にする前に、

「前々から思ってたけど、あなたって何かにつけてトロイのよね。そんな隙があるから、変なのにつきまとわれたりするのよ。自業自

得だわ。ともかく廊下を歩く時くらいは、人並みの注意は怠らないで欲しいわね。気をつけなさい」

「え、あ、うん。気を……つける……」

気圧されるようにそう答えると、乖離はきびすを返して花瓶を抱え直し、そのまま教室の方へすたすた行ってしまった。

……まったく、とっつきにくいったらありやあしない。

この六ヶ月、毎日同じ教室で授業を受けているわけだが、彼女の笑顔なんて一度も見ることがない。それどころか、七割がたが眉を吊り上げた表情なのである。何が楽しくて人生をやっているんだろう、と思ってしまう。すだれ以上に苦手な性格だ。まあ、普段は接点がないのが救いではあるが。

遠ざかる彼女の背中を見つめ、ぼりぼりと頭を掻いていると、突然――

「――野中さんって、変な人だよねえ」

脇から声がした。思わず後ずさりながら声がした方に目を向けると、カチューシャに丸眼鏡。いつの間にかすだれが追いついてきていた。

「あたしも前々から思ってたんだけどね。どことなく怪しいよねえ、彼女」

アゴを親指と人差し指でつまみながら、廊下の向こうを眺めるすだれ。その乖離が「変なの」と揶揄した人物が自分であることに、こいつは気付いてないのか。

僕は、なおも真面目ぶった表情のすだれを横目で見ながら、
「……………」『変』とか『怪しい』なんて、お前が他人を形容する言葉じゃないだろ。少なくとも乖離はいたって真面目なやつだ。むしろ怪しさなんてもんから一番ほど遠いくらいじゃないか」

「む…………」。最初のセリフに関しては大いに反論があるけど――
でも野中さんだって、確かに品行方正な人だけどさあ、しかし度が

過ぎてると思うよ？　だって彼女、あたしなんかとは目も合わせないんだよ。たとえ廊下でぶつかりそうになってもね。今みたく苦言を呈することすらないんだよ」

「……それは、お前だからじゃないのか？」

「むむ。心外なセリフパート2だ。もう、違うよ、あたしだけじゃないよ。他の人とだって、視線を交えてるところなんて見たことないよ。彼女にとってあたし達はまるで空気みたいなもん、って具合だよ」

「そうか？　……うん、まあ、確かに、言われてみれば、そうだった気もする、が。」

「なのに君にはちゃんと反応するんだねえ……。閉鎖的な少女が唯一心を開く存在……みたいな？　うーん……。もしかすると……もしかするのかな？　うふふ。こりゃあ、あたしもつかうかしてらないねえ」

ニンマリ顔を僕に向けるすだれ。

僕は「何のこっちゃ」と呟きながら、彼女の視線を振り払うように回れ右して廊下を歩き始めた。すだれはさも当たり前のようにトコトコついてくる。

鞆を両手で膝元にぶら下げ、僕の隣を歩く眼鏡少女は、

「でさ、話を戻すけど——日曜日に君が行った場所が、本屋とゲーセンだって？　まあ、高校生の暇つぶしとしては王道中の王道だけどさあ……」

「……何か不満でも？」

「ふふふ。別に不満はないよ？　ただ、ここでさっきあたしが言ったことに立ち返るわけなんだけど、君があたしに本当のことを言うてくれないっていう可能性も、あたしはちゃんと予想してたんだよ。すだれは首を回し、猫みたいな笑顔を僕に向けてくる。

「実はさあ、あたし、君の申請書はチェック済みなんだよね。君が昨日行った場所の記入欄もしっかり見てきてたんだ」

「……おい。知ってるのにわざわざ聞いてきたのか？　てか、まさ

か今までもずっとそうだったんじゃないだろうな？ 『友情と信頼に基づいて』とか言ってたくせに。なんちゅう嫌味なやつちゃ」

「うっふふ。それもこれも、君があたしに嘘をつくのがいけないんだよ。ちゃんと真実を教えてくれてれば、こんなカミングアウトをする必要はなかったんだから」

言いながら、口をVの字にひん曲げるすだれ。……………僕が悪いのか？

「ふふふ。申請書は監視された上で書かなけりやならないからね。そこに嘘は書けない。監視データをチェックすればバレるわけだから。そこには真実が書かれてるはず。……………で、その申請書によるとだね、そこにゲーセンなんてものは記されてなかったよ。代わりにネットカフェって書かれてた気がするんだけど？」

「……………そうだよ」

僕は仕方なく答える。……………まったくこいつは、やらしい聞き方をするもんだ。

「ふふ。この嘘のつき方もまた興味深い。まるで君がネットカフェに行ったことを隠そうとしたような感じだねえ。あたしにネットカフェに行ったことを知られると、何か不都合があるの？ 一体全体どんなウェブサイトを見てたんだろう？」

すだれは勝ち誇ったような顔をぐいぐいと僕に近づけてくる。…

…別に僕は、お前の顔をドアップで見たくなんかない。

僕は視線を逸らしながら、

「……………それを詮索されるのが嫌だったんだ」

「それ？」

「僕がネカフェに行ったなんて言えば、お前は絶対見たホームページをしつこく聞いてくるだろ？ それが嫌だったんだ」

「んん？ あたしに知られたくないようなページを見てたのかなあ？ 高校生なのに」

敵将を討ち取ったような表情のすだれ。その顔から、こいつが想像してることは容易にわかる。

「……………少なくとも、今お前が思い浮かべてるようなもんは見えないよ。ただ、これは僕のプライベートだから、それをあんまり他人に知られたくなかったんだ」

「他人だなんて、あたしと粉雪君の仲じゃん」

「親しき仲にも礼儀あり」

「あたし、粉雪君に礼儀正しくしてもらったことないよ？」

「……………」

言葉に詰まってしまふ。……………そりゃ、心底では親しいとは思ってないからね。

「じゃあ、これから君は、あたしに親切にしてくれるってことかな？　だったらまず手始めに、ぜひ君が昨日買ってきた本を見てみたいんだけど」

礼儀と親切を取り違えてないか、こいつ？

「……………立ち読みしただけで、本は買ってないよ」

「うふふ、わかってないね。あたしは君の外出報告書もチェックしたのさ。だから、君が昨日買ってきた本のタイトルまで分かてるんだよ。確かSF小説と、心理学の入門書だったっけ？　読ませよ」

「……………だったら明日持ってくるよ」

「えー？　粉雪君の部屋に入りたいのに」

「断固拒否する」

僕は人差し指でばってんを作った。僕の憩いの場まで侵食されたらかなわん。

「んん？　あたしに入られるとまずいの？　まさか君の部屋には――」

「その発想から離れやがれっ」

そんな馬鹿話をしてるうちに下駄箱にたどり着いたので、上履きから靴に履き替える。並んで靴を履き替えたすだれは、校舎を出てもまだ僕についてきた。

玄関口の正面からまっすぐ伸びる砂利道を、影を並べて歩きなが

ら、

「だってさあ、あたしまだ一回しか粉雪君の部屋に入ったことないんだよ？ これは問題だよ」

……何の問題だ。

そもそも、その一回があるから僕はもう二度とお前を部屋に入れないと誓ったんだ。朝の九時から夜の七時まで居座りやがって。休日が無駄にしたばかりか、紅茶とせんべいが一パックまるまる無くなってしまった。「夜七時以降は寮の建物内で過ごすこと」という門限がなかったら、どうなってたことか……。

「粉雪君てば、あたしの部屋に呼んだって来てくれないし。五月くらいに一回来たつきりでしょ」

……「来た」なんて言うのが普通に聞こえるが、実際は拉致とも呼べるような状況だったじゃないか。強引に腕を引っぱられてったおかげで、手首にアザができてたんだぞ、あん時。

僕はもはやトラウマになりかけてる強硬なすだれの握力の感触を思い出しつつ、右手首をさすりながら、

「……女子寮って入りづらいんだよ。人とすれ違ったばいに変な目で見られるし」

「それはあたしが男子寮に入った時も同じだよ」

……お前は何とも感じないのか？

「人の目を気にしてちゃダメだよ。自分がやりたいと思ったことをやらなきゃ。そのための人生だよ」

僕にきらめく眼差しをぶつけ、胸の前で拳を握るすだれ。……大層立派なセリフだが、多分こいつは自由と横暴の境目が分かってないな。

と、そんなツツコミを脳内で入れているうちに、Ｔ字路に差し掛かった。目の前で砂利道が右と左に分かれている。ここを右に曲がると男子寮、左に曲がると女子寮である。何とも分かりやすい造りだ。

その三つの道の交点で立ち止まったすだれは、

「うーん、六時か……。今から行ってもそんなに話せないしね。しようがない。お宅訪問はまた今度にしようか」

呟きながら、道の脇に建てられているモニュメントを見上げる。その視線の先では白い時計盤が夕焼けに照らされていて、確かに針は六と十二を刺していた。

「じゃあ、また明日ね、粉雪君。よい夜を」

手を上空でぶんぶん振りながら、すだれは左の道を歩いていく。夕闇とあいまって、程なくしてその後ろ姿も見えなくなった。

いつの間にか一人ぽつんと取り残され、急に空気が侘しくなったように感じる。無理も無い。さつきまで話してた相手が相手だ。

さつさと帰路につこうと足を踏み出したところで、僕はもう一度モニュメントを見上げた。

道を形作る垣根の奥。まるで自分の存在を忘れてくれと訴えるように、レンガ造りの小高い塔がひっそりと立っている。僕の身長の二倍程度の高さ。そしてそのてっぺんには、音もなくただ針だけが動く時計が備わっていた。

一体いつごろ造られたものなのか知らないが、外観は妙にきれいだった。風雨にさらされてるにも関わらず、傷も汚れもほとんど見当たらない。建てられたのはここ数年——もしかしたら一年も経ってないかもしれない。

そんなピカピカなシンボルではあるが、しかし場所が場所だけに、その職務を全うしているのかが甚だ疑問だ。今まで一度たりとも、僕とすだれ以外にこの時計塔を見上げてる生徒を見たことがない。

でも、僕にはそれが——その雰囲気——なかなか心地よかった。思えば僕だけは、毎日のようにこのモニュメントを見上げてる喧騒から少し距離をとっているような風体。それくらいの存在意義の方が、僕には美しく見える。

「……そんなもんだよなあ」

呟きながら、もう一度時計盤に目をやった。

好意も悪意もなく、ただ淡々と動き続ける針。留年さえしなければ

ば、僕はあと八百回くらいこの塔を見上げることになるのだろうか。
その間、この時計は千六百回くらい回ることになるんだろう。
高校の三年間。

——この学園は、場所だけでなく時間まで閉じられている、という
ことか。

第二章「カード」

例えば、カードゲームなんかで——ゲームの種類はポーカーでもセブンブリッジでもウノでも何でもいいが——いいカード、強いカードを手に入れた時に、それを高々と宣言するような人間は、一体どれくらいいるだろうか？ 別にアンケートを催したいわけではないが、少なくとも僕の周りを見る限り、全体の数パーセントに過ぎないと思う（幼稚園の頃の僕の妹が唯一そうだった）。

そんなのは当然の中の当然のことで、自分がいいカードを持って、いることを人に知られれば、相手にはそれに基づいた戦略をとられてしまう。場合によっては奪われてしまう可能性だってある。勝負に勝ちたいと思うなら、自分の手の内は隠すものだ。

それは、話のスケールを広げていつでも同じことである。

商品開発を生業とするような会社だって、技術やノウハウは企業秘密にしたり特許を申請したりするものだし、世界各国の軍隊にはどれだけの機密事項があることか。言わずもがな、社会を形作る上でごく自然な流れだ。

そしてこれは、この『那頭奈学園』にも当てはまる話である。

遊びたい盛りの高校生がとことん自由を制限されているにも関わらず、やたらに逆らおうとする生徒が少ないのは、みなそういう事情を理解しているからだろう。この学園が隠しているもの、閉鎖されている理由。それはつまり——

——『魔術』の存在。

……………いきなり日常生活ではとんと聞きなれない単語が出てきてポカンとしてしまう人も多いと思うが、入学式でステージに立った髭を生やした初老の学園長先生に初めてこの言葉を聞かされたときの僕——そして一年生全員——も、まったく同じ反応だった。

何を言ってるんだ？

ファンタジー学園長なのか？

僕の聞き間違いなのか？

もしくは何かの比喻表現なのか？

体育館に直立したまま、そんな疑問と思考がひっきりなしに脳内を駆け巡った。おかげで十五分にわたる人生の大先輩の話は他に何一つ頭に残らなかったのは、無理からぬことだろう。

「この学園の規律は『魔術』を守るためにある」

そんな説明で納得してしまうような十五歳は、脳内設定だけで生きているような人だけであり、心安いことに新入生のほとんどはその例外だったようだ。周りはみな不安と不満と不可解を織り交ぜた顔をしていた。

結局のところ、学園長の発言と同時に始まった聴衆のガヤガヤはしばらくしたら止んだ。周囲から漏れ聞こえる会話を聞く分には、それぞれ言い間違いや聞き間違いという結論に落ち着いたようである。まあ、常識的に考えればそうだろう。

おかげで、ホームルームが始まる直前まで、錯乱した生徒も出ずに済んだ。

じゃあ、実際はこの学園の規律は何のためにあるのか？ 学園長は本当は何と言ったのか？ そちら辺の疑問が残ってしまうが、それはまた後で聞こうと、たいして心の準備もせずに迎えた転回の間――

――最初のホームルーム。

そこで倉林先生によってクラス全員に支給されたのは、学生証と『キー表』という表紙がついた冊子だった。学生証の方は野暮ったい顔をした僕が写っていて「僕ってこんな顔だったっけ？」と首を捻ってしまうような割と一般的なものだったが、わけが分からないのは冊子の方だ。ペラペラめくってみると、表が記されたプリントが数枚ほど閉じられていた。

横に二行、縦に三十段くらいに区分けされた表。左の行には『炎

の発現』『水の発現』なんてことがびっしり埋められていて、その横の行には『炎よ来たれ』『水よ来たれ』みたいな短い文章が添えられていた。

魔術——炎——発現

ロールプレイングゲームをそれなりにやったことがある僕は、その一貫性がすぐに見えてきてしまった。ゲームの登場人物が時折口にするワード。テレビ画面の中だけで起こる現象。いわゆるファンタジーと呼ばれるジャンル。

——これは現実なのか？

頭がくらくときた。

夢ならここら辺で覚めるものだが、残念ながら地に足はついていない。

頭をぶんぶん振りながら、一体何がどうなってるのか、どこから夢なのか、何が常識なのか、悪徳宗教なのか、大規模なドッキリカメラの類なのか、由緒ある学園がそんなものに協力したのか——そして僕はどこで人生を誤ったのか、僕の生き方の何がいけなかったのかとそこまで考えたが、それらの熟考はすぐに遮られることになった。

教師による実演。

倉林先生が、教卓の前に立ったままカードを振りつつ『キー』を唱え、目の前に火を出したのだ。空中で数秒間メラメラと舞い上がる炎。「おおー」と唸る周囲の生徒。僕はそのトリックを見破ろうと目を凝らしたが、それもまた無駄に終わる。

先生の「君らもやってみろ」という号令に伴い、あちこちで生徒が『キー』を唱え始めた。すると、こっちでは水が発現し、向こうでは水が発現し、隣の木内は炎を出してしまつて「あちちっ」と手を振っていた。

僕も学生証を握り「氷よ来たれ」と呟いた。しかし何も起こらず、「あれ？」と首をかしげながら、さっきよりもやや大きい声で「氷よ来たれ」と言った——瞬間、机の上に氷がぼっと落ちてき

た。

こうして、たかだか十分弱の出来事により、僕達の常識は簡単に覆されたのである。

——そんな、思い出と呼ぶには近すぎる過去を振り返る現在は、昼休み。

僕は食堂の隅に一人陣取り、トレイの上にきつねうどんとオレンジジュースを並べている。

二時間前から待ち望んでいた瞬間にようやくたどり着き、日々積み重なるべき幸せつてのはこういうものだよなと生きる目的を再確認しながら、割り箸を真つ二つにする。そして数年前から実施している流儀に則って、「油揚げは後から」ときつねの好物と言われている黄色い正方形を底に沈めつつ、うどんをすすり始めた。

「今日はスープが濃い目だな」と思いながら、トレイの脇においてある紙コップに手を伸ばすと、紙の感触が予想と違った。やたらぬるい。

中を覗くとそこには液体だけが見え入っていて、僕は氷を入れたことをようやく思い出した。

やれやれと思いながら、僕はズボンのポケットから学生証を取り出す。そして頭で氷をイメージしながら紙コップの上空で学生証を振った直後、トプントプンという音が聞こえた。ジュースの液面を見ると、透明な八面体がプカプカ浮いている。

少し待てば、これで冷えるだろう。

『魔術』によって発現される水や氷は、調査によると百パーセントに近い純水らしく、飲むのはあまりよろしくないというお達しを受けている。が、ジュースを冷やす分には別に問題ないだろう。今まで何回もやっているが、腹を壊した試しはない。

少しくらいぬるくてもいいかと思いながらコップを口に持っていた瞬間、

「くだらないことに『魔術』を使ってるのね」

後方から蚊の鳴くような声が聞こえてきた。振り返ると、栗色の長髪を後ろで束ねている、難しい顔をした女子——野中乖離が立っていた。

「……別に、僕の勝手だろ？」

「それはそうだけど、分別のある人間なら自ずと意義のある場所で能力を使うものよ」

ツンとした声で言いながら、乖離は僕の隣にトレイを降ろした。

……まさか、ここで昼飯を食う気なのか？

案の定、乖離はその席に座り、

「あの人は？」

「あの人？」

「風宮さん」

「……ああ、あいつは教室で購買のパンを食ってる。僕がこの前貸した本を読むのに夢中らしい」

「そ」

自分から話を振ってきたくせに、興味は存外なさそうだ。乖離は淡々と割り箸を取り出し、いくら丼を口に運び始めた。

僕も僕で再度目の前のうどんをすすり始めたが、いきなりそのうまさ半減したように感じる。………何でこいつ、わざわざ僕の隣に座るんだ。他にも席は空いてるつてのに。

空気が読めない人は空気が読めないから空気が読めてないことに気付けない——という自己矛盾をどうにか律する術はないのかと論理的見地からアプローチを試みていると、

「……それにしても、あなた、さっき『キー』を唱えずに『魔術』を使ってたように見えただけど？」

「ん？ ああ、そうだよ」

「何でそんなことができるの？」

乖離は箸を動かしながら首を少し回し、視線をしっかりと僕に据えた。

「……別に難しいことじゃないよ。ようはイメージがちゃんと持てればいいんだ」

「……イメージ」

「そう。『魔術』を発動するために必要なのは、そもそも『キー』の言葉じゃなくて、頭の中のイメージだから」

「……へえ。よくそんなこと知ってるわね」

「知ってるというか、気付いたんだよ」

「気付いた？」

「そう。考えてみるよ。そもそも変だろ、『キー』がすべて日本語だなんて？ 『魔術』の発動に必要なのが『日本語の発音』だっていうなら、魔術の発動条件と日本語の言語形成が偶然にもぴたりきっかりマッチしたってことになるじゃないか。そんなの、確率的にありえないだろ。だから、必要なのは『日本語の発音』じゃない言葉を発するプロセスの中の、もっと前の部分。つまり、口にする言葉の『イメージを頭に思い描く』という段階——って、そう考えるのは普通じゃない？」

僕がここまで説明し終わると、乖離は手と口の動きを止めて、じつと僕の顔を見つめてきた。そして僕が居心地悪く感じるくらいの時間そうした後、

「なるほどね」

そう呟きながら、箸をトレイに置く。見ると、いつの間にかいくらが入っていたはずのどんぶりは空っぽだった。……こいつ、案外早食いだっただのか。

「あたしは自警委員の先輩に聞いてて知ってたけど、自分で気付ける人もいたとはね」

そう言いながら乖離はトレイを抱えて椅子から立ち上がった。

「まあ、あなたにしては健闘してると言えなくもないわね。少しくらいは期待してあげようかしら？」

捨て台詞のように言い残し、乖離はトレイ返却場の方へ行ってしまった。……いや、行ってくれたと表現した方が、僕の真情に即し

てるかもしれない。

「はーあ」

ため息を一つつき、僕は油揚げをかじり始めた。

第三章「ゲート」

バスの窓から見える景色は、日常だった。

大通り脇の歩道を、デート中らしきカップルや買い物帰りらしい主婦、帰宅途中であろう子供が行き交っている。日曜日だけあって、その人数はそこそこ多かった。あの中を歩けば、人を避けるのにもそれなりに苦労するだろう。それくらいの人々が歩いている。

そしてその町並みも、ごく平凡なものだ。

最近できたらしい大型デパートが区画の中心にどんと構えているが、その周りには比較的小さなブティックや喫茶店が並んでいて、見る限りはなかなか繁盛している。友人、恋人、家族と休日を通ぐす市民が、ひっきりなしに出入りしている。談笑する人の波。日本で通常見られる街の風景が、そこにあった。

僕だって、これまでの十六年間その中で生きてきたんだ。見慣れたもの——否、見飽きたものである………はずだ。

しかしそれでも、懐かしさを感じてしまう。

ちょうど一週間前にもまったく同じ景色を見たわけだが、逆に言えばこの一週間はこの日常に触れることができなかった。見ることも、聞くこともできなかった。当然だ。僕はずっとあの閉鎖の中にいたんだから。

これだけ大勢の人間を見るなんて、あの中にいる限りは滅多にななこと。このまま衝動に任せて、僕もこの日常の中に紛れ込んでしまおうかと思った——が、ズボンのポケットに手をつ込み、ためらった。

そこからゆっくりと取り出したのは、学生証。

間抜けな僕の顔が白いプラスチックの板に写っていて、その横には僕のプロフィールが小さい文字でつらつらと書いてある。まごう事なき『那頭奈学園』の学生証である。ひっくり返すと、裏面は真っ白。何も書かれていない。少し力を加えればすぐに割れてしまう、

ただの板切れだ。

しかし僕にとっては、これはいわば鎖のようなもの。

この鎖が、僕と『那頭奈学園』を繋いでいるのである。

これがあるから、僕の自由は制限されているのだ。

この学生証は——もちろん身分証明としての意味もあるが——『魔術』を使うためのアイテムの体で配られた。詳しくは知らされていないが、このカードには『種』というものが埋め込まれていて、その『種』を手に持つことで、あの学園内で『魔術』が使えるようになるのだそうだ。

では、なぜ年端も行かぬ高校生に自由に『魔術』を使わせるのか？ 学園からの説明によると、その目的はサンプル集めらしい。生徒が『魔術』を使用した際のデータを、カードの『メモリ』に蓄積して収集し、『魔術』の解明に用いるという話だ。悪い言い方をすれば、研究用のモルモットと言ったところか。特に体に害はないらしいし、訴訟を起こす気はないがね。

しかし、この『メモリ』が曲者なのである。

この学生証に埋め込まれている『種』の性能の半分が『メモリ』に費やされているらしいが、その『メモリ』が蓄積するのは、何も『魔術』のデータだけではない。常時、付近の音や光のデータも蓄積しているのである。そのため、この学生証を持っている僕の行動は、ほとんど他人に筒抜けというわけだ。

こんな学生証は捨ててしまいたい、と思ったことは一度や二度じゃない。僕にだって人に知られたくないことの一つや二つや三つや四つ………八つくらいはあるのである。鬱陶しさの極みだ。

しかしご丁寧なことに、このカードには『トレース』機能までついており、捨てればすぐに学園にばれてしまう。捨てた場所も特定されてしまう。そもそも学生証を失くせば部屋の鍵が開かなくなるし（扉の施錠は学生証の認証で行われるのである）、こんな大切な重要なものを落とそうもんなら放校処分になることもあるという。生徒にとって完全にデメリットでしかない。

かくして、学生の言も動も縛られているのである。

これによって、校則第一条「『魔術』に関して他人に教えない」が頑なに守られているというわけだ。まあ、最悪の場合は『魔術』で記憶を消せばいい話ではあるし。……『魔術』ではそんなこともできるらしい。そら寒いこと限らない。

——と、ぼーっと吊り革にぶら下がりながらそんなことを考えていると、バスが「那頭奈学園前停留所」に着いた。

僕は財布から小銭を取り出し、ドア近くの料金箱に投げ入れた。そしてそのままバスを降りる。

僕以外にも四人がバスから降りたが、みんな高校生以上大学生未満といったいでたちである。そりやそうだ。日曜の夕方、外出の門限時間間際にここで降りるのは、『那頭奈学園』の生徒くらいだろう。

僕達が降りるとバスはさっさと次の目的地へ出発してしまったが、別段それを見送ることもせず、僕は学園の門へと向かった。

無愛想な顔をした守衛さんに外出報告書の記入用紙とボールペンを渡され、僕達五人はその紙に一日の行動を記入していく。若者が五人並び、記入用の机に向かって猫背になっている姿はある種異様なものだろうが、しかし守衛のおじさんはそれを気にする様子もなく、ただ僕らを後ろから監視するように見ている。

書き終わった人から順に報告書を守衛さんに渡していくが、守衛さんは決められた動作だけをこなす人形のように、淡々とその用紙をチェックしていく。僕も本屋、ゲーセン、ネットカフェと今日一日のスケジュールを記した紙を渡したが、おじさんは無感動な目でざっと目を通した。そして、

「では、後で『メモリー』の抽出を受けてください」

と素っ気なく言われ、僕は門を通された。

バスを降りてからここまで要した時間は十五分。長くもないが、

短くもない。毎度の事ながら、なかなか面倒な作業である。

これからまた『メモリー』の抽出にいかねばならないが、それは後回しでもいいだろう。今日明日中に行けばいい話だ。とにかく今は、部屋でゆっくりしたい。

僕は自分で自分の肩をもみつ、門から真っ直ぐ伸びるコンクリート道をとぼとぼ歩く。そして校舎の玄関のところで左向け左をし、寮を指して今度は砂利道を進み始めた。どうにも、いつもの道がやたら長く感じる。疲れてるせいだろう。この学園がなかなか広いということに、こういうときに思い知らされるものである。

他の四人は別の寮の住人らしく（あるいは他の用事があつたりするのかもしれないが）、僕独りだけその歩き慣れた道を歩いているわけだが、Ｔ字路に指しかかろうとしたときに、ふと人影が目に入った。

一歩一歩近づくと、その風貌が段々鮮明に見えてくる。時計塔の手前、砂利の交差点に立っているのは、眼鏡にカチューシャ――そして珍しく私服を着ている――、風宮すだれだった。

「やあ、ごきげんよう」

「……よくないよ」

満面の笑顔であいさつしてきたすだれに、僕は仏頂面を作つて答えた。

「こんな時間にこんな場所で何してんだ？」

「ふふ、わかつてるくせに」

ロングスカートを風にたなびかせているすだれは、重畳そうに答えた。

「しかしまあ、相手は分かっているだろうと思つてもちゃんと丁寧に説明するのが思いやりのあるコミュニケーションの第一歩だという認識に基づいて説明させてもらうとね、君が今日どこへ行つたのか聞こうと思つてたんだよ」

「そんなことのために、この寒空の下待つてたのか？」

僕は八割がた呆れながら言う。残りの二割はというと、それはま

あ、予想通りという部分だ。

「今日行ったのは本屋、ゲーセン、ネットカフェ。買ったものは何もない。今月の小遣いが尽きかけてね。行っておくけど、今度のこれは嘘じゃないよ。申請書を調べてもらっても、何ら問題ない」

「ふふ、君の言うことは、そりゃあ信じるよ」

本当とは思えないことを言うすだれ。先週一度反故してるし。

「……で、信じた上で聞きたいんだけど、君はネットカフェで一体何を見てたの？」

「そんなにそこが気になるのか？」

「そりゃあ気になるよ。だって、ただ単にネットを見たいだけなら、ネットカフェに行く必要なんてないんだからね。この学園のコンピュータ室を使えばいいだけなんだから。それならお金もかからないしね。でも、君はあえて外のネットカフェを使ってる。先週に引き続き、ね。君がまるで外のネットを使うためだけに週末に外出するように見えるのは、あたしの錯覚ではないと思うんだけど？」

「だから、言ってるだろ？」

僕は息を吐き、疲れたように肩を落としながら言った。

「僕のプライバシーで、人に知られたくないことだってあるんだよ。学園のコンピュータ室を使うと、教職員に見たページが筒抜けだろ？ だから使いたくないんだ」

「……で、その知られたくないこととは？」

「それこそ言えないよ。知られたくないんだから。……お前にもな」僕は当然のように言う。

すだれは「ふふ、うまいなあ」と呟きながら、

「つまりは、君にはお金を払ってでも人に知られたくないことが存在するってことなんだね？ そこそがあたしの聞きたいところなんだけど、これ以上深追いするのは止めておこうか。君に嫌われたくないし。……それとも、しつこい女の子の方が好き？」

「好きじゃない」

僕は首を横に振る。

「そう……。うふふ。じゃあ、今日の話はこれでお終い。ではまた明日、教室でね」

そう言い残し、くるっと振り返って行ってしまうすだね。

一日町を歩き回った疲労と、冷たくなってきた風のせいで早く部屋に戻りたかったので、すだねの背中を眺めるのもそうそうに止め、僕もそそくさと男子寮の方へ歩き出した。

寮の玄関にたどり着き、がちやりと扉を開ける。そして靴を履き替えようと自分の下駄箱を開いて——僕は手を止めた。止まった——もしくは、止まってしまったと言った方が正確かもしれない。そこにはスリッパの他に、見慣れないものが入っていたのである。箱の上に掲げられている名札を見てそこが僕の下駄箱であることを再度確認し、僕はもう一度中を覗きこむ。

そこには水色の封筒が入っていた。

第四章「サーティファイ」― 1

月曜日の夕方。僕は男子寮と女子寮をつなぐ砂利道の中間点、三叉路のそばに立ち尽くしている。

垣根の奥にぽつんと立っている時計塔を見上げると、時刻は六時五分。

秋も中盤のこの時期、空は黒に赤が少し混じる程度。部活もほとんど切り上げているようで、周りに生徒はほとんど見当たらない。さつきまでグラウンドから響いていた野球部やサッカー部の掛け声も、もう聞こえなくなっている。

僕は右手に握っていた紙切れを広げ、寮の窓から漏れている光を頼りに、そこに書いてある文字をもう一度読んだ。

『明日の六時に、寮の前の道の丁字路のところで待っていてください』

たった一文。きれいな楷書で書いてある。差出人の名前はない。これを受取ったのは昨日である。外出から帰って下駄箱を開けたらこれが入っていた。朝にはこんなものはなかったはずだ。だからここに書かれている『明日』とは今日のことで間違いないと思うが、なのに、指定時刻を過ぎても誰も来ない。

場所が違うのだろうか？ それとも朝の六時だったとか？ ……

……んな馬鹿な。

『寮の前』と『丁字路』が当てはまる道はこの学園内ではここだけのはずだし、朝の六時なんて始業の二時間前だ。普通に考えて夕方だろう。この場所、この時間で間違いないはずだ。

しかし、誰も現れない。

もしかして誰かのイタズラか何かか？ ……まあ、ない話でもないだろう。

この手紙を発見した時、僕は、ようやく僕にも半年遅いか早いかの春が来た——なんて浮かれはしなかった。一瞬たりともそんなこと疑ったりはしてない。そもそも、書いてある集合場所が変なのだ。

恋文つてのは、人に見られるのが恥ずかしいからと、人目のないところへ誘うのが通例ではないだろうか？ だから、屋上とか体育館裏とかが典型的スポットになってるんじゃないか？僕は今までラブレターなんて贈ったことも貰ったこともないが、それくらいは常識の内だろう。

なのに、この手紙は人の通り道ど真ん中を集合場所になっている。恥じらいなんて欠片もない。分かりやすい場所として最初に思い浮かんだロケーションを書いておいたというような感じ。まるで業務連絡みたいなノリだ。

もしこれが業務連絡ならば、連絡はちゃんと受けるのが人間としての責務だろう。何についての連絡なのかは分からないが、わざわざこんなイレギュラーな呼び出し方をしてることを考えると、この連絡を受け取らなかった場合、僕にも何か支障が出るのかもしれない。だから、僕は時間通りに来たつてのに——いや、言い訳じやなく。

手紙をポケットにしまいながら再度時計塔を見上げると、六時八分。

あと二、三分だけ待ったらもう行こうか、もしこれがイタズラで明日仕掛け人にからかわれたら一体どうやって言い返してやるのかと思っていると、何となく——時計塔の横側から飛び出している突起に気づいた。

この時計塔はレンガが四角柱に積みあがっていて、その上部に時計盤がひつついている造りになっているわけだが、時計の面を正面とするなら、正面に向かい合って右側にでっぱりがある。ちっこい上に赤茶色をしているせいで、レンガの色にまぎれて今まで全然気付かなかった。

僕は垣根を越えて、時計塔に寄っていった。

その突起は、手を伸ばせばギリギリ届く場所にある。押しても引く張ってもびくともしないのでグリグリ回してみると、カチカチ言いなから少しばかりの抵抗を生みつつ、比較的簡単に回った。

——なるほど。

これは時計のねじなのか。電池式ではなく、ねじ巻き式なんだ。新しいくせにレトロなシステムを使ってる。寄贈者のこだわりか何か？

しかし、こんなものをこんな場所に建てたのはどこの誰なんだろうか。一体どんな目的で作ったんだろうか——と、時計塔に向かい合って腕を組んでいる僕に、

「何してるの？」

と声がかかった。

一瞬肩をびくつかせながら振り返ると、垣根の向こう、砂利道の上に野中乖離が立っていた。どことなく呆れているような顔をしている。

乖離は僕と僕の視線の先を交互に見て首を傾げたが、ふっと息をつき、「まあいいわ」と呟いた。そして気を取り直すような顔をして、

「遅れてごめんなさいね、粉雪君」

……へ？ 遅れて？

「ちよっと打ち合わせが長引いちゃって。もう帰っちゃったかとも思ったけど、待っててくれたようね。礼を言うわ」

乖離は少しばかり殊勝な顔。

「……………まさか僕を呼び出したのは——」

「私よ」

乖離は何ともなさげに言う。

僕と乖離には、部活も委員会も掃除当番ですら、接点は何もないはずだ。別に友達でもないし、共通の友人すらない。こいつから僕が受取るべき業務連絡なんて一つも思いつかない。じゃあ、一体——

「――僕に何の用だ？　こんな時間、こんな場所で」

「ちよつと、あなたに来て欲しいところがあるのよ」

言いながら、乖離はくるつと振り返る。そして首から上だけを僕に向け、うつすら笑みを浮かべながら、

「ついてきて」

第四章「サーティファイ」―2

乖離が僕を連れ立ったのは、西校舎だった。

普段南校舎で授業を受けている僕にはあまり馴染みのない建物だが、入学試験のときに一度だけ入ったことがある。南校舎と取り立てて変わりのない、何ら普通の鉄筋コンクリート建造物だった。

この半年間、僕がこの校舎に一度も足を踏み入れなかったのにはあからさまな理由があり、それは取りも直さずこの校舎に用がなかったからだ。

この西校舎は、一階の部屋は資料室などの荷物置き場に、二階、三階は委員会の部屋に使用されている。そのため、この建物に出入りするのには、世界地図を取りに来た地理の教師や、美化委員などの委員会に在籍する奉仕意識の強い生徒くらいのものである。

——そして、乖離がこの校舎に連れてきたということは、目的地はあそこだろう。

僕の三步手前をずんずん進んでいる乖離は階段を二つ登り、三階の廊下を十メートルくらい進んで、そこにある部屋の前でようやく立ち止まった。そしてくるりと僕の方を振り返り、

「ここよ」

と、薄い微笑で言ってくる。

僕は、その扉を眺めた。

横開きではなく、押し開けの木製ドア。会議室なんかの入口と同じ造りだ。そして扉の上には黒いプラスチックっぽいプレートが掲げられていて、そこに白抜きの文字が書いてある。

『自警委員』

——やっぱり、ね。

僕は鼻を鳴らしながら呟いた。いくらでも予想できることだ。この乖離が、自警委員に所属していることを知っているならば。

傍で僕の表情を観察していた乖離は、僕が得心がいったのを見てとったようで、一瞬ふっと笑い、間も置かずこんこんとその扉をノックした。

「どうぞ」

扉の奥から声が聞こえてきた。高い声だが、その音域は男のものだろう。生徒なのか先生なのかは定かではないが。

乖離はノブに手をかけ、

「失礼します」

と言いながら躊躇なく扉を開いた。僕もそれに倣い「失礼します」とやや小さめの声で言って、乖離の後に続いて部屋の中に足を踏み入れる。

うちの教室と同じくらいの広さ。

天井の蛍光灯の明かりを床が反射している。ワックスでピッカピカだ。塵一つ見当たらない。我が一年三組の教室と比べると、天地ほどの差がある掃除のされ具合だ。比べる対象が対象だとも言えなくもないが。

壁際には本棚がそびえ立っており、その中には六法全書みたいな厚めの本が隙間なく並べられている。本棚と天井の間にはトロフィ―やら額に入った賞状などが置かれていて、その佇まいが静かな威圧感を放っていた。

そしてその部屋の奥、窓際には、会社の部署の部長が座るような位置づけで机が置かれており、そこに一人の男子学生がいた。

その生徒は椅子からすくっと立ち上がり、僕の方へ視線を向け、
「やあ、初めまして」

目を細くして、ほころぶような笑顔を向けてくる。若干の狐目に、柔らかな表情を浮かべる男子。……僕は、この人に見覚えがあった。

「……あなたは――」

「やあ、柊木君ひいらぎっていうのは君だったのか。じゃあ、初めましてじゃないね。ええと……半年ぶりかな？ 俺のこと覚えてる？」

「……もちろん覚えてる。僕が入学した初日、廊下で「やあ、君は新入生かい？」と声をかけてきた上級生だ。そして僕は、この人からこの学園について聞かされたんだ。」

「ええ、お久しぶりです。ええと――」

「俺は奥沢クルト」

「おくさわ………くると先輩？」

「そう。父親がドイツの人だね。カタカナでク・ル・トだ」

「へえ………そうなんですか」

「そういえばこの先輩、髪の色は黒だが結構色白だ。ハーフだからだろうか。」

「――で、あの、僕をここに呼んだ理由っていうのは？」

「そうだね、さっそく本題に入ろうか」

言いながら、クルト先輩は再度椅子に腰を降ろした。そして両肘を机につき、口元で手を組む。本当に会社の管理職に就いてそんな威厳のある姿勢。この人が自警委員のトップであろうことは容易に見て取れる。

ふと気付いて視線を動かすと、さっきまで僕の横にいた乖離は、いつの間にか先輩の隣へ移動していた。先輩の秘書でもやっていそうな位置取り。いよいよ、ここが部長室に見えてきた。自警委員っていうのはお堅い集団なんだろうか？

乖離が（恐らくの）所定の位置に収まったのを確認したクルト先輩は、僕に当たり障りのない笑みを向けてきて、

「ええと、まず初めに……柊木君。君はここが何の部屋かは、分かっている？」

「ええ。自警委員の委員会室ですよ」

「そうだ。じゃあ、我々自警委員については、どれくらい知ってる？」

セラピストのような口調で僕に質問してくるクルト先輩。

僕は「ええと」と頭の中を探りながら、

「自警委員っていうのは……文字通りこの学校を自警してるんですよね。設立は数年前でしたっけ？ 去年、塀を越えてこの学園に不法侵入しようとした不屈き者を成敗したって話を聞いたことがあります」

「ははは。そうか、その話は一年生にまで広がってるのか。そりゃ重畳だ」

クルト先輩はからからと笑った。

「ふふ、確かにあれはなかなか派手な出来事だったからね」

「ええ。自警委員の本領発揮ってところですよ」

「ふふふふ、実は違うんだよね、これが」

頬にしわを寄せ、先輩は悪戯な笑みを作る。僕が「どういうことですか？」と首を傾げると、

「自警委員が作られた理由、目的ってのは、それじゃないんだ。不法侵入者やら泥棒を捕まえたりするためじゃない。そんなのは守衛のおじさんや警察の仕事だ。子供の出る幕じゃないだろ？ 自警委員なんて名前のせいで誤解されやすいんだけど、俺たちの本職はそこじゃない」

「……じゃあ、何なんですか？」

「ふふ。実はね、数年前からこの学園の中で 不審なものが目撃されてるんだ」

「不審人物？」

「いや違う。人とは断定されてないんだ。何かしらの 不審なものだ。その時々で黒かったり青かったり丸かったり角ばってたりするんだけどね。発覚当初に教師総出で探し回ったらしいんだけど、何も見つからなかったって話だ。でもその 不審なものは、それからずっとコンスタントに目撃され続けている。今年だって、すでに四件も目撃例が届けられてるんだよ？ これは何か『魔術』に関係するものかもしれないけど、そうなると外部の人間に頼るわけ

にはいかないだろ？ この学園の上の研究機関に掛け合ってみても、人手が足りないって言われてね。そんな、いるかいなかアヤフヤなものに割ける人員はいないんだろう。幽霊みたいなもんさ。でも、目撃例は結構多い。無視するわけにもいかないだろ？ だから、その不審なものを生徒自身で何とかしようと設立されたのが、この『自警委員』なんだ」

「……そうなんですか」

初耳の話だ。自警委員の出生どころか、そんな不審なものがこの学園に出るなんて話も今まで聞いたこともなかった。まあ僕は、部活にも委員会にも所属してないせいで交友範囲はなかなか狭く、そういう噂話に疎いせいもあるだろうが。

「ということで、数十年前に廃会になったこの風紀委員の部屋に陣取って、俺たちはこの学園を不審なものから自警してるってわけさ。理解できたかな？」

……理解はできた。自警委員についての話は。しかし、僕が今問題にしているのはそこじゃなくて――

「――で、あの、僕がこの自警委員の委員会室に呼ばれた理由って言うのは？」

「あ、そうか、そっちが本題だったね」

笑顔に面目ないという感情を滲ませるクルト先輩。

「そう、で、この委員会も人員が豊潤てわけでもなくてさ……どこか足りないぐらいだね。この前の会議で誰かい人いないかと聞いたら、この乖離が『面白そうな人がいる』って言うてね。君の名前を挙げたんだ」

面白そうな人？ ……この前の『キー』を唱えずに『魔術』を使ったことを言うてるんだろうか？

「だったら俺も早速その人に会ってみようってことで、ここに連れてきてもらったんだ。よければうちの委員会に入ってもらえないかと思ってね。……どうだろう、柊木君？ 他に部活にも委員会にも入ってないそうだけど、別な活動をしてたりするのかい？ 忙しい

かな？」

「……いえ、別に、そんなことはありませんが」

「そうか、そりゃあ良かった。じゃあ早速入ってもらおうかな。…

……ただね、この自警委員の相手つてのは、さっきも言った通り不審なものだ。どんなものなのかわからない。もしかしたら俺達に敵意を向けてくるかもしれない。相当な危険を伴うかもしれない。だからね、誰でも入ってオツケーってことにはならないんだ。ちゃんとテストを受けてもらわないと」

「……テスト？」

「そう」

大きく頷きながら、クルト先輩は椅子に反り返った。そしてパチンと指を鳴らすと、

いきなり、周囲の壁からナイフが何十本も浮かび上がってきた。僕を三百六十度囲っている。

その切っ先は、寸分の狂いもなく僕を向いている。

「——この状況を切り抜けてみてよ」

どこまでも明朗な先輩のセリフが、僕の鼓膜に届いた。

第四章「サーティファイ」―3

「……ちょ、ちょっと、待ってくださいよ!」

「三!」

「いや、わけ分かんないですよ、ナイフなんて!」

「二!」

「何なんですか、この危ない状況は!」

「一!」

「だ、だから話を――」

――ヒュンツ

風を切る音が聞こえた。

動き出す、すべてのナイフ。

僕は思わず床に伏せた。

――カカカカッ

耳元で乾いた音がする。そろりと右目を開けると、光を反射する刃。目の前の床にナイフが突き刺さっている。

「――ひっ」

「ふふふ、駄目だよ。何か手を打たなくちゃ。じゃないと、わざわざ俺達がこれを準備した甲斐がないじゃないか」

どこまでも嬉しそうに楽しそうに愉快そうに、クルト先輩は言う。
「ほら、次行くよ?」

まるで子供をあやすような声音で言いながら、先輩はパチンと指を鳴らす。すると、またさっきと同じように壁からナイフの群集が現れた。

「――な、ま、また!」

「ゴーツ!」

クルト先輩の掛け声に呼応し、ナイフが僕を目掛けて飛んでくる。僕はまた、反射的に床にうずくまった。

――カカカカカカカッ

僕の頭の数センチ向こうに、数十本のナイフが剣山のように隙間なく突き刺さる。僕は上体だけ上げ、地面にへたり込んだまま腕だけであとずさった。

「ほらほら、早く何とかしないと。柊木君、君、学生証持ってるんでしょ？ 早く取り出さなきゃ。それじゃ何のための『魔術』か分からないよ？」

くくつと笑い、先輩はまた指を鳴らす。今度は、さっきの倍くらいの数のナイフが表れた。空中でぴたりと静止し、僕の周囲を隙なく、隙間なく囲っている。

「ふふふ、今度はもう、逃げ場はないよ？」

机に片肘をついた先輩が、僕の方を覗き込むように見ている。乖離はその横で、完全な傍観者の顔。これを止めようなんて意思は、微塵も感じられない。

僕は慌ててポケットから学生証を取り出した。

「くくくく。そう、そうだ。——じゃあ、いくよ？」

先輩が言い終わるか終わらないかのタイミングで、ナイフが動き出した。

——この状況で、僕はどうすればいい？

その切っ先が、僕に向かってくる。

——僕は。

ナイフは無機質に無感情に、距離を詰めてくる。

——どうすれば。

空気を裂く音が耳に届いている。

——僕は、僕は、僕は、僕は、僕は。

刃は、もう目の前にある。

——どうすれば、どうすれば、どうすれば、どうすれば……

……どうすれば？

そう思っている内に、ナイフが僕の額の肌に触れ、鋭い感触が脳に達し、そして——

——その部屋を出た……出ていった。

第五章「ソフト」――1

昨日のことについて、まだ僕の中では整理がついていない。

そりゃそうだ、あれはとんでもない状況だった。一生に一度あるかないか……いや、一度だつてあつてたまるか、ナイフに四方八方を囲まれるなんて。まして、それが自分目掛けて飛んでくるなんて。

三度目の飛来――額に少しだけ触れた金属の感触を思い出すと、背筋に冷たいものが走る。

もしあのタイミングでクルト先輩が幻覚を消さなかったら、ナイフは僕の脳天を貫通していたんだ。あの床のように、僕の頭にも穴が空いてたんだ。間違いなく、僕は殺されていた。幻覚のくせに刃が刺さるなんて、そんな話は聞いてない。

死の一步手前。

そんなトンデモ体験を、何の覚悟もなくしてしまった。強引で、一方的で、これ以上もないくらいひどい話だ。作為的である分、交通事故よりも性質が悪い。

大体僕は、自警委員に入りたいなんて一言も言つてない。

なのにあんな目に遭わされた。何を考えてるんだ、あの先輩は。そして乖離は。自警委員つてのはみんなおかしいのか？ そんな人間の集まりなんだろうか。

――はあ。

悲嘆のような怨嗟のようなため息をつきながら、僕は自教室の扉を開けた。

開けた視界の中には、我がクラスメイト達が談笑する風景。眠そうな顔をしつつも、各々二人三人集まって、他愛もない話に花を咲かせている。別世界に感じるほど華やいている雰囲気。いい気なもんだ。

鞆の重みを肩に感じつつ机と机の間をとぼとぼ歩きながら、木内

相手に自警委員の悪態をついてやって、この行き場のない鬱憤を晴らしてやるうかとも思った。が、どうにも気が引ける。その状況を説明するには、昨日の僕の醜態までも描写しなければならぬからだ。それに……

——僕は、教室の右側後方の席に目をやる。

窓の外を睨んでいる、栗色の髪を持つ女子生徒が目に入った。親の敵でも見るように、ひたすらに空を睨んでいる。

ふと、その女子生徒——野中乖離は、何か気配でも感じたのか首を回し、僕の方を向いた。そして昨日の帰り際に見せたような侮蔑が混じったような表情で僕を直視してくる。

……何だっけ言うんだ。

呟きと共に、胸の内に反発心が沸きあがる。激情に任せてしばし睨み返してやったが、結局僕は乖離のその気迫に負け、視線を床に落としながらすすりごと自分の席へと向かった。

乖離の二つ前の席。彼女に背を向け椅子に座っても、まだ背中に視線を感じる。そんなに睨みつけて、一体僕にどうしろって言うんだ。僕をどうしようって言うんだ。

背中に針が刺さるような感覚に耐えていると、ほどなくして教室の前の扉がガラガラ開かれた。そのドアの向こうに倉林教諭を確認したクラスメイト達は、慌てて自分の席へと帰っていく。

全員が席に着いたのを見て取ると、日直が起立、礼、着席の号令をかけ、次いで倉林先生が名簿片手に出欠を取る。そんないつも通りの職務をこなした後、珍しくジャージに身を包んでいる先生は、

「では、今日は球技大会なので、皆さん、着替えてグラウンドに集合してください」

そう言った。

……………そういや、そうだったっけ。

第五章「ソフト」―2

白球が投手の手を離れる。

勢いそのままに直進するボールは、しかし金属棒に引つ叩かれ、逆方向へ進路を変えた。そしてセカンドベースを飛び越えて二回ほどバウンドし、センターの野手のグローブにポスンと納まる。周囲で沸き立つ歓声の中、哀れな球体は「ドンマイ、ドンマイ」という掛け声と共に、ピッチャーへと投げ返された。

ライトを任されている僕は、その様を棒立ちで眺めている。

四回裏、我がチームの八失点目。

暑くはなく、かといって寒すぎもしない秋晴れの陽気のおかげで、外に駆り出されることには何のストレスもないが、立っていなければならぬのは退屈というか、疲れるというか。いい加減、早くベンチに戻りたい所存である。しかし――

――カキーンッ

また打たれた。今度はレフト。左翼手がもたもたしているうちに一塁ランナーは三塁へ。バッターランナーは一塁でストップ。

すでにへばりきっている我がチームのピッチャーは、真夏のように汗だくになりながら、なおも下手投げでボールを投じる。敵軍六番打者は強振。しかし打ち損じたおかげで、力のない打球がふらふらと上がる。これをサードが慎重に捕球し、スリーアウト目。ようやくチェンジだ。

…………ふい、長かった。

僕はとぼとぼと自軍のベンチに戻り、どさつと椅子に体重を預けた。そしてため息をつきつつ、ペットのスポーツドリンクを口に含む。

現在、球技大会真っ只中。

種目はソフトボール。

別に僕は野球経験もなく、さらにソフトボールに特に関心がある

わけでもない。中学の頃、父親に付き合わされて野球中継をちよくちよく見てたくらいだ。知識だつて基本的なことしか知らない。インターフェアとか言われると、もう分からなくなる。

では、なぜ僕がソフトボールに出場しているのか？

ひれも隠さず言つてしまえば、木内に付き合わされただけのことである。

二日間かけて行われる『那頭奈学園』の球技大会において、生徒は最低一つの種目に参加しなければならないというはた迷惑な決まりがある。そんなわけで二週間くらい前のホームルームで、誰がどの種目に参加するのか七種目の内から一つを選ばされたわけだが、その際に木内が僕のところ寄つてきて「なあ、ソフトボールにしないか？」と言つてきたのである。

その理由を聞いてみると「楽そうだから」。

サッカーやバスケのように時間中ずつと走り回つてなけりやらない競技に比べ、ソフトボールなら半分はベンチで座つてられる。持久力を必要とするのはピッチャーくらいだ。運動にほとんど縁のない人間からすれば、それはそれありがたいことである。

僕は納得して、木内の提案を承諾。これで二週間後の不安は完全に解消されたと思つていたわけだが――

――しかし現実とは違つた。

一回戦の相手は三年一組。我が一年三組だつて野球経験者が三人いて、そこまで弱いわけでもないと思うが、いかんせん相手が悪かつた。敵チームには野球部が五人。それに加え、スポーツにやたら秀でた特待生までいるのである。

結果、僕達の攻撃はさつさと終わり、相手の攻撃はやたらと続く。おかげで、僕達の労働と休憩の比は八対二くらいまで落ち込んでいる。ほとんど休めないし、外野を任されたおかげで打球が飛んでくるたびに走り回らなければならないのである。目論みは最悪のパターンをもつて崩された。

「まあ、バスケに出てるよりはマシだろう」と自分に言い聞かせな

がら、飲み終えたペットボトルを脇に置くと、その逆サイドにどさつと座る短髪の男。息を吐きながら、

「しっかし、ソフトボールってのも案外大変なもんなんだなあ」

呆けた顔で言ってくる。

「……おい、木内、他人事のように言っな。僕はお前が『楽だ』っていうから付き合ってるんだぞ」

「つつたつて、こりや想定外だろ。相手がいきなり優勝候補なんてむしろさつさと終わっていいじゃねえか」

「まあ、そりやそうだけど……」

本競技は完全なトーナメント制。負ければそこで終わりである。さらには、時間の都合で一試合五回までと規定されている。つまりあと一回守備につけば、この二日間の僕の職務は終わりだ。あとはゆつくりと、他の競技の観戦がてら日光浴を楽しんでいればいいだけである。

「ストラ〜イクツ！ バッターアウトツ！」

カードをつまんでいる右手を振り上げ、主審を務める体育委員の男子が高らかに叫んだ。ボールはキャッチャーからピッチャーに返され、三番バッター坪井はすごすごとこちのベンチに帰ってくる。ヘルメットの下は、打てなくても仕方ないだろ、と言わんばかりの表情だ。

「しかしまあ」

僕はグラウンドをぐるっと見回しながら、呟いた。

「審判がみんな学生証を握り締めてるつても、変な感じだよなあ」

「しょうがないだろ。『魔術』の使用はご法度なんだから。ああやつて監視しなけりゃ」

木内は肩をすくめながら言う。

「『学生証』が配布された最初の年の球技大会はすごかつたらしいぞ。ソフトボールでも消える魔球、増える魔球、燃える魔球、金属バットをへし折る魔球、キャッチャーを吹き飛ばす魔球、審判まで吹き飛ばす魔球、さらには消える打球やら消えるランナーまで出て

きたって話だ」

「……少年漫画並みだな」

「『魔術』がありやあ、造作もないことだろうよ。本当にボールを消しちまったらゲームが続かなくなるが、見えなくなったり、拡大縮小するくらいなら割と簡単だ。あとは、ランナーの周りだけ時間経過を遅くしたりとかな」

「……だから、ああいう監視が必要ってことか」

「そういつこった。審判が『サーチ』してるおかげで、『魔術』を使えばすぐ知られちまう。バレれば不戦敗。てわけで、健全なスポーツ大会が実現されてるわけだ」

言いながら、木内は腕を組んでうんうん頷く。

「ストラ〜イクツ！ バッターアウトツ！」

またもや主審の声。うちの四番バッターまで三振に倒れた。こりやもつ、うちのチームは誰もこのピッチャーを打ち崩せないだろうよ。

「はっ、さすがは一本木先輩だよ。あんな球打てねえよ」

感心と自嘲が入り混じった声で言う木内。

「……一本木先輩？」

「ああ。知らねえか、一本木先輩？ ほら、あのピッチャーだ」

木内はアゴでマウンドの方を指す。僕はそれに従い、そっちに顔を向けた。

小山の上に立っている女子生徒。

すらっとした体躯に上下ジャージを着込み、腰の辺りまでのぼした髪を振りながら、無表情でホームベースに向かって速球を投げ込んでいる。乖離ほどではないがやや鋭い目つきに、我の強そうな雰囲気を感じる。どちらかというと凜々しい顔つき。男装してステージに立てば劇の主役を張れそうなルックスである。

「……あの人か？」

「ああ、あの人が一本木先輩。スポーツ特待生にして、現生徒会長だ。……この前の全校集会でも挨拶してたろ。さてはお前、寝てた

な？」

「立ったままどうやって寝ろって言うんだ。ただ………ステージを見てなかったただだよ」

「ステージも見ないで、お前は一体何を見てたんだ？」

「隣ですだれがうるさかったんだ」

「……なるほどねえ」

木内はやたらにむかつくにやけ顔。………まあ、その話は置いていて、

「野球部を差し置いてピッチャーをやってるのはどこの誰だと思ってたが、そんなスーパーパーな人だったわけか」

「そういうわけ。文武両道な麗人様。男だけでなく女にまでおモテになる」

言われてみれば、敵チームのベンチ脇の応援団スペースには、やたら女子生徒が多い。一本木先輩が投げ込むたびに、黄色い声援が響いている。こっちの応援スペースは、閑古鳥すら見当たらないつてのに。

「ストラ〜イクツ！ バッターアウトツ！」

五回表、三回目の主審のジャッジが聞こえてきた。クリーンナップが三者三振とは、うちにはもはや立つ瀬がない。

僕は「やれやれ」と言いながら重い腰を上げ、グローブ片手にグラウンドへ歩き出した。

第五章「ソフト」―3

最終的なスコアは、十二対〇だった。

もちろん〇が僕達のチーム。ここまで圧倒されれば、悔しさなんて微塵もない。

敵方の勝利が決まった瞬間、キャッチャーをしていた人（驚くことに女子である）が一本木先輩のところへかけていき、軽く抱擁して喜びを分かち合っていた。敵ながら何とも微笑ましい図である。負けてよかったとさえ思えてくる。

総計打者三十二人を相手にすることになり、試合後は肩で息をしつつ口数まで減った我がチームの投手、西岡に対しては、チームのメンバー全員が一個ずつ購買のパンをおごることで労うことにした。負け投手ではあるが、このゲームで一番頑張った選手であることは間違いない。

そしてそんな事後処理（？）を終えれば、僕は晴れて自由の身だ。食堂で昼食を食べ終えた後、木内がバスケでも観戦しようと誘ってきたが、僕はそれを固辞。やっぱり自由の方が恋しい。別の友人が奮闘しているので応援しに行かなければならない木内とは別れ、僕は目的もなく一人でぶらぶらと校内の散策を開始した。

犬も歩けば何とやらで、途中ですだれにからまれるのではないかとも思っていたが、夕方まで彼女は現れなかった。後で分かったことだが、彼女が出場したバレーボールがやたらに勝ち進み、休む間もなく一日中ゲームをしていたのだそうだ。

おかげで、僕はすがすがしい昼下りを満喫できた。

いくら閉鎖されている場所とはいっても、風や日差しには関係ない。グラウンドの隅に立っている並木は紅葉しているし、空も高い。風も気持ちいい。

どんなつもりで作られたのかは知らないが、グラウンドの端に隠れんぼでもしているようにぼつんと置いてある日時計を見ると、二

時半。あと二時間は暇だ。

並木の下に置いてあるベンチに腰掛け、風に舞うイチヨウを眺めながら、僕はただボーッとしていた。

何も考えずに空を見上げること小一時間。あくびをしながらいつそ昼寝でもしようかと思ったとき、ふいにこっちに近づいてくる人がいた。落ち葉をさくさく鳴らしながら進んで来る。

よく見ると、それはあるうことが先ほど僕が二連続三振を喫したバッテリー。一本木先輩と、さっきの試合でキャッチャーをしていた女子生徒だった。

談笑しながら並んで歩いてたお二方もこっちに気付いたようで、僕の眼前を横切る間際、

「やあ……ええと、君は……第一試合でライトを守っていた子だね」
柔らかな微笑を作り、一本木先輩が僕に話しかけてきた。

僕は「よく覚えてるなあ」と思いつつ、

「あ、はい」

「君はあまり気にしていないようだが、しかしあのピッチャーの子には落ち込むなと言っておいてくれ。……あの子の球も、なかなかしぶとかった」

「え？ あ、はい。わかりました……伝えておきます」

半ば緊張しつつ僕がこくこく頷くと、一本木先輩は優雅な笑顔を僕に向けてきた。そして首を回し、

「……どうする、りえ？ ここで少し休むか？」

「ええ、そうしましょう。紅葉もきれいだし」

一本木先輩の問いかけに、先輩の連れであるセミロングの髪の女子（りえ先輩？）はそう答え、隣のベンチを指差した。

「あそこに座りましょう」

「そうしようか」

お二方は僕から数十センチ離れている隣のベンチに並んで座った。秋だって言うのに二人の後ろに花畑が見えるのは、僕の目の錯覚だろうか？

隣から聞こえる景色がどうだの紅葉がどうだのというお嬢様のデパートのような語らいを聞き流しつつ、僕がいよいよ夢の中に潜り込もうとした瞬間、

「時に……君」

やや大きめの声で、一本木先輩が再度僕に話しかけてきた。僕は慌ててまぶたを開け、

「は、はい？」

「君達のチームには……野球経験者はどれくらいいたんだい？」

「へ？ 野球経験者ですか？ ええと、三人です。ピッチャーとキャッチャーと、あとショートを守ってたやつです」

「なるほど……三人で、あのくらいの力なのか。準決勝の相手には六人経験者がいるというし……そろそろ苦しくなってくるかな……」

あごを押さえながら、うーむと考え込む一本木先輩。

「……準決勝まで勝ち上がったんですか？」

「ああ、おかげさまでね。明日もまた朝から試合だ」

一本木先輩は顔を上げ、僕の顔をにやりと見やった。

……そりゃそうか、優勝候補だし。一本木先輩の球は、現役野球部だってそう簡単に打てるとは思えない。加えて野球部が五人もいれば攻撃力も十分。負ける要素なんてないだろう。

「……そう言えば、自己紹介がまだだったかな？ 私は一本木^{はね}羽根音^{おと}という者だ」

「ええ、聞いてますよ。生徒会長なさってるんですね？ えと、僕は柊木粉雪って言います」

「……柊木……粉雪？」

いきなり、一本木先輩が目を見開いた顔をした。そして僕の顔をじろじろ見ながら、

「ふむ……なるほど……君が柊木君だったのか」

「え？ 僕のこと知ってるんですか？」

「ああ……知っている。……君のことは奥沢から聞いてるよ」

……奥沢？ 誰だ？ ええと、奥沢、奥沢、奥沢……

…クルト先輩か！

「……え、何で……クルト先輩が……クルト先輩から聞いてるって……え、何で……？」

「ふ。意外かね？ 別にこれは不思議なことじゃない。そう——

——私も自警委員に属しているのだよ」

一本木先輩はしたり顔で言い放った。

「………何だ、それ？ 生徒会長なのに、委員会に入ってるのか？ というか、自警委員の会長はクルト先輩のはずだろ？ だったら、この先輩は——

「羽根音、もう行きましょう」

「ああ……行こうか」

話を遮るように言ってきたりえ先輩にそう答え、ベンチから立ち上がる一本木先輩。

「ふ。では………また」

そう言い残し、一本木先輩はりえ先輩と並んで去っていった。

僕はただ呆然と、二人の後ろ姿を眺める。彼女らが去った後には、ただ枯葉が舞い散るばかり。カサカサ言う音だけが残っている。

「………一本木先輩が自警委員だなんて、そんなの不意打ちだ。

『自警委員』——その言葉を聞くだけで、昨日の出来事が脳裏に浮かぶ。クルト先輩の嘲るような笑み、乖離の吐き捨てるようなセリフ——そして、一瞬だけ額に触れた冷たいナイフの刃の感触。

僕はベンチの背もたれに体重を預け、空を見上げた。

「くそつ、せつかく忘れてたのに………思い出しちゃった」

第六章「デリート」―1

夢と欲望の境界ってのは、どの辺りなんだろうか？

例えば将来の夢を聞かれたときに、「プロ野球選手」と言えば夢らしく聞こえるが、「プロ野球選手になって何億円もの契約金を勝ち取る」と言えば、欲望の域に入っているように感じる。逆に「大金が欲しい」と言えばそれは欲望以外の何者でもないが、「大金を稼いで会社を興す」と言えば、それは一種の夢であると言えなくもない。また、例えば目的をただの金稼ぎに据えていたとしても、それがとても恵まれていない環境で育った人の言うことなら、やはり「夢」と呼んでも差し支えないのではないだろうか。

結局、これは目的云々、手段云々とは関係ない話なのかもしれない。「欲望」と書いて「ゆめ」と呼ぶような輩だって世の中にはいるもんだ。望みを叶えるという部分では、違いはないのだろう。

しかし、そんな理屈ばった定義から離れて、単なる字面のイメージだけで考えれば、その違いは一目瞭然のように感じる。

一般的に言って、「夢」は純粹でロマンみたいなものを含んだ響きを持っていて、「欲望」はそこはかとなく世俗的な雰囲気をもち出している。つまり、ロマンがあれば「夢」、なければ「欲望」というところだろうか。

……だったら、これは「夢」と呼んでいい願望だろう。

誰だって一度くらいはあるはずだ。自分が好きな食べ物を目の前にして、「これがもつとたくさんあれば」と思ったことが。そういう「夢」を見たことが。

そういう「夢」は、叶わないからこそ「夢」のままで終わるのが通常であり、それを叶えるには、たとえば魔法や超能力みたいな非科学的なものを望まなければならない。そしてそんなものは日常的な世界には存在せず、だからこそ人はそれを諦めていくわけだが――

——しかし、僕にはそれがある。

「夢」があり、手段があるのならば、それを叶えないのは愚の骨頂ではないだろうか？ 手を伸ばさないのは、一步を踏み出さないのは、愚かなことではないだろうか？

だから、僕は今ここで、これを試そうとしているのである。

ベンチに座る僕の膝元、そこにはシュークリームが置いてある。今さっき購買で買ってきたものだ。昼食で食べたカレーも腹の中で消化され尽くして、そろそろ空腹感が湧き上がってきたこの時間帯、気を抜けばそのまま手を伸ばしてしまいそうなのを我慢しつつ、僕はそのシュークリームを見つめている。

そして僕は覚悟を決め、学生証を取り出した。

小麦色の生地の上でカードを振りながら、僕は巨大化したシュークリームを細部まで真剣にイメージしつつ、

「巨大化せよ」

と呟いた。すると、膝元のシュークリームはむくむくとその体積を大きくしていき、さっきの倍くらいの大きさに達した、ところで

——ぺちゃん……………プスー……

潰れてしまった。

「……………あああああー……………」

手にとって見ると、それはもうぺらぺらの小麦粉の塊でしかなかった。量は増えたように見えるが、ふんわりなんて形容はとてできない。中からカスタードクリームが漏れている。

仕方なく僕は、それを口に入れてみた。

………ばさばさだ。クリームが甘いだけ。さっきまで期待していた食感とは、程遠いにも限度がある。

「やっぱり、これも駄目だったか……………」

僕は過去に二度、プリンとハンバーグで同じように試したことが

あるが、両方とも失敗だった。プリンは水分が吹っ飛び、ハンバーグはボロボロ崩れてしまった。今回僕がこれを校舎の脇のベンチの上で行ったのも、前回ハンバーグが床に飛び散って掃除が大変だったからである。

巨大化の『魔術』は、成功するものもあるし、しないものもある。その原理については、物理の教師がジョウキアツやらナイブアツリヨクやらセندانオウリヨクやらという言葉を使って説明してくれたことがあるが、僕にはとうてい理解できなかった。とにかく、何があるか分からないから、そんなことに巨大化の『魔術』は使うなど言われてはいるのである。

「……はあ」

小麦粉の塊を噛みながら、この実験には多大な犠牲を払ってしまったとしみじみ後悔していると、

「……何やってるの？」

女子の声が聞こえてきて、振り返ると、そこに立っていたのは風宮すだれだった。

「何食べてるの、それ？ ん？ そこに落ちてる袋は、シュークリームのだよね？ それにしては大きいような。………まさか粉雪君、『魔術』でシュークリームを巨大化させたりしたとか？」

……まったく、勘が鋭い。

僕はシュークリームを飲み込みながら、

「………そうだよ」

「あははは。まったくもう、意地汚いんだから」

……さっきまでの前置きを、一言で否定しやがった。

「教室行ったら粉雪君がいなくてどこに行っただんだろうと思ってたら、そんなことしてたの？ うふふ、可愛いなあ」

「……お前こそ、授業が終わった後すぐいなくなったじゃないか。机に鞆置いたまんまで。どこに行ってたんだ？」

「んん？ あたしの行ったところが気になるの？ いよいよあたしに興味が出てきたかな？」

からかうような顔で「ん？ ん？」と僕の顔を覗き込んでくるすだれ。

……そんなんじゃないって。

僕が顔の横で掌をぶんぶん振っていると、

「ま、それは秘密だね。粉雪君だってあたしにいつも見てるウェブサイトを教えてくれないし、これでおあいこだよ。……もし君が教えてくれるんなら、あたしも教えるけど？」

「やだよ」

僕は即答しつつ、ベンチから立ち上がった。そして自分の寮へと足を向ける。

いつもの砂利道を、いつものようにすだれと並んで歩きながら、

「……あ、そうだ、こないだ粉雪君に借りた本、明日返すよ。そろそろ読み終わりそうだから」

「……ああ、あのSF小説ね」

「うん。なかなかおもしろかったよ。オチが斬新というか、意地が悪いというか。その辺、粉雪君らしいね」

「……僕らしいって、何だよ？ 僕が意地悪だって言いたいのか？」
僕は疲れたようにツツコんだ。

まあしかし、すだれが意図してることは分からないでもない。一筋縄ではいかないというか、ひねくれているというか。……とどのつまり、へそが曲がってるってことだろう。それは、すだれにだって言えることだと思うが。

「あたし、粉雪君が選ぶ本ってけっこう好きなんだよ？ 王道的なものが嫌いというか、王道を敵視してるようなのが多いよね。邪道は邪道なんだけど、外れがないって言うか、当たりしかないって言うか、外れと当たりの境目が分からなくなる感じだよ」

「どんな感じだよ」

と言ったところで、いつもの丁字路に差し掛かった。

「じゃあ、また明日ね。何か新しい本買ったらまた貸してよね。じゃあね」

今まで何十回見たか知れない手を振りながら去っていくすだれの姿を、僕は何ともなしに眺めていた。

そしてこれも毎日の日課のように、垣根の奥の方へ視線をやったとき、

「……ん？」

最初、その違和感が何なのか、気付けなかった。

視線が空ぶったとでも言うのだろうか？ 自分が何でそっちの方向を見上げたのか、分からなくなった。そして昨日の同じ時間の自分の行動を思い出し、そのときに見た同じ場所、同じ方角の景色を思い浮かべながら、今見ている情景と何が違うのか一つ一つ思い返していく。

そして、ようやく一つのものに行き当たった。

昨日あって、今はないもの。

——時計塔が、消えていた。

第六章「デリート」―2

「おい、すだれ！」

僕は走りながら、今まさに女子寮の入口のドアノブに手をかけようとしていたすだれを呼び止めた。

すだれは振り返りながら、

「ん？ 何？ 粉雪く——わっ？ ちょっと、何？ 急に肩つかんで。そんな、ちよ、もう、やあだ、こんなところで、人に見られちゃうよ」

「おい！ あの、三叉路のところ、あそこに時計塔があっただろ！ あれ……あれどうしたんだ！」

「もう、急に、強引なんだから——って……え、何？ とけいとう？ 何それ？」

首をかしげるすだれ。

「ほら、あっただろ！ あの、レンガ造りで、上に時計がくつついてるやつ！ あのねじ巻き式の！」

「……へ？ レンガ造りの……時計？ 何それ？ あたし、そんなの知らないよ？」

すだれはきょとんとした目で僕を見ている。まるで言っている意味がわからない、というような表情だ。

「知らないなんて、んなわけないだろ！ お前だってこの前、あれで時間見てたじゃないか！」

「時間見てた？ ……えーと、この前って、いつ？」

いつだなんて、そんなの正確になんか覚えてない。

僕は三叉路のところの垣根を指差しつつ、

「だから、ほら、あそこだ、あのT字路！ あそこに、モニュメントがあっただろ！ レンガ造りで、時計がついた——」

「モニュメント？」

すだれは口をへの字にして、からかう仕草も、たばかる声音も、

悪戯な表情も見せず、僕の顔を直視して、

「あそこには、ずっと前から何もなかったよ？」

落ち着いた口調で、そう言った。

僕の頭は、余計にこんがらがる。

「——くっ」

僕は後ろを振り向き、駆け出した。

何だ？ 何だ？ 何だ？ 何なんだ、これは？

そんなわけないだろ。あそこに何もなかったなんて、ありえないだろ。

僕はちゃんと覚えてる、覚えてる、覚えてる。しっかりと覚えている。

僕は毎日あれを見上げてたんだ。それを日課にしてたんだ。

あそこに、確かにあったんだ。あったはずなんだ。

自分を忘れてくれと訴えているような、

世間から距離をとっているような、

悪意もなく善意もなくただ淡々と回り続ける、

レンガ造りで、ねじ巻き式の——時計塔が。

確かにあったんだ、あったはずなんだ。

それなのにありえない、ありえない、ありえない。

あそこに何もなかったなんて、そんなのはありえない。

無心で走っていた僕は、いつの間にか自分の教室——一年三組にたどり着いていた。

扉を開けると、そこにはまだ若干名の生徒が残っている。

僕はその中から、一番見慣れた顔をみつけ、そいつのところへ寄っていった。

「おい、木内！」

「ん？ 何だ、粉雪？ お前、帰ったんじゃないのか？ 忘れ物か？」

友人三人と談笑している最中だった木内は、顔を上げてこっちを振り向く。

「なあ、あの寮のトコの前の砂利道の、Ｔ字路あるだろ」

「Ｔ字路？ ああ、あるが、それがどうした？」

「その交差点のところの垣根の奥に、時計塔があっただろ？ 覚えてるか？」

「時計塔？」

木内は首をひねり、

「何だ、そりゃ？ 俺はそんなの知らねえけど」

こいつも……………か。

「……………だって、あっただろ。レンガが積みあがってて、その上のほうに時計盤がくっついてるやつ。僕の倍くらいの高さの」

「レンガ？ ……悪いが、レンガでできたもんなんて、俺はこの学園で一つも知らないぜ？ ましてあんな、毎日通ってる道の側ならなおさらだ」

……………くつ、こいつも話にならん。

僕は再度教室を見回し、残っているメンツを探した。そして教室の後方、そこに座っている乖離と目があつた。

「おい、乖離！」

「え、な、何？」

いきなり呼ばれて驚いた顔をする乖離。僕はそっちへ近づいて行き、

「お前は覚えてるか？ あのＴ字路のところにあった時計塔」

「え？ それは、私も知らないけど……………」

「だって、ほら、あの、お前に呼び出されたとき、あのとき僕が見上げてただろ。あの時計塔だ」

「……………え？ 呼び出し？ 私が？ あなたを？ そんな覚え……………ないけど……………」

乖離は小刻みに首を横に振った。

……何だ、こいつ？ シラを切ってるのか？ —— いや、あれは内密なことだからか。こんな人の耳があるところで、大っぴらに話すことじゃない。だからこそ、手紙なんて回りくどい手段で僕を呼び出したんだ。しかし——

「——でも、時計塔は覚えてるだろ？ レンガ造りで、僕の倍くらいの高さで——」

「こ、粉雪君……」

乖離は僕の顔を覗き込み、僕の目を真っ直ぐ見つめ、そして真顔を作って、

「……だ、大丈夫？ ……どこか、悪いの？ ……保健室、連れてこつか？」

不安げな表情で言ってくる。

……くそっ！ 僕は心配されるいわれなんてないのに。

僕はその視線から顔を背け、後ろに駆け出した。

教室を出て、廊下を走り、階段を駆け下りていく。

……何なんだ、みんなして？

僕をからかっているのか？

からかって遊んでるのか？

からかって楽しんでいるのか？

それにしては、みんな顔が本気だったが。

しかし、でも、だからって、ありえないだろ。

僕はこの半年間、ずっとあれを——

——眺めてきたんだ。

——見上げてきたんだ。

——見つめてきたんだ。

……夢だったとでもいうのか？

でも逆に、僕には時計塔がないあの道なんて、今日以外に記憶がない。

じゃあ、あれは『魔術』のせいだとか？

あれを『魔術』で消したっていうのか？

そんな、何でいきなり？

意味がわからないだろ。

意思がわからないだろ。

意義がわからないだろ。

意図がわからないだろ。

……くそっ！

本当に、本当に、本当に、本当に、わからない！

僕は再び、三叉路のところにたどり着いた。

時計塔は、やっぱりない。時計塔があつたはずのところだけ、ぽっかり空間が空いている。

ふと、その近くに少しだけ土が凹んだ部分を見つけた。ちょうど、靴の裏側くらいの大きさ、そして形。落ち葉の隙間からのぞいている。

………そうだ、あれは僕の足跡だ。

やっぱり僕はあの日、その垣根の奥に入つたんだ。入って、時計塔を見上げたんだ。触つたんだ。ねじを回したんだ。あれは夢なんかじゃない。現実なんだ。実際に、昨日まで、あの時計塔はここにあつたんだ――

――あつたのに、なくなつたんだ。

………何なんだよ、これは。

第七章「スクリーン」―1

時計塔が消えてから、今日でちょうど二週間が経ったことになる。あの後、担任倉林教諭にも聞いてみたが、「そんなものは知らない」の一言でつつばねられた。それでも食い下がって「だったらこの学校の図面を見せてください、もしくは工事費の決済でも」などあまりにしつこく聞きすぎたため、結局先生にまで色々心配されることになってしまった。職員室で、僕について変な噂が流れてなければいいけど。

しかし今までの十四日間、変わったことはそれだけなのである。

僕のどこかがおかしくなってしまったとか、変な『魔術』が発動しているとか、その後のことについてもそれなりに覚悟はしていたが、他には変なこととは何一つ起こっていない。いまだに僕は、しない閉鎖された高校一年生ライフを継続中なのである。

だから余計に、分からなくなる。

朝も昼も夜も授業中も休憩中も夢の中でまで、僕は時計塔が消えたことについてとくとくと考えていた。頭をひねり、首をひねり、過程の過程の過程まで分析し、仮定の仮定の仮定まで推測していた。

しかし結局、その答えは諦めるしかなかった。

いかんせん、理由も目的も何一つ見えないのである。考える取っ掛かりが掴めない。もう僕に、この謎に立ち向かう手立てはなかった。

「――はあ……………何なんだか」

と廊下を一人とぼとぼ歩きながら、うつむきつつ嘆息したところで、

「あ、粉雪君っ」

前の方からお呼びが掛かった。そっちに視線を移すと、廊下の向こう、眼鏡の下にテンション高めの笑顔を張り付かせたすだれが、こっちへ駆けて来るところだった。

「ちょうど良かった。ね、ね。今日の夕方あたり、暇？」

行き交う人たちをぴょんぴょん避けながらこっちに寄って来たすだれは、言葉に質量があつたら吹き飛ばされてしまいそうなくらいのイントネーションで言うてくる。

「……何だ、藪から棒に？　暇だったら何だって言うんだ？」

「あ、暇なんだね、よかった。実はね、うちの映画研究部がね、自主映画を上映するらしくてさ。西校舎の視聴覚室で。ほら、パンフのここ、ここ。書いてあるでしょ？　でね、しかもこれがまた幼馴染の恋愛ものみたくつてさ、もーこれは見るっきゃないって感じて

――

「――いや、僕はまだ、暇とは言つてな――」

「――だからさ、せっかくだから一緒に見に行こうと思つて。こういうのって一人で見るのもアレでしょ？　だから二人で見ようよ。でもあたし、フリーマーケットでちよつとお買い物しときたいし、占いにも行つてみたくてさ、そこまで粉雪君を連れまわすのも悪いじゃない？　んで考えたんだけど――」

「――いや、だから僕はまだ――」

「――上映開始が四時からだからさ、そうだねえ、三時五十分あたりに、西校舎の玄関で待ち合わせつて事でどうかな？　いや、三時半にしとこつか。いい席取られちゃうと困るし。うん、そうしよつか。じゃあ、三時半に西校舎の玄関前に集合ね？　いい？」

ここまで言い終えると、すだれはこれ以上ないくらいの満面の笑みを僕に向けてきた。これからの人生にはもはや希望しかないと思ひて疑つていない純粹無垢な子供のよな視線。その瞳の輝きに、僕は顔を背けずにはいられなくなり、

「……わかつたよ」

息を吐きながら答える。

「よかった。それじゃ、また夕方ね」

そう言って、スカートを翻しながらフィギアスケートのようなターンを決め、すだれはすったかと去って行ってしまった。

「……ま、いつものことだ」

呟きながら、僕は手元のパンフレットに目を移す。そこには、でかでかと『那頭奈学園文化祭案内』と書いてある。

そう、今日は文化祭なのである。

しかし、この『那頭奈学園』の文化祭は、一般的な高校の文化祭とは趣が異なる。

普通、文化祭と言えば生徒が露店を出し、地域住民が遊びに来て、ワイワイガヤガヤ日常とは違った華やいだお祭りを催すものである。だが、この閉鎖された学園で「ワイワイガヤガヤ」なんてものは実現さるわけがないのだ。

結局今日も、閉鎖されていることには変わらない。

外来の客なんて誰一人いないのである。つまりこの『那頭奈学園』の文化祭は、文化部の部員達が他の学生に向けて日頃の活動の成果を発表する、いわば発表会みたいなものなのだ。

よって今日催されるイベントは、映画研究会の自主制作映画上映や美術部の絵画展、合唱部や合奏部のコンサート、軽音楽部のライブ、演劇部の劇の上演、家庭科部の喫茶店、囲碁将棋部のトーナメント戦など。露店はない。

地味と言えば地味だが、それでも普段に比べれば少しは活気づいているもんだ。ある程度は学生のテンションを上げるに足るイベントなのである。その熱に直に当てられたのが、さっきのすだれだったりするのだが。

木内は腕まくりしながら将棋のトーナメントに参戦しに行つてしまい、将棋のルールがまったくわからない僕は「勝手に行って来い」と送り出したため、現在一人でパンフ片手にウロウロする羽目にな

っているのである。

「……さて、どこに行こうかな？」

そう呟きながらイベント開催場所の見取り図を眺めた僕は、ちょうど腹時計が鳴ったことに気づき、

「——まずは、家庭科部か」

第七章「スクリーン」―2

僕は擬似喫茶店と化した家庭科部の部室の、窓側の一番奥の席に座った。

これは別に僕が隅っこが好きだからとかそういう理由ではなく、単純にそこしか空いていなかったからである。まだ昼前の十一時だというのに、なかなか混雑している店内。早い時間に来ておいてよかった。

僕が落ち着く間もなく、制服にエプロンという格好で僕のテーブルに水とメニュー表を持ってきたのは、どことなく見覚えのある女子生徒だった。しかし名前は知らない。確か隣のクラスにいた人だったはずだ。二組か四組かは忘れたが。

当然ながらそんなうる覚えな人と会話も弾むわけもなく、僕は

「じゃあ、焼きそばとソーダ」

と、胃袋と舌が欲したメニューを告げるだけに留めておく。この店員も店員で、

「かしこまりましたー」

と、やや明るく、そして当たり障りなく言って、奥の準備室――恐らく調理場になってるんだろう――に引っ込んでいった。僕は早速手持ち無沙汰になり、コップの水を口に運ぶ。

ふと窓の外を眺めると、グラウンドの一角に人だかりができていた。良く見ると、その中心には顔を白塗りにして赤鼻をつけ、一輪車にまたがりながらお手玉をしている人がいる。あからさまなピエロスタイル。大道芸研究会だろう。

一日道化師は化粧でもって笑顔を引っ付けているが、それを囲んでいる人たちもなかなか楽しんでるようだ。技を披露するたびに、ここにも拍手が薄く聞こえてくる。どこぞのテーマパークでもよく見られる定番的な催しではあるが、しかし学校出で見るとまた違う発見があるのだろう。僕も後で見に行ってみようか。

そんな風景を何ともなく眺めていると、

「お待たせしましたー」

ようやくメニューが来た。

かかった時間は十分程度。思ったよりは早かった。まあ、メニューの数もそれほど多くないし開店してそんなに時間も経ってないから、下準備が万全だったんだろう。

別のテーブルに注文を取りに行った店員さんを尻目に、ソースがほどよくからまった焼きそばにいいよ僕が箸をつき立てようとした瞬間、

「ここ、いいかな？」

そう言つて、僕の向かい側の椅子に手をかける人がいた。聞き覚えのある澄んだ声だなと思いつつ顔を上げると、

そこにいたのは一本木先輩だった。

「……へ？ あ、どうぞ」

「ふ。悪いね。他に席が空いてなくて」

腰まで届く黒髪を振りながら、滑らかな動作で引いた席に座る一本木先輩。その淀みのない動きに、一瞬ここが一流レストランに見えた。

僕は焼きそばを口に運びつつ、

「……先輩もお昼ですか？」

「ああ、りえが出る芝居が十二時から始まるからね。それまでに済ませなければならんだ」

……りえ先輩、演劇部だったんだ。口調からして中世ヨーロッパの貴族なんかはまり役っぽいな。お嬢様とかお姫様とか。……キヤッチャーやってたけど。

「あ、あの、いらっしやいませ。ご、ご注文は、な、何にいたします？」

さっきの女子生徒が、やや緊張の面持ちで一本木先輩に水とメニュー表を差し出してきた。手が震えてるせいだろう、水の液面が動いている。………と言うか、僕には「いらっしやいませ」なんて

言わなかったくせに。

渡されたメニューをさらっと眺めた先輩は、

「じゃあ、ナポリタンを頼むよ」

「あ、はい。かしこまりました」

そう言つて、ぺこつと一礼しつつ回れ右して、店員さんは調理場へそそくさと入っていった。………僕にはお辞儀なんてしなかったくせに。まあ、それはいいけど。

先輩はコップの氷をからんと鳴らし、水を一口含んでから、

「ふ。どうだい、柊木君？ 文化祭は楽しんでるかい？」

「え？ いや、まあ……これからって感じですけど……」

こういうお祭りで久しぶりに会った知り合いに聞かれることトップスリーくらいに入りそうな質問に僕が曖昧に答えると、一本木先輩は僕の顔をしばし眺め、そしてフンと鼻で笑つて、

「……ふ。前もそうだったが、何ともつまらなそうな顔をしてるね」

「え？ そ、そんなことは……」

「積極性の足りない若人なんてのは今時珍しくもないが、しかし君には消極性すら欠けている気もするよ。拒否するのも面倒くさいという感じだ。そんなにこの学園の生活はつまらないかい？ 仮にも君は一年生なんだ。こんな逸脱した環境に投げ込まれたばかりなら、もの珍しさに色々首をつっこみそうなもんだが。この学園、公な説明はなされてないが、けっこうおもしろい発見が転がっているものなんだよ？」

「……そうなんですか？」

「ああ、そうだとも」

一本木先輩はゆっくりと、縦に頷く。
と、

「な、ナポリタンお待たせしました」

裏返った声で言いながら、さっきの女子が一本木先輩の前に皿を置いた。注文してから三分もたつてない。僕の半分以下の所要時間だった。僕と美形生徒会長には、ここでも差がつくのか。

皿を受取った先輩は、彼女に「ありがとう」と微笑を返しつつフオークとスプーンを握った。そして再度僕の方に顔を向けて、
「『魔術』があるだけでもおもしろいイレギュラーではあるが、それだけではなく、『魔術』があるからこそそのシステムだってある。そうだな——」

先輩は優雅にパスタを口に運びながら、窓から見えるグラウンドの隅に見える小屋をアゴと目線で指し示した。

「——例えばあの倉庫。あの中に何があるか知ってるかい？ 実はあそこには『魔術』を使った発電機が置かれているんだ」
「発電機？」

「そう。そうだ。『魔術』さえあれば燃料を消費することなく、そのまま電気を生み出すことが可能だからね。だから誰か一人が——実際には交代制でやってるんだが——電気発現の『魔術』を使っていれば、電気を溜めることができる。何を隠そう、この学園の消費電力の六十パーセントは、あそこで作られた電気でまかなわれているのだよ。……まあ、なぜ六十という中途半端な数字かというと、まだまだ電気の生産量が追いつかないからなんだがね。実用化への道はまだ遠いというわけだ。しかし節電さえすれば、この学園だってもって足りないこともないそうだよ」

「……へへ。そうだったんですか」

確かに僕も、『魔術』で電気が作れるならそれでエネルギー問題だって解決できるんじゃないかと思ったことがあった。しかしまさか、それがすでに実現されてたとは。結構驚きだ。

「ふ。この学園にも少しは興味が出てきたかい？ だったら、これからりえの演劇を見に来ないか？ きつと楽しめるぞ」

「……演劇……ですか？」

「ああ。劇の演出で『魔術』を使ったりしているんだ。球技大会ではフェアプレーのために禁止されてたが、出し物ならば別に問題ない。例えば雨のシーンで実際に雨を降らせたり、雪を降らせることだってできる。空だってロープ無しで飛べるわけだ」

……なるほど、そういう使い方もあるわけか。

「どうだ？　一緒に見に行かないか？　りえの演技なら、劇としても君を飽きさせないことは私が保障するよ。解説も、せん越ながら引き受けよう」

「え？　でも、一本木先輩とだなんて。しかも二人で、ですよ？　そんな……………せ、先輩はいいんですか？」

僕が恐る恐る尋ねると、先輩は絵画のような微笑みを浮かべながら、

「ふ。ああ、もちろん——君なら問題ないよ」

第七章「スクリーン」― 3

りえ先輩の演劇については、僕に感想を求めないで欲しい。

とりあえず物語として違和感なく楽しめたが、しかしそれ以上に僕が述べられることは何もないのである。いくら一本木先輩の解説付きとは言え、今まで一度も演劇を見たことがないのに「今の間の取り方は秀逸だね」とか「今のセリフ、アクセントが弱いね」などと隣で言われても、「はあ、そうなんですか」としか言いようがない。それよりも、暗闇の中で美人さんに耳元で囁かれるという状況の方が僕にとって一大事なのである。

付け加えて言うなら、劇が行われる体育館までの道すがら、一本木先輩と二人並んで歩いている最中に、周り（特に女子生徒）からの視線が痛かったのも、僕にとって少なからず問題だった。僕を見る目つきがいやに鋭いのである。まあ、僕が一本木先輩と釣り合うべくもなく、ただの付き人一号みたいに見えていたことだろうが、それでも生徒会長の半径数十センチ以内にいることが許せなかったりするんだろう。

劇が終わった後、りえ先輩を激励に行く一本木先輩に「ありがとうございます」とお礼を述べた僕は、一人、体育館を出た。

そして向かった先は、西校舎の入口。

数週間前に見たガラス張りの入口を見ると、あの嫌な思い出が勝手にフラッシュバックして、気分が萎えてくる。自然と、進む足も止まってしまふ――が、

「もー、遅いよ！」

モノローグを食い破るような叫び声と共に僕はいきなり左腕を引っ張られ、重力任せによるけた。その力の根源はどこかを見ると、眉を逆ハの字にしたすだれだった。

「もう三時五十分だよ。これ絶対、いい席取られてるよ。遅れるなら遅れるで、あたしが席取つといたのに。ちゃんと連絡してよ」

……携帯電話が全面禁止のこの学園で、一体どうやって呼び出せって言うんだ。放送室でもジャックしろって言うのか？

「ほら、へ理屈はいいから、早く行くよ」

そう言つて、すだれは僕の腕を引きながら走り出す。僕はその脅威の握力に抵抗するべくもなく、引つ張られるがままその後ろをついて行つた。

廊下を疾走した挙句にたどり着いたのは、視聴覚室。

六十人くらいは収容できそうな広さのこの部屋は、すでに窓が黒のカーテンで閉め切られていて、イスも幾何学的に並べられている。そしてそのイスが向いている真ん前の壁に、白いスクリーンが降りていた。

席は九割がた埋まっている。

みんながみんな映画に興味があるのかは知らないが、しかし娯楽の少ないこの学園において自主制作映画なんてのは多数を惹きつけるに十分な出し物であり、やはりと言うか何と言うか結構な盛況ぶりである。しばらく教室をうろつろした僕とすだれは、どうにか後ろの端の方の二つ並んで空いていた席を見つけ、そこに陣取つた。ようやく落ち着いた僕とすだれは、

「ねえ、粉雪君って、どういう映画見るの？」

「んー？ アクションはたまに見るけど」

「ふふふ。そういうとこ、やっぱり男の子なんだね。でも、粉雪君が派手なアクションシーンを見て熱くなつてるところなんか想像できないけど。話題についてくための義務の一種で見てたんじゃない？」

「……余計なお世話だ」

みたいなどうでもいい会話をしつつ、待つこと五分。

教室の後ろに立ち見の客までチラホラ出てきた頃合で、部屋の照明が落とされ、

「では、これより、『那頭奈学園』映画研究会の自主制作映画発表会を開始します」

という、落ち着いた女性声のナレーションが始まった。

そして、スクリーンに投影されるフィルム。

ストーリーは、すだれに聞いていた通り幼馴染のつかず離れずの恋愛模様を描いたもので、期待を裏切らない程度の起承転結が描かれていた。演技には若干演技臭さが残っていたが、学生の演技としては及第点以上だろうと思う。一般的な高校生の作る映画のレベルなんてまったくもって知らないが、それでも低くはないと、僕にも言い切れる。

そしてそれと共に興味深かったのが、隣のすだれの表情の変化だった。

くすくす笑いをこらえたり、真剣にスクリーンの女優を見つめたり、グスツと鼻をすすったり、完全に作品にのめり込んでいるのが見て分かる。特に、すだれの泣き顔なんてものをこの半年の付き合いの中で初めて見たのは、妙に感慨深いものがあった。

映画が終わった後、蛍光灯の灯りで再び照らされたすだれの目は少しばかり赤らんでいた。しかしその顔に浮かべているのはいつも通りの笑顔で、

「じゃ、行こっか」

と、僕を部屋から連れ出した。

僕らの本拠地、南校舎に戻る道程。

グラウンド脇のコンクリート道を並んで歩きながら、

「……ねえ、映画どうだった？」

藍色を含んできた空を眺めて、いつもよりおとなしめのトーンですだれが聞いてきた。

僕はとぼとぼと歩を進めつつ、

「……んー、悪くなかったんじゃないか」

当たり障りなく、そう答える。

「粉雪君って、幼馴染っている？」

「……幼馴染？ いるにはいるが、そいつは男だ」

「ふ〜ん。今も仲良い？」

「いや、小学三年で引越して、それ以来音信不通だ。正直、僕もあいつの本名すら覚えてない。思い出せるのはあだ名だけだよ」

「ふ〜ん。そっか」

相づちだけ打つすだれ。

「じゃあ、血の繋がってない妹は？」

「………なんじゃそら？ 何でそっちに話が飛ぶんだ？」

「だってラブコメの定番じゃん、定番。いないの？」

「……果たして日本にその血の繋がってない妹が正味何人存在してるのか聞きたいくらいだ。少なくとも僕には、血の繋がっている妹しかない」

「へ〜、妹いるんだ。世話焼いてくれる？」

「……そんな記憶は一度もないよ。可愛げのない、ただのわがまま娘だ。僕が高校に入学する際、彼女を作るならまず自分に見せると言ってきた」

「何で？」

「自分の義姉になる人はちゃんと自分で見定めたいんだと。気に食わなかったら、意地でも別れさせると断言してきた」

「あはは。まるで一昔前の姑さんだね」

他人事のようにこころ笑うすだれ。

実は、この妹のわがままっぷりは案外重症で、もし本当に妹の気に食わない女性を選んだりすれば、大喧嘩の末に家庭崩壊に到りそうなもんなのである。別に僕もそこまで妹の顔色を伺うつもりも甘やかすつもりもないのだが、しかし問題を最小限にするために、彼女を紹介するくらいはしておこうかと、本気で考えてはいるのだ。

まあ、すだれに言っても詮無いことではあるが。

それよりもまず、彼女を見つける方が先だ。

心うちでため息をつきつつ、ふと向かう先の校舎を見上げると、窓の奥にあつちこつちへ行き交っている生徒達が見えた。各々段ボールやらなんやらの荷物を抱えている。恐らく片づけの真つ最中なんだろう。今日の文化祭のプログラムは、すでに大方終わっているのである。

僕と並んで立ち止まり、その様を眺めていたすだれは、

「……文化祭、終わっちゃったね」

呟くように、言った。

夕焼けに染まる校舎なんていうポエムに出てきそうな景色を目の前にして、しかも『祭りの後』と言うタイミング。隣にいる女の子がすだれじゃなかったら、もしかしたら僕でさえ、勢いに任せて告白なんぞしてしまっただかもしれない。そんな、「今の気分は？」と聞かれれば、いの一番に『ノスタルジー』なんて単語が浮かんで、てしまうような雰囲気の中、隣に佇むすだれがゆっくり口を開けて、「……あたし思うんだけど、時間って、引き算だよ。生まれた瞬間から、毎日マイナスを連ねていく引き算だよ。カレンダーをめくるように毎日一つずつ減らしていったら、何か不幸なことがあれば沢山引かれて、そしてゼロになったらお終い。負の数なんて、ないんだよ」

半ば独り言のように、言葉を続ける。

「素敵な人に出会えても、すばらしい環境に入れても、どうしようもなくそれはいつか終わるもので、それはそれでやっぱりゼロになるまで、引き算してくしかないんだよ。運がいい人も、悪い人も、強い人も、弱い人も、賢い人も、愚かな人も、優しい人も、意地悪な人も、尊い人も、卑しい人も、笑う人も、泣く人も、怒る人も、慰める人も、闘う人も、逃げる人も、壊す人も、守る人も、楽しむ人も、苦しむ人も、良い人も、悪い人も、それだけは変わらない。それだけは、変えられない。でもさ——」

すだれはいきなり振り返り、僕の顔を見て、

「——でも、粉雪君、今まで一度でも二度でも三度でも四度でも五

度でも六度でも七度でも八度でも九度でも十度でも、それを止めた
いと思ったことはない？ 足し算にはできなくても、掛け算なんて
望めなくても、せめて、せめてこの引き算の連鎖を止めてみたいと
思ったことはない？」

真に迫るような口調で、すだれは話す。

「例えば――例えばの話だけどさ、家でも幼稚園でも小学校でも中
学校でも楽しい経験を何一つできなかった女の子がさ、高校に入っ
て初めて楽しい時間を共有できる、大切だと思う、大切だと言え
る人に出会えて、その人とできるだけ長い間一緒にいたいと思っ
ただけその人は本心を自分になかなか見せてくれなくて、その人が
自分について本当に楽しいと思ってくれてるのか分からなくて、自分
といつまで一緒にいてくれるのか分からなくて、何となくその人は
高校の間でしか自分と一緒にいてくれないんだろうと思えてきちゃ
って、真正面から想いを告げてでも受け入れてくれる自信なんてなく
て、不安になつて、踏み出せなくて、だったらこの今の時間がず
っと続けばいいと思うのは、当然だと思わない？」

すだれは僕から、視線を外さない。

「さっきの映画はさ、幼馴染は離れ離れになつても、運命でもう一
度出会えるチャンスがあつたけど、でもそれは映画だからでしょ？
現実とは違うでしょ？ この広い世界で、離れ離れになつたらお終
いでしょ？ 二度と会えないでしょ？ 結局忘れるしかないでしょ
？ 粉雪君もそうだったんでしょ？ それはやっぱり、時間が引き
算だからだよ。行き着く先がゼロだからだよ。だからさ、そんな悲
しいことなんて、止めてみたいと思わない？」

そこまで言つて、すだれは顔をうつむけた。コンクリートを見つ
めながら、搾り出すような声で、

「……まあ、身勝手なことだとも、思うんだけどね」

「……………いや」

僕は何か言葉をかけようとしたが、それ以上の言葉が思い浮かば
なかった。

僕の言葉を期待してなかったようなすだれは、くるりと僕に背中を向け、西日を見上げながら、

「あたし、粉雪君と、いつまで一緒にいられるんだろう？」

僕に言ってるのか、自分に言ってるのか、空に言ってるのか、夕日に言ってるのか、月に言ってるのか、星に言ってるのか、運命に言ってるのか分からないような声で、呟いた。

それに対して、僕は何も答えなかった――

――答えられなかった。

間章「インサート」

そんな風に、そんな感じで、そんなわけで、そんなところで、そんなこんなで、僕がこの『那頭奈学園』に入学してから約七ヶ月が経ったわけだが、ことこの一ヶ月は色々あった気がする。

自警委員に呼び出され、生徒会長とお近づきになって、時計塔が消えて、すだれと映画を見に行つて。一ヶ月でこなすには極めて濃すぎる「出来事」の数々が、四週間分の日付と共に僕の脳に刻まれている。

しかしそれでも僕が少なからず恵まれていたと言えるのは、これらがすべて「出来事」と表現されるようなイベントだったからだ。

もちろん、自警委員の委員会室でのアレコレは危険極まりないことではあった。だが僕は実際に傷ついたわけではないし、あれ以外にこうむった害もない。時々思い出して気分がダウンになるくらいなのである。

時計塔が消えたことについても、僕の中では結構ショックなことではあったが、それはそれだけで完結していることであり、それ以上は何もなかった。僕が廊下を駆けずり回っていたことにしても、幸いにして目撃者はほとんどおらず、今のところ変な噂もたっていない。内伸点に響くことも（恐らく）ないだろう。

すだれとの関係も相変わらず。この前の独白なんてまるでなかったかのように、僕に話しかけてきては、ややこしいことをつらつらと口上に並べるだけである。

もしかしたらこれは後から振り返るからこそそう思えるだけのことで、その時はその時で自分の身上を心から憂慮していたのかもしれないが、でも、これらはすべて通過すればそれだけで終わる、それぞれただの一つの「出来事」でしかなかった。

——掛け値なしに、誰の口をもってしても、主観的にも客観的にも「事件」と呼ばれるようなことが起こったのは、この後のことなのである。

第八章「ロック」―1

その日――すでに文化祭の熱も冷めやり、中間試験も乗り越えてようやくいつもの平穏な心身を取り戻したが、いよいよ空気が冷たくなってきていて、朝起きるのが億劫になりつつある十一月の第四日曜日――、僕はさつきから七時になったとわめいている目覚ましの頭を小突きながら、布団から起きだした。

見飽きたいつもの六畳一間。

あくびをしながらカーテンを開けると、視界が一気に白くなった。ガラス越しにひんやりした空気は感じるが、その冷たさをかき消して余りあるくらいの日光が差し込んでいる。外出日和と言っても差し支えない晴れ具合だろう。

食堂の開始時刻である七時半に間に合わせようと、僕は寝ぼけ眼をこすりつつ歯ブラシとタオルを抱え、部屋を出て共同の洗面所に向かった。

鏡に映るぼんやりした顔を眺めながら、顔を洗って歯を磨いてと毎朝繰り返ししている身支度を淡々とこなす。他の生徒も考えることは同じようで、僕と大体似たタイミングでこの洗面所にわらわらと集まってきた。そりゃ誰だって、朝ご飯くらい落ち着いて食べたいだろう。日曜は授業がない分、八時半頃から食堂が込み始めるので、みなそれを見越しての早起きなのである。

ただし僕には、早めに起きた理由はもう一つあり、それはすなわち今日は外出する予定だからだ。

前回二週連続で外出したら「遊びすぎじゃないか？」と注意されたわけだが、まあ、一ヶ月も間を取れば十分だろう。先週出しておいた申請書もつつがなく通った。今日は、テスト期間中に溜まった鬱憤を外で思いつきり晴らしてくるつもりである。

今日の行動予定をシミュレートしつつ、部屋に戻って着替えも完了。そろそろ食堂へ向かうかと思って立ち上がった瞬間、

コンコンッ

ドアがノックされた。

「はいはい」

と応えつつ、その声の主が誰なのかまったく予想できないままなんじゃらほいと扉を開けると、その向こうに立っていたのは木内だった。

「……おい、粉雪、知ってるか？」

見てる僕を不安にさせるくらいの深刻な表情をした木内は、朝のあいさつもなしにいきなり聞いてきた。

「知ってるって、何を？」

「昨夜のことだ」

重々しい語気で言いながら、木内は僕の断りもなくずかずかと僕の部屋に入ってくる。

僕はドアを閉め、木内の方を向きながら、

「昨夜って……何か問題でも起きたのか？」

「問題なんてもんじゃねえよ。問題は問題でも、大問題だ。俺もついさっき西岡に聞いたばつかなんだが、信じられねえよ。ありえねえ。ありえねえって。いくら『魔術』の学園だって、起こっていいことと悪いことがある。常識でも非常識でもありえねえ」

「だから、何が起こったって言うんだ？」

なかなか核心を話さない木内に、僕がやや声を荒げて言うと、

「教師が全員消えちまった！」

「……………え？」

「教師がみんな、人っ子一人消えちまったんだ。それだけじゃねえ。理事長も、事務の人も、警備委員も、寮の管理人も、職員が全員いなくなっちまった。この学園にいるのは、もう生徒だけだ」

「……………いや、何言ってるんだ？ そんなわけ——」

「本当だ！俺もさっき学園中を色々見て回ってきたが、本当に大

人が誰もいねえんだ。警備員の待機室だって空っぽだった。信じられねえって言うなら、管理室見てきてみるよ。本当に誰もいねえから」

「……な、何でそんな、いきなり——」

「わからねえよ。聞くところによると、昨夜の点呼で女子寮の管理人を見たのが職員を見た最後だって話だ。その後、その寮の生徒が用があつて十一時くらいに管理人室を訪ねたら、もう誰もいなかったそうだ」

「……いや、いやいや、仮に本当にいなくなつてたとしても……でも、だったら、一体僕達どうするんだよ？ 警察には伝えてあるのか？」

「警察に言えるわけねえだろ。『魔術』絡みかもしれないのに。余計混乱しちまう。恐らく上の研究機関に伝えることになるんだろうが。とりあえず今は、生徒会と自警委員が色々調べてるらしい」

生徒会と——自警委員。

乖離、一本木先輩、そしてクルト先輩か……。

「くそつ、一体何が起こつてやがるんだ！」

木内がうめきながらバリバリ頭を掻いた瞬間、

ピン、ポーン、パーン

いきなり、廊下の方から木琴の音が聞こえてきた。一瞬理解が追いつかなかつたが、これは放送だ。このタイミングで流れるなんて、ソレに関係することに決まつてる。

慌てて廊下へ出ると、他の生徒もバタバタと部屋から這い出してくるところだった。みんな顔に不安を滲ませている。この話は、すでにみんなに広まつているんだろう。

実際は一秒にも満たなかっただろうが、数分を感じるくらいの時間、物音立えずに耳を済ませていると、

『生徒会から、緊急の連絡をします』

壁についでるスピーカーから一本木先輩の声が聞こえてきた。声音が鋭い。その雰囲気から、事の重大さが感じられる。

『心して聞いてください。深刻な事件が起きました。この学園の教職員全員が、目下行方不明です。生徒会及び自警委員で調査したところ、職員百二十五名全員の失踪が確認されました。これについて、生徒会主導の元、すでに機関には通達済みであり、返答を待っている状況です。またそれに加え、さらなる事件の発生を警戒して――』

――この学園を、完全に閉鎖します』

第八章「ロック」―2

僕ら生徒全員が、グラウンドに出された。

野球場くらいの広さの土エリアに、千人ちよつとの生徒が集められている。詰めたすしをさらに圧縮したくらいの人口密度。右も左も人、人、人で、僕は身動きが取れなくなっている状態だ。トイレに行きたくなったら、どうすればいいんだろう？

何でこんな状況になっているのかというと、現在生徒会と自警委員の面々が構内をくまなく『サーチ』しているからである。あの放送があつてからゆづに二時間は経っていると思われるが、いまだに機関からの救援はなく、生徒が自ら詳しい調査に乗り出したということらしい。

別にただの見回りならわざわざこんな大盛況のライブ会場みたいな環境を作ることもないわけだが、今回使う『サーチ』はこの前の球技大会の時のものよりも格段に強力で、人体にあまりよろしくないらしい。強い磁場が発生することが研究で明らかにされているそうである。

そんなわけで、それに怯まない自己犠牲の精神に満ち溢れた有志のみが空つぽの校舎の中をうろつくことになるわけだが、そうなる と必然的に、その人達に部屋の中を覗かれてしまうことになる。

このことを放送で告げられた時、最初は合唱のようなブーイング（特に女子寮の方から）が聞こえてきていたが、スピーカーを通じた一本木先輩の真摯な説得に段々それも小さくなっていった。女子寮は女子、男子寮は男子の生徒会役員や自警委員が『サーチ』するという断りがある程度の効力を持っていたとも思うが、大半は一本木先輩の人望によるものだろう。こういう時にカリスマなるものが重要になってくるんだなあと、僕は一つ賢くなった気分になった。

グラウンドに立ち尽くしたまま、朝食を食い損ねて空つぽのままの胃袋を出掛けに持ってきたせんべいを放り込んで満たしながら、

『サーチ』が早く終わらんもんかと思っていると、

「しかし、『サーチ』したからって、何か見つかるもんなのかね？」

僕の隣、地べたにあぐらをかいて座っている木内が話しかけてきた。

「……まあ、こんな大々的な現象は十中八九『魔術』がらみだろうし、調べりや何か出てくるんじゃないか？」

「そういうもんかね？ 人を百二十人も消す『魔術』なんて、相当大規模なもんはずだろ。なのに昨日の調査じゃ何も見つからなかったんだ。いくら『サーチ』を使ったからって、そう簡単に発見できるもんかね？」

「……さあて、ね」

僕は適当に答えた。

しかし、思い当たる節はある。それはつまり、クルト先輩が言っていた 不審なものだ。赤かったり、青かったり、丸まっていたり、角ばっていたり。その風体からして『魔術』に関わりがありそうなもの、そして今思いつく限り一番怪しいものである。自警委員も、きつとこれを睨んで調査をしているんだろう。どんな関係があるのかは、僕のあずかり知らぬところだが。

「ったく、早く終わんねえかな。さつさと腹ごしらえしてえ。いい加減、せんべえにも飽きた」

「……人のものもらつといて、何だ、その言い草は。もうやらないからな。………と言うか、食堂のおばちゃんまでいなくなつて、これから食べ物はどうなるんだ？」

「調理場に行けば何かしら残ってるだろ。あとは、家庭科部に期待だな。地下シエルターにも保存食があるらしいし、そこまで深刻じゃないと思うぞ」

「……地下シエルター？ この学園、地下シエルターまであったのか。……初めて知った。

「そうか、お前ホントそういうのに疎いよな。友達少ねえことが証明されたな。こんなの、大概のやつは知ってる話だぞ。そのシエル

ターってのは、ほら、その、トタンの小屋の地下にあるそうだ。
『種』の『核』だつてそこにあるんだ。いわば『魔術』の心臓部みたいなもんだぞ」

「……そうだったのか」

うーむ。『種』の大元である『核』っていうものがこの学園にあることは聞いてたが、そんなところにあつたのか。灯台下暗しというか何と言つか……。一本木先輩に言われた時、ちゃんと探検でもしときゃよかったかな。今度、暇ができたときに考えてみよう。考えるだけで終わりそうだが……。

——しかし、

これだけ大勢の人間に囲まれてるつてのに、いつもより気分は落ち着いてる気がする。まあその理由も分かりきったことで、こういう割と自由な時間には決まって僕の周りに現れるすだれが、今日は現れないからだ。

周りを見渡すと、そこかしこに知った顔の女子も見えるが——もちろん、乖離はいないけど——すだれだけは見つからない。まあ、千人の人ごみの中から目当ての一人を見つけるなんて、無理難題に等しい所業だろう。

今は、木内と気のない友人トークをして時間を潰すことにしようか。

——結局、『サーチ』が終わるまでには、さらにだいぶ時間がかかった。

せんべいが底をついた頃、僕はようやく寮に入ることを許可され、自室に戻った。

別に机の上や本棚など荒らされたような形跡はない。朝見たまんまだ。まあ、たかだか数人で千人分の部屋を一つ一つ回ったんだ、そこまでの時間もなかったんだろう。『サーチ』さえすれば目的は果たせるわけだし。

ふと床を見ると、目覚ましに使っているこの部屋唯一の時計が止まっていた。ふたを開け電池を取り替えてみたが、一向に動く気配がない。『サーチ』でできる磁場にやられたんだろうか？ 一体どれだけの強さだったんだろう。

仕方なく腕時計で時間を確認しようとしたが、なぜか針は九時五分を指している。

感覚的には、朝起きてから四時間くらいは経ってるはずなのに。秒針はちゃんと動いているし、電池が切れた気配はない。何がおかしいんだろうと思っていると、ふと、さっきグラウンドから戻る際に、飛行機の搭乗ゲートのよろしく生徒一人一人が軽く『サーチ』をかけられたことを思い出した。その時の影響だろうか。

……… 正確な時間がわからなくなってしまった。

まあしかし、この目覚ましは元々安物で単に買い換えればいいだけだし、腕時計も後で合わせ直せばいいだけだ。僕は気にしないまま、今日の予定が白紙に戻ったことを思い出しつつ、しょうがなく布団にもう一度横になった。

——僕がこの謎の渦の中に巻き込まれることなど、微塵も考えずに。

第八章「ロック」― 3

学園が閉鎖されてから、結構な時間が経った。

少なくとも十日以上は経っていると思うが、しかしそう思うというだけで、断言はできない。これはただ、十回以上夜を見たというだけのことなのである。

いかんせんそこら中の時計がでたらめになってしまったせいで、時間の正確な勘定ができなくなっている。木内なんか聞いても、やはり同じような状況だそう。例えば暗い時間に寝て、起きてもまだ外が暗い場合、自分が数時間寝ただけなのか一日寝てしまったのか分からない。もはや体内時計も当てにならない。

しかも教師がいなければ授業なんて開かれるわけもなく、つまり生徒全員が宇宙遊泳のように完全に宙ぶらりんな生活を送っているのである。休日の昼間に寝転がっていると掃除機でリビングから追いついてくる母親もここにはいないのだ。そんなわけで、余計に規律が狂ってしまっている。

結局僕も今までの十何日間は、木内や部屋に押し付けてきたすだと世間話をしたり、図書室で読書したり、たまに外でキャッチボールなんかをしたり、そうでなければ寝て過ごしたりして時間を潰しているだけである。それ以外に、どうしようもないのだ。

数日前に回覧板のように生徒会からプリントが回ってきて（いつのまにかドアの隙間に挟んであった）、そこにはまだ機関からの連絡はないこと、学園の堀伝いに『魔術』による『ウォール』が張られていて外に出ることは不可能になっていること、その弊害として電話線やコンピューターのネットワークは切断されておりコンピューター室は使用中止になっていること、学園の端の方にある職員専用の寮（と言う割りにマンション並みに広く小綺麗な建物だが）を扉を壊して調査したがやはり誰一人発見できなかったことが記され

ていた。まあ、半ば予想通りの内容だ。

まるで、世界が分離してしまったような状況。

しかし元々が閉鎖された場所だったせいか、あまり困窮することもなかった。電気は変わらず使えてるし、食べ物も少し質が落ちたくらいで足りなくなっている様子もない。地下シェルターにあったストックが十分だったんだろう。まるでこうなることが予定通りだったかのように、生活はすんなり移行している。他の生徒からも、目立った反杭行動もないようである。

閉じ込められても別段ストレスはなく、むしろ授業がなくなったおかげで宿題に追い立てることもなくなって安心している部分もある。が、だからと言って不安が何もないわけじゃない。

非常事態のはずなのに、何も進展していない。

好転も、暗転すらしていない。時間だけが過ぎていく。

日常から切り離されてしまったかのような感覚だ。このままでいいとは、さすがに僕も思っていない。この状況が続けば、未来が狂ってしまいそうに思える。この前までの閉鎖されながらも高校生の三年間を刻々と消化していた日々——まあ、あと一ヶ月くらいの生活を満喫したくらいで——戻りたいと思っている。

だが思うだけですべてが思い通りになるならばこの世から夢や希望なんて文字は消滅してしまうもんであり、残念ながらもまだに世の中ではこれらの文字が教育者の口から発せられることは止まず、つまりは何か願望があるなら行動せねばならんというわけだ。

では、僕にできることは？

コンマ一秒ほど自問自答し、三段論法よりも迅速にすつきりと「何もない」という結論が出てきてしまった。そりゃそうだ、生徒会や自警委員が動いてるんだ。いまさら僕が動いても、猫の手どころかありんこの手以上に期待できないだろう。六本あるわけでもないし。

僕はただ、傍観していよう。

そう思いながら、ごろんと自室の布団に転がった——

——その矢先、

こんこんという木を叩く音と共に

「粉雪君」

という涼やかで控えめな声が聞こえてきた。

こんな細かい声がすだれであるはずもなく、また音域からして木内のわけもなく、扉の奥の人物が誰なのか余計にわからなくなりながらも、僕はドアに近づいて行って、ノブを回して扉を開けた。

そこにいたのは、栗色の髪を後ろで一つ縛りにした、やや目つきのきつい——しかし、いつもより生気の薄い瞳の色をした——少女。野中乖離だった。

乖離は僕の顔を見上げ、不安げな声音で、

「……………粉雪君。……………どうしよう?。」

第九章「サーチ」―1

心もとなげな顔で僕を見上げている乖離を放っておけるわけもなく、僕はとりあえず彼女に部屋へ入るよう促した。

客人用の座布団を引っ張り出してそこに座らせ、冷蔵庫から取り出したウーロン茶をコップに注いで、乖離の目の前の丸テーブルの上に置く。一応これが、僕がこの部屋でできる最大限のもてなし方である。

ウーロン茶を手にとって一口飲んだ乖離は、落ち着いたようにふうつと息を吐きつつコップをテーブルの上に戻しながら、呟くように口を開いた。

「……私、どうしたらいいんだろう？」

「どうしたらって、何の話だ？　と言うかお前、何でそんな深刻そうな顔してるんだ？　何かやばいことでも起こったのか？」

「ことが起こったわけじゃないんだけど――」

乖離は吐息のような声で、

「――むしろ逆よ。ことが起こらなくなった、何も進まなくなったのよ」

「……進まなくなった？」

「そう。……クルト先輩が、調査をやめたの」

……調査を……やめた？

「今までは、自警委員と生徒会の人全員で昼も夜もなく学園内を色々調べてたんだけど、昨日になってクルト先輩が『調査はもうやめにしよう』って言うてきたの」

「……諦めたってことか？」

「そう、そういうこと。今日はクルト先輩、ジョギングしたり図書館で本借りたりして、もう自分のことしかしてないわ。調査は全然してない。それにっられて生徒会の人も何もしなくなっちゃって。

そりゃ、確かに何日も調べても何一つ見つけれなかったけど、だ

からって諦めていいことにはならないわ。機関からは何の音沙汰もないんだもの。私たちが何とかしなくちゃ。そのための自警委員なんだし……」

……なるほど、それでこいつはこんな気落ちした表情をしてるわけか。

「もう私、どうすればいいのかわからなくて……」

ウーロン茶を見つめながら、独り言のように言う乖離。

……乖離のその使命感に熱い意見もわかるが、しかし考えてみれば僕は高校生でしかない。『魔術』に関してだって、一応扱うことができるってだけで、専門家じゃないんだ。こんな大事件、専門家たる機関の人間に任せるのが当然とも言える。だから、クルト先輩の方針だって分からなくてもない。

僕はフンツと一つ頷き、

「……いや、まあ、状況は理解したし、お前が困ってるのも分かったが……だからって何で僕のところに来たんだ？ 自警委員がらみって言ったって、僕はただの不合格者だ。それ以上でも以下でもない。もっと期待できるやつが他にいるだろ？」

「そ、それは——」

僕の質問に、いくらか言いづらそうにした乖離は、

「——確かにあなたは不合格だったみたいだけど、でもあなたのこと、クルト先輩がおもしろいって言ってたから」

……おもしろい？

「……いや、だからそれはテストの前の話だろ？ 僕が試される前のことだろ？ んで、試してみたら期待外れだったんだろ？」

だったら、そんな、僕は——」

「いえ、違うの。テストが終わった後よ」

テストの………後？

「そう。テストの次の日、自警委員の会議の時にクルト先輩が私に言ってきたのよ。『柊木君って、結構おもしろいコかもね』って。だから——だからあなたなら、クルト先輩に見初められたあな

たなら、この状況を動かせるんじゃないかと思って……………」

……クルト先輩が、テストの後で、それでも僕に興味を持っていた？ 僕のある醜態を見て、なおも僕のことをおもしろいと言ったっていうのか？

……どうということだ？

もしかして——もしかして、ばれたとも言うのだろうか？
気付かれたとも言うのだろうか？ 二ヶ月前のあの日、夕方、自警委員の委員会室で、クルト先輩と乖離に観察されている中で、僕が情けない声をあげ、ただただ怯えた表情をして、ナイフから逃げ回り、床にへたり込んで、カードを出しても結局何も抵抗せず、逃げるように避けるように部屋を出て行った——

——それがすべて、僕の演技だったということに。

そう。そもそも、あの宙に浮いたナイフが『魔術』によるものなのは、ナイフが壁から出てきた時点で一目瞭然。分かりきったことだった。

では、あのナイフは本物か？ 偽者か？
実際のナイフを『魔術』で操っているのか？ それともただの幻覚なのか？

あの宙に浮いたナイフ軍は、寸分の狂いなく、僕に切っ先を向けていた。そして真っ直ぐに僕に向かってきて、 剣山 のように床に突き刺さったんだ。

——軌道がきれい過ぎる。

例えば『魔術』で氷を発現した場合、その氷は冷たい。
火を発現すれば、熱い。

つまり、いくら物理法則を無視した『魔術』であっても、発現した後では物理法則を無視できない。発言した後ならば、物理法則の影響を受けるのである。

周囲を隙間なく囲んだ金属の塊が、あんな風に風を切って進んだ

にも関わらず、お互いに干渉しないのはおかしい。風圧の影響で少なからずれるはずだ。なのにあそこまできれいな軌跡を描くなんて、そんなのが実際のナイフであるわけがない。

——ならば、あれは幻覚だろう。

だったら、避けなくても問題はないはずだ。

先輩はあれをテストだと言っていた。と言うことは、もし僕が何か行動を起こしてそれが好ましかった場合、僕を自警委員に入れようってことだろう。たとえ後から拒んでも、目をつけられることには変わらない。

別に僕は、自警委員に入りたくないかない。

だったら、あの場面では何もしない方がいい。怖がる振りをして、情けない振りをして、使えない人間である振りをして、先輩と乖離にさっさと見限ってもらった方がいい。頑張っても、僕には何の得もない。

誤算だったのは、幻覚のレベルが高かったこと。あのナイフにも殺傷能力があったことだ。それを知らされた時、少なからず冷や汗をかいたのは本当だ。僕はナメすぎていたかもしれない。

逆にそのおかげで、去り際の演技がよりリアルになっていたことだろう。

——そう、演技は完璧だったはずだ。自分自身すら騙せそうなくらい。

なのに、クルト先輩はそれでも僕への興味が失われてなかったってことなのか？ 『不合格』だけど、『おもしろかった』のか？

……考えてみれば、あの時学生証を出したにも関わらず何もしなかったのは、逆にまずかったかもしれない。逆に違和感があったのかもしれない。本当に恐怖して、無我夢中になった人間なら、良し

悪しはともかくとして何かしらの行動は起こすものなのかもしれない。何かしらの『魔術』を使うものなのかもしれない。

もしかしたら、その辺でクルト先輩に看破されたのかも――

「――ちよ、ちよっと、粉雪君？」

乖離の声で、僕はハッと我に返った。

「ど、どうしたの？ 急に黙り込んで。……具合でも悪いの？」

「いや、そういうわけじゃないよ……」

眉をひそめて僕の顔を覗き込んでくる乖離に、僕は取り繕うような苦笑を浮かべて答えた。

「そう、ならいいけど。……それで、そういうわけだから、何かあなたに当てがないかと思って聞きにきたのよ。この状況を打破するための」

乖離は膝の上で手を握り、テーブルに視線を落とす。

「十数人の人間が数日間ずっと探し回っても見つからなかったものが、あなた一人にそんな簡単に分かるわけないのは分かってる。期待するだけばかばかしいのかもしれない。だけど………学校中を探し回っても何も見つからなかったからこそ、もう他に頼るものがなくなっちゃったのよ。別に手がかりとまでは言わなくてもいい。ただ、何か変なこととか、疑問とか。そういう当てがないかって、思ってる……」

「すぐるような、しがみつくような乖離の声音。」

「当て……当てねえ――」

僕は嘆息しながら、

「――あるよ」

「……………え？」

「……………何そんな驚いた顔してるんだよ。お前はそれを期待してここに来たんだろ？」

「え、ええ。それはまあ、そうなんだけど……でも、そんな簡単に聞けるなんて思ってたなくて———そ、その当てってというのは、何？」

テーブルの上に身を乗り出してきて、僕を見据える乖離。

僕は肩をすくめながら、

「いや、そう単純な話じゃないし、曲解されても困るから、一応最初から説明させてくれ。ええとだな———まず今の状況で問題なのは、教職員が消えたのはなぜか？ 誰の、あるいは何の仕業なのかってことだろ？ 生徒が無事で職員だけが消えるなんて、こんな奇妙なことが自然発生するなんて考えられない。絶対に何かしらの意思の干渉は受けているはずだ」

「ええ、そうね」

瞳に少しばかり強さを取り戻した顔で、乖離は頷いた。

「しかし、『魔術』が存在するこの学園で、どうやって、なんてことを考えるのはナンセンスだ。なんせ『魔術』は物理法則を無視するし、応用も結構利く。また、誰が、ってことについていきなり考えるのも、これまた難しいだろうな。これだけ調べて何も分からないうてことは、その犯人はそれを隠すことを目論んでたんだろうから。その思惑がうまくいつてる以上、むしろ一番遠いスタート地点かもしれない」

「……そう、そうね」

真剣な目で僕を見つめてくる乖離。

睨まれてるような気分になって、僕は思わず乖離の顔から目を逸らしながら、

「だから、どうやって、や、誰が、じゃなくて、何で、そんなことをしたかってことから考えていくのが近道だと思われる。いわゆる、すだれがよく言っていた『ホワイダニット』ってやつだ」

「……ほわいだにっど？」

「ああ、ミステリー用語らしい。まあ、そんなことはどうでもいいんだけど———で、だ。もし犯人の思惑が達成されているという

なら、この状況が犯人の目的だったと考えられないか？ 教師が全員消えてしまった——加えて『那頭奈学園』が完全に閉鎖されたというこの状況が、犯人の目的だったんじゃないか？」

「……な、なるほど」

言いながら、乖離は何度も頷く。

「この状況について詳しく考えてみると——まあ、単純なものだけ——教師が全員いなくなって、生徒が全員閉じ込められたってだけだ。しかし、ここに何か引っかかりを感じないか？」

乖離はきよとした目で首をひねりながら、

「……引っかかり？」

「そう、教師はともかくとして、生徒が全員閉じ込められたんだ。全員が、ね。何でこんなことになったのかっていうと、それもまた単純で、時間のタイミングがちょうどよかったからだ。職員の行方不明が発見されたのは夜の十一時、そして学園が完全に閉鎖されたのは朝の七時半。外出可能な時間である朝十時から夕方五時っていう時間と重ならず、この一連の出来事が起こったんだ。さらに言えば、寮から出ることができる八時から七時という時間も避けている。まるで測ったかのように、ね」

「……………」

乖離は無言になった。

「確かに事件発覚から閉鎖まで八時間以上がかかっているけど、それはちょうど生徒が全員寮の中にいる——つまり学園の完全な監視下にいる時間だ。これは偶然なのか？」

「……いえ。考えてみれば、おかしすぎるわね」

「そう。だから犯人の目的はこれだったと考えられないか？ 生徒を全員ここにとどめておくことが目的だったんじゃないのか？ そしてそうだとしたら、犯人はこれをコントロールできる立場にいる人間だと考えられるだろ。事件を発覚させたり、学園閉鎖を決める時間がある程度コントロールできる立場の人間。そうじゃないと、こんなピツタリいくなんて考えられないからね。だとすると、犯人

は絞られてくるだろ。つまり、学園閉鎖を決定した生徒会の人間でことに——」

「……いえ」

乖離は少し瞳を曇らせ、うつむきながら首を振った。

「確かに学園の完全閉鎖を承認したのは一本木生徒会長だけど、でもそれを決定したのは彼女じゃないわ。法案と同じよ。彼女は承認しただけ。生徒会にはそういう権利はない。そういう緊急事態に関する決定権を持っているのは——自警委員よ」

「……………へえ、そうなのか。そうだったのか。だったら、まあ、余計に問題が簡単になるな。そう——」

——これを仕組んだのは、自警委員の誰か、だ」

僕の断定に、乖離は肯定も反論もせず、ただきゅつと唇を噛んだ。その険しい表情に対し、僕はできるだけ労わるような顔を作りながら、

「……………まあ、お前にしちや身内を疑うってことになるんだろうが、でもこれが僕が思いつく『当て』だ。これが百パーセント当たってるっていう保障はできないけど、それでも確率はそれなりに高いと僕は思ってる。調べる価値はあるんじゃないかってね。この後どうするかは、お前次第だよ」

ベッドの側面に寄りかかりながら言うと、向かい側でしばらく黙り込んでいた乖離は顔を上げて、

「……………調べるわ。今はもう、他に手立てがないんだから。少しでも可能性があるなら、私はやる」

「そうか」

強く真つ直ぐな目で見据えられ、僕は思わず頭をかいた。

「……………なら、まあ、僕も少しくらい付き合ってもいいけど。暇だし、僕が出したアイディアだし——しかしそうになると、一番怪しいのはまず、『学園の完全閉鎖』を言い出したメンバーになるだろう

ね。どうだった？ 誰が言い出したんだ？」

「……ごめんなさい。その辺、記憶が曖昧なの。誰だったのか、思い出せなくて……」

「………そうか」

メンバーの中で一番情報に信頼性があるのは、この乖離だったんだが。なんせ自分から状況打破をするためにここに来たんだし、犯人のはずもない。……まあ、他の人に聞き回っていけば自ずと分かるだろう。

「……じゃあ、次に怪しいのはクルト先輩になるんだろうな。自警委員の一番上の人間だし、昨日調査を諦めたのも目的が達成されたからって考えられるしね。………どうする？ まずはそこに行くのか？」

「いえ、先輩は昨日から捕まりにくくて、見つけるまでに時間がかかりそう。他の二人から当たっていった方がいいわね」

「……二人？ ってのは、一本木先輩とりえ先輩か？」

「りえ先輩は生徒会の書記で、自警委員じゃないわよ。何トボケたこと言ってるのよ」

乖離は呆れたような顔で言ってくる。まるで寝ぼけてドアに鼻の頭をぶつけた様を見たような表情。

僕はその予想外の反応に驚きながら、

「……え？ いや、トボケたことって、そんなつもりはなかったんだけど。……じゃあ、あと一人って誰なんだよ？」

「何言ってるの？ あなたが知らないわけじゃないじゃない。まさか私をからかっているんじゃないでしょうね？ もしくは当たり前すぎて忘れしてるのか？ もう、そんなの決まってるでしょ——」

——風宮さんよ」

………え？

………何だって？ なぜ………みや？

「……………え？　ちょ、ちょっと、その顔、まさかあなた、今まで
本当の本当に知らなかったの？　風宮さんが自警委員だったこと…
…？」

……………すだれが自警委員だった？　……………そんな話、全然聞いてない。
「う、嘘でしょ？　あなた達あんな仲いいのに。……………だって風宮さ
ん、放課後ちゃんと委員会の会議に毎回休まず出てたじゃない。そ
れに、ほら、閉鎖初日の『サーチ』にも参加してたし、昨日まで一
緒に学園の調査してたんだから……………」

……………そうか、そうだったのか。

僕らがグラウンドに集められた時、確かに僕はすだれを見かけな
かった。あの時の僕は、それはあいつが人ゴミで動けなくなってる
からだと思い込んでいたが……………。

しかし考えてみれば、あれだけ暇な時間があれば、僕以外に友人
がまったくいないあいつのことだ、人ゴミを掻き分けてでも僕を探
しに来ただろう。そして僕に話しかけてきただろう。それくらい
のアグレッシブさは持ち合わせてるやつだ。あの時、あの場所であ
いとまったく顔を合わせなかったのは、相当異例なことだったんだ。

あの時、あいつは僕との会話以外にやるべきことがあった。

自警委員の活動で『サーチ』をしなければならなかった。

つまりはそういうことだったんだろう。

それに、それだけじゃない。休日には時間いっぱいまで僕の部屋
に居座ろうとするすだれが、完全に自由になったこの十数日間では、
ある程度の時間しか来てない。来たとしても、そこそこの時間を過
ごせばだだをこねることなくちゃんと帰る。つまりはそれも、自警
委員の仕事があるから、時間にあまり余裕がないから、というわけ
なのか。

言われてみれば、そんなことかと思う。

驚いたが——納得はできた。

「……………なるほど、わかったよ。……………ったく、僕は本当そういうのに
疎いらしいね」

僕は自嘲気味に笑いながら、

「だったら、まずはすだれのところに行こうか。色々聞きたいことも聞かなきゃならないこともできたし。そうだな——できればあいつとはサシで話したいから、僕一人で行ってもいいか？」

「え？ ……ええ、別に構わないわ。私、あの人のこと少し苦手だから、正直そっちのほうが助かる。 ……そうね。じゃあ私は、南校舎の食堂で待ってるわ。終わったらそこに来てちょうだい」

言いながら乖離は立ち上がり、出口の方へ歩を進めた。

「じゃあ、粉雪君。私は先に行って待ってるわ。よろしくね。 ……

…あと、それと——」

ドアの手前で立ち止まりつつ、乖離は僕から顔を背け、

「——…本当に……ありがとう」

僕に聞こえるか聞こえないかぐらいの声で言っ、部屋を出て行った。

パタンと閉まる扉。ドア越しに聞こえてくる乖離のぱたぱたという足音も、ほどなくして聞こえなくなった。

……へえ、案外素直なもんだ。乖離の殊勝な声なんて初めて聞いた気がする。まあ、何にしても、感謝されて悪い気はしないな。

僕は思わず含み笑いしながら、あごをなでつつ立ち上がった。

「……さて、どうするかな？ もしすだれが犯人だった場合、あいつのことだ、直接聞いたって教えてくれるはずもないだろうけど…

…」

頭をフル稼働させつつ、机の横の本棚を覗き込む。そしてそこから取り出したのは、ぶ厚い科学百科事典。高校の入学祝いに親戚のおじさんに貰った物だ。

しかし僕はその百科事典自体には興味はなく、文字を追いかけることもせずにページをパラパラとめくった。そしてその隙間から、へそくりでも隠すように折りたたまれて閉じてあった、二十枚のプリントを取り出す。

僕はそれらを広げ、中に書いてあることを確認すると、もう一度

それを折りたたんだ。そして本棚から空のファイルを取り出し、その中にプリント群を閉じこんで、

「……じゃあ、行くか」

部屋を出た。

第九章「サーチ」―2

トンツトンツ

僕はすだれの部屋のドアをノックした。すると中から、

「はい、はいはい」

という呑気な声が聞こえてきて、開かれる扉。そこから顔を出してきたのは、当然のごとくすだれだった。

すだれは僕の顔を見ると、口をあんぐりと開けて、

「え？ 何？ 粉雪君があたしの部屋に来るなんて……どうしたの？ 人格転移？」

……いきなりあんまりな言われようだ。

「……いや、僕は僕のままだよ。ちょっとお前に聞きたいことがあって来ただけだ」

「ふ〜ん、何だろ？ まあ、とにかく中に入って、入って」

すだれに手招きされ、僕は足元に気をつけながら部屋の中に足を踏み入れた。

水色のカーペットが床にかぶせられ、机、本棚、ベッドが並んでいる。半年くらい前に見たときとほとんど変わっていない配置、雰囲気、散らかり具合だ。机の横には相変わらずパソコンが五台……

……いや、六台ある。いつの間にか買ったんだ？

僕が差し出されたクッションの上に座ると、

「はい、どうぞ」

と、紅茶の入ったカップを渡された。次いですだれは四角い缶を差し出してきて、

「クッキー食べる？」

「いや、いい。これから食事にするところだし」

「ふ〜ん……おいしいのに」

そう言って、自分でクッキーをかじり始めるすだれ。

「……しかし、前も思っただけ、この部屋――」

僕は周りをぐるっと見回しながら、

「——どうにかならないのか？ パソコンのパーツやらそういう雑誌やらで足の踏み場がほとんどないじゃないか。悪いが、僕の部屋より散らかってるぞ」

「別に、粉雪君以外に誰もこの部屋にこないし、問題はないよ」

……僕だって滅多にここに来ないが。

「………はあ。まあ、いい。とりあえず本題に入ろう。えーとだな、今日僕がこのジャングルに足を踏み入れたのは、お前に聞いたいいことがあったからだ」

「うん。なにになに？」

「単刀直入に言うぞ。お前、自警委員だったんだってな？ それは本当なんだな？」

僕が言つと、すだれは顔をびくつと引きつらせて一瞬黙り込んだ。そして苦笑いを浮かべながら、

「………あらら、バレちゃった？ もう、せつかく今まで秘密にしといたのに。しょうがないなあ。………誰に聞いたの？ もしかして、野中さん？」

「ああ」

「そつかあ。やっぱそうだよ。知られるなら彼女からだと思ってたんだ。別に口止めしてたわけじゃないしね。………うん、そうだよ。あたしは四月からずっと自警委員で活動してるんだよ」

首を傾け、諦めたような顔で言うすだれ。

「………何で秘密にしてたんだ？」

「だって粉雪君、いつも見てるウェブサイトで教えてくれないんだもん。だったら秘密には秘密で対抗しようと思ってさ。『これを教えて欲しかったら君も教えなさい』って感じで、交換条件に使おうと思ってたのになあ—— あーあ。また別の秘密を作らなくっちゃ。………うーん、どうしよう？」

すだれは腕を組んで、考え込むポーズ。ダルマのようにうんうん悩み始めた。

僕はその思考を遮るように、

「……別に、そんなの考える必要はないよ。今教えてやる」

「ええっ？ 何、いきなり？ どういう人格転移？」

目を点にして驚くすだれ。……………と言つか、また人格転移か。

「こういう状況になったからだよ。もう隠してたって先が望めないからな」

「……先が望めない？ どういうこと？ 何か複雑な事情とかがあるの？」

「そんなんじゃない。答えはいたってシンプルだ。僕は外部のネットで、この学園について調べてたんだ」

「この学園について？ ……ああ、だから学園内のネットワークを使うとまずかったわけね。ネットカフェなら、学生証をポケットに入れておけば周囲の景色は『メモリ』出来ないし、音を拾われてもクリック音だけ。どんなページを見ていたのかまではバレない、と。なるほどね。……………でも、この学園って閉鎖されてるから、情報なんて出回ってないでしょ？」

「ああ、その通りだ。たとえ出回ってたって、恐らく僕みたいなたいた知識もない一般高校生が手を伸ばせる場所じゃない。僕が調べてたのはそんな込み入ったところじゃなくて、ネットの表の表の表の部分だ。つまり単語を入力してサイトを調べる、ただの検索サイト」

すだれはアヒルのように口を尖らせながら、

「……でも、そんなところで何が調べられるっていうの？」

「そう、例えば『那頭奈学園』なんて入力しても入試情報が出る程度で、僕が欲しいものなんて出てくるわけがない。だから僕は他の固有名詞——人名を調べてったんだ」

「……人名？」

首を傾け、リピートするすだれ。僕は一つ頷いて、

「ああ。この学園の教師やら職員やらの名前を、片っ端から入力していったんだ」

「それで、何か分かったの？」

「分かったとも、分からなかったとも言えるな。僕が手に入れた職員百数十人分の名前を打ち込んでいったんだけど、そのうちの約半分——つまり六十人以上の名前で、その言葉を含むページが見つかった。苗字と名前、両方が並んで書いてあるサイトだ。しかし、それは別に不思議なことじゃない。簡単な名前なら同姓同名はいくらでもいるからね。当然といえば当然のこと。重要なのは、これらのほとんど全員の名前で現在の活動が綴られていたってことだ。……ほら、これが証拠」

言いながら、僕は六十枚の紙の束が挟まれた紙製ファイルをテーブルの上にどさっと落とした。勢い余って、最上段の一枚がひらひらと床に落ちる。

すだれはそれを拾い上げ、

「……これ、印刷してきたの？」

「ああ、そうだ。ネットカフェで印刷してきた。そういうことが出来る店を探して行ってたんだ」

「何でこのプリント、全部折り目がついてるの？ 十文字に」

「持ち物検査でバレたら元も子もないからね。四つ折りにして、買ってきた本なんかに入れて運んでたんだ。……どうだ、本当に書いてあるだろ？」

「……うん、本当だ。書いてあること、全部本当っぽい」

すだれは紙を一枚ずつめくっては、驚いたような感嘆するような顔で流し読みをしていく。

「そこに載ってる教職員は、少なくとも四月からこの前までこの学園で働いていたはずだろ？ 僕たちの前で教鞭をとったり、食堂でメシを作ったり、門を警備してたりしたわけだ。なのにウェブサイトに、その間、別の場所で働いてる情報が書いてあった。例えば他の高校の理事長をやったり、部活の監督をやったり、あるいは喫茶店の店長をやったりなんていう人もいた。これらは百パーセント、この閉鎖された学園の仕事と両立なんてできないような

職業だ」

「……でも、それも同姓同名じゃないの？」

「ああ、その可能性もある。あるけど、六十人はさすがに多くないか？」

「……うーん、まあ、そうかもね……」

眉間にしわを寄せ、すだれは考え込む表情。

「で、そこからどういう結論が出てくるの？」

「まあ、考え方は色々あるだろうが、人間がダブってること、『魔術』が存在すること、そしてその教師達が一度に全員消えたことを考えると、僕は一つの仮定に思いいたったんだ。それは――

――あの教職員たちは、『魔術』の幻覚じゃないか、ってことだ」

「……………幻覚」

「ああ。あの人達は幻覚、まぼろしだったんだ。学園外の人達に対して『魔術』をかけるなんてことは、能力の限界から考えて不可能だろう。だったら、学園の中にいた人達が幻覚だったんだ。その人達は、実際にこの学園で働いていたのかもしれない。しかし、誰かが、『魔術』を使ってごく自然に誰にも気付かれないように、その人達を学園から排除していったんだ。そしてそれと同時に幻覚を生徒全員にかけて、あたかもその職員がずっとその学園で働いているかのように取り繕った。で、この前その幻覚を一気に解き、僕達には職員達が消えたと思わせた、と。これが僕の考えだ」

「……………なるほどー」

感心したように唸るすだれ。

「じゃあ、そんな『魔術』を使ったのは一体誰かって話になる。犯人はこの学園から大人を全員排除したわけだが、それはつまり自分がこの学園の頂点――あるいは頂点に近い場所に就こう思ったからだと考えられないか？ そうなるとつまり、この事件に関して主導権を握った集団の人物が怪しくなってくる。それは誰か？ 生

徒会と自警委員だろ？ さらに学園閉鎖の決定権を持つてたのは自警委員なら、自警委員の中に犯人がいるんじゃないか？ それなら

「……」
「うふふ、分かっちゃった」

僕の言葉を遮り、すだれは口をひん曲げてニンマリした笑みを向けてきた。

「……分かったって、何がだ？」

「粉雪君の考えだよ。粉雪君は自警委員の中にこの事件の犯人がいるって思ってる。そして自警委員のあたしのところに来たのは、あたしが犯人じゃないか確かめるため。うふふ。多分粉雪君、これからあたしにこう聞くつもりだったんじゃないかな？ 『学園の閉鎖を言い出したのは、自警委員の中の誰だ？』って」

「………」 凶星だ。

「うふふ。学園の完全閉鎖が犯人の目的だって言うなら、それを最初に言い出した人が一番怪しいよね。もしかしたら、生徒を全員学園から非難させようっていう方針にならないとも限らないしね。そうならないように、先手を打たなきゃならない。学園の閉鎖を提案しなきゃならない。うん、確かにその通りだ」

すだれは一つこくりと頷き、

「………」 けどね、残念だけどその当ては外れてると思うな。だってさ——

——それを言い出した人は誰もいないんだから」

「………」 どういうことだ？」

「うふふ。つまりね、この『学園の完全閉鎖』はマニュアルに書いてあったことなんだよ。緊急時対応マニュアル。だから、誰かが提案したわけじゃなくて、元々の決まりだからそうなっただけなんだよ。ふふ。粉雪君、当てが外れたって顔してるね？」

「………」 くっ、その通りだ。

「それにね、考えてみてよ。そんな大それたコトをするなんて、確かに『魔術』を使えばできるかもしれないけど、それでも準備にはかなり時間がかかるよ。例えばあたしなんかそんなことする余裕があったと思う？　今までの行動でそんな怪しいところがあった？　なかったでしょ？　なんせあたしは、ずっと粉雪君の側にいたんだし。そりゃ、たまに粉雪君に無断でいなくなったりもしたけど、それは自警委員の活動のため。あたしがちゃんと委員会のことやってたって、野中さんから聞かなかった？」

……確かに乖離は、すだれを疑うような素振りにはなかったな。ということは、すだれは自警委員の職務をきちんと遂行していたということだろう。

それにこいつは、平日の日中はずっと僕について回っていた。僕の視界からいなくなるのは、寮の出入りが禁止される七時以降。たまに放課後小一時間くらい見えなくなることもあったが、それも月に一回くらいの頻度だった。それはつまり、その時間に自警委員に行っていたってことになるんだろう。

こいつが自由に動けるとしたら、僕が外出している土日くらいか。その間に、教職員を幻覚と入れ替える作業を……いや、同姓同名がヒットした大人には、三月——つまり僕とすだれが入学する前——から外側で働き始めていた人も十数人いた。そんな人まで入れ替えるのは、すだれに可能なんだろうか？　その点を考えると、怪しいのは三月以前もこの学園に在籍していたクルト先輩と一本木先輩ってことに……？

「……もしかしたら粉雪君、自警委員の委員長ってことでクルト先輩を疑ってるのかもしれないけど、先輩も今までずっと閉鎖について調べてたんだよ。本当だよ？　必死に学園中をあっちこっち歩き回ってたんだから。もちろん一本木先輩も野中さんも。あたしが証言者だよ」

……証言、ね。そう言われると、何も言えなくなる。

「うふふ、そんな落胆しちゃって。似合わないことするからだよ。」

もう、今はただ外からの助けを待った方が得策だよ。あたし達だつて色々調べたのに何も分からなかったんだからさあ。ね？ さ、あたしと遊ぼうよ。あたしも仕事がなくなっちゃって暇になつてたところなんだよ。どう、何か語り合う？ 将来についてとか？」

「……いや、僕は帰るよ」

「もう、つれないなー。折角あたしの部屋に来たのに。タンパク・オブ・ザ・タンパクって言葉は、粉雪君のためにあるようなもんだよ」

「そんな言葉は元々ないっ」

僕はツツコミながら立ち上がり、散らかった小物をかわしながらドアに向かつて歩いていく。そしてノブに手をかけたところで、

「……ねえ、粉雪君——」

急にすだれが、やけにしおらしい声で僕の名前を呼んできた。

その声の豹変振りに驚きつつ振り返ると、すだれは座布団に座つたまま、僕の顔を見上げている。不安な不穏な表情。見ているこっちが不安定になりそうな顔だった。

すだれは、眼鏡の奥の陰つた瞳で僕を見据えたまま、

「——粉雪君は、この閉鎖から外へ出て行きたいの？」

そんな疑問を投げかけてくる。唐突で、突然の質問。突然すぎて、質問の内容が一瞬理解できなかった。

僕はすだれの真意が読めないまま、狼狽しながら、

「……え、いや……そりゃ、まあ……」

曖昧気味に答え、しかしそれ以外は何も言えずに、気まずさから逃げるかのように、あるいは何かを隠すように、僕はいつだかのようにそそくさと、

部屋を出て行った。

第九章「サーチ」― 3

……さて、どうすればいい？

僕は割りと単純に考えすぎていたかもしれない。犯人は自警委員の中の誰かと目星をつけた上で、その中で学園閉鎖に積極的だった人間を探せばいいと、そう考えていた。それが根拠になると考えていた。

しかし、その 当て がなくなってしまったのだ。

学園の完全閉鎖は誰かが言い出したことではなく、マニュアル通りなのだ。

そりゃそうだ。ある程度頭の回る人間なら、そんな分かりやすい言動をするとも思えない。そんな「自分が犯人です」と言うような発言は、当然のごとく慎むだろう。

しかも僕はこの学園閉鎖に関して完全に部外者で、その学園閉鎖に繋がる一連の出来事を何一つ見てないんだ。事実を何も知らない人から得た情報で考えていくしかない。

……じゃあ、次はどういう手を打てばいい？

この状況で一番恩恵を受けている人間を探してみるか？

だが、僕は自警委員の三人とそれぞれ面識こそあれど、そんな親しいわけでもない。その内面まで知ってるわけでもないんだ。だから閉鎖の後でその人の何が変わったのか、変わっていないのか、見抜けるかと言われればそれは微妙だ。

それにこれから探るにしても、それを隠すのは彼あるいは彼女にとって造作もないことだろう。情報の出し入れは向こうに主導権がある。僕の方が、完全に立場が悪い。

何か——何か手を考えなければ。

ふつつつ考え込みながら歩を進め、僕はようやく食堂にたどり着いた。

プラスチックの長テーブルと椅子が並んだ、どこからどう見ても食堂にしか見えないスペース。時間感覚が狂っているせいで今が昼時なのかそうでないのか分からないが、中は結構閑散としていた。入口付近のテーブルに数人の生徒が座っていて、それぞれ談笑しているくらいである。

僕はその中を見回して、窓際にぼつんと座っている乖離を見つけ

た。

「……あ、粉雪君。こっちよ」

うつすら笑みを浮かべながら、乖離がこっちに手を振る。僕はそ

ちの方へ進んで、

「ああ、お待たせ」

「どう？ 何か分かった？」

乖離は紙コップを手に持ったまま、期待が垣間見える顔で尋ねてきた。

僕は乖離の向かいの椅子に腰を降ろしながら、

「いいや、ダメだ。学園の閉鎖はマニュアル通りだったらしい。ようは、こういう状況を作れば勝手にこうなるようになってたってわけだ。」

「そう、そうだったわね。………他には？」

「いや、他に何を聞けばいいのかわからなくて、あえなく退散してきた」

僕が掌を天井に向けると、乖離はやや渋面を作り、

「もう少し何とかならなかったの？」

「………そう言うなよ。元々よく話してた分、改めて目の前にすると聞きづらいんだよ。しかも、僕の考えを向こうに見抜かれた感じで。もう、どうしようもなかった………」

僕は言い訳のように言った。実際、これは言い訳なのかもしれない。すだれのことを疑いきれてなかっただけかもしれない。

「まあ、しょうがないわね。………で、これからどうするの？」

「うーん、そうだな。正直微妙なところだ。確信を持って打てる手がない。……しかしだからって何か行動を起こさない限りは、コトは進展しないしね。とりあえず次は、一本木先輩のところに行つて――」

――と、

がちやああああん

皿を割つたような音が聞こえて、振り返ると本当に床に皿の破片が散らばっていた。そして僕が見たのはそれだけではなく、

「……………あ、あ」

視界の向こう、食堂の中心付近に存在していたのは、赤のような、青のような、黒のような、紫のような色をした、角ばってるような丸まっているような、立方体のような、球のような――もの雲のように刻々と形を変えながら、しかしそこに留まって、質量を感じさせない、異質で異様で異形な風体でそこにあった。

僕は、これを一瞬で理解した。そいつは――

「――不審なもの！」

僕の隣で乖離が叫ぶように言った。

「うわああああ！」

「きゃあああああ！」

周りで悲鳴が上がる。入口の方で談笑していたグループは皆驚愕の表情を浮かべ、扉から一目散に逃げていった。僕も逃げることをまず考えたが、しかし出口がこいつに挟まれてるせいで、簡単にはそつちに行けそうもない。

「どうする？」と尋ねようと乖離の方を振り返った瞬間、

「あなたは下がって！」

不審なものを睨みながら大きな声をあげ、乖離はポケットからカードを取り出した。そして不審なものの方へ駆け出しながらそれを振り、

「風よ来たれ！」

その瞬間風が巻き起こり、その風圧に僕は顔を腕でかばった。腕

の隙間から薄目で見ると、周囲に竜巻が巻き起こり、机やイスが巻き込まれ、そしてそれらは 不審なもの の方へ猛烈なスピードで飛んでいった。

破壊音が響く。

木と鉄の塊が それ にぶつかり、音を上げて飛び散った。その反動で 不審なもの はひるんだように、動きを止める。よく見ると、そいつの体に傷がついているのが分かった。

……こいつは、幻覚じゃないのか。

「いける！」

乖離は叫びつつ、もう一度カードを振ろうとした。が、

うおおおおおおお

突然 不審なもの が唸るような声をあげ、風が巻き起こった。

僕は慌てて床にしがみついたが、目の前で立ち尽くしていた乖離は吹き飛ばされ、

「キャッ」

壁に叩きつけられた。すぐに立ち上がろうとするが、よろよろと痛みで立てない様子。

そして追い討ちをかけるように、いきなり 不審なもの が分裂を開始した。千切れるように、一つ一つ塊が増えていく。そしてその塊が三十個できたくらいで、僕らの正面がそいつらによって百八十度塞がれた。

僕らを敵—— いや、獲物と認識したように、じりじりと距離を詰めてくる。

悪意も善意も喜びも怒りも感じられず、ただそう決められているからそう動いているというだけのように、近づいてくる。カウントダウンするように、こっちへ向かって進んでくる。

僕は、はぁ、と息を吐きながら、

「……………しょうがない。乖離、少し冷たいけど、我慢してくれ」「え？」

僕はカードを取り出し、目の前で振った。

——嵐のように、僕の周囲に天井から大雨がざあざあ振り出す。再度、僕はカードを振る。

——竜巻が巻き起こり、僕らを取り囲む。不審なものに雨粒を弾き飛ばしていく。

再々度、僕はカードを振る。

——稲妻が現れ、一匹の不審なものに向かいって飛び出していく。

再々々度、僕は間をおかずにカードを振る。

——僕と乖離を囲うように、薄く赤らんだ球状の『ウォール』が浮かび上がった。

そして、稲妻が不審なものにたどり着いた瞬間、

——水気を伝い、弧を描くように青白い光が走った。

衝突音のような音。

飛び交う火花。

こげる匂い。

不審なものは動かず、動けず、段々黒ずんで来て、そして——

——灰のように、塵のように、何も残らず、さらさらと消えていった。

粉々になった机やイスと、濡れて焦げ付いた床だけが残る。

辺りは急に無音になった。

僕の背後、片腕を抑えながら乖離がふらつきつつも立ち上がり、

「……………粉雪君」

「まあ、こんなところだろう。……大丈夫か？ 保健室行くか？」

「え、あ、うん。ちょっと腕切っちゃったみたい。それより——

——す……すごいわね。鮮やかな手口というか」

「まあ……ね。それより早く保健室へ行こう」

「……うん、ありがとう」

僕が手を差し出すと、乖離は照れたような笑みを浮かべて、その

手に掴まってきた。

この学園の保健室は、南校舎の一階にある。

当然こんな状況で保健の先生がいるわけもなく、僕もそれを期待してここに来たわけじゃない。欲しいのは、消毒液とガーゼと包帯だ。

どうやら乖離は吹き飛ばされた拍子にイスの破片で腕を切ってしまったようで、腕をまくると二の腕のところに赤い線ができていた。加えて、壁に叩きつけられた衝撃で腰も痛めていて、歩くのが少し辛いらしい。保健室に来る途中も、ときどき僕が支えてやらなければならなかった。

包帯を巻いたりシップを貼ったりするだけなので、別段困難な作業でもない。貼って巻いてちゃん切ってというだけだ。

しかしシップを貼る際、目指す場所にしっかりと張るために、乖離が上着を少しばかりたくし上げ、のぞいた腰元に僕が貼ってやるという手順を踏んだわけだが、その白い肌を目の前に、どうも後ろめたくなるのは乖離だからだろうか？ 脳内で「うっふふ」と悪戯に笑うすだれの顔が思い浮かんだが、何でこんなときにあいつの顔が浮かぶのだろう？

とにもかくにもほどなくして処置は終わったわけだが、こんな体を痛めている乖離をあちこち連れまわせるわけもなく、僕は円筒の椅子に座る乖離に向かって、

「……しょうがない、お前は少し休んでろ。自警委員への聞き込みは僕がやっておく」

「うん、ごめん。ありがとう——でも、さっきの粉雪君を見て、何でクルト先輩があなたに興味を持ってたのか、何となく分かったわ」

「……そう？」

「ええ。テストの時のあれは、あなたの演技だったんじゃないかつ

「て思えてくるわ」

……なかなか鋭い。

「あなたになら、任せられると思う。だから——お願いね」

そう言つて、申し訳なさそうな顔をする乖離。………相変わら

ず、乖離がこんな殊勝な表情をするとは意外も意外。この前僕を終始睨んでいたときとは大違いだ。人の内面でののは、案外分からんな僕は、

「ああ、わかったよ」

と含み笑いで言いながら、保健室を出た。

「さて、一本木先輩のところへ行ってみるか。………正直、のんびりしてられないな」

第十章「リンク」―1

那頭奈学園記念館。

その建物は、学園敷地内の東端にある。『那頭奈学園』の五十周年だか百周年だかの記念に作られた建物だそうだ。入学式の日に施設説明と称して倉林先生に連れられて、クラス全員で一度だけ入ったことがある。

それほど記憶に残っていないが、確か一階は古い洋館のような造りで、過去の写真がそこら中に飾られていた。廃れた美術館のような雰囲気だった覚えがある。

そして二階は立ち入り禁止だった。それというのも、その二階が生徒会室として使われているからだ。そのときは別にそこに何の興味もなく、僕は「そうなのか、ふーん」と納得して引き返したわけだが、

しかし今日の目的地はそこだ。

僕はその木造二階建ての建物を正面から眺め、「行くか」と自分に言い聞かせるように呟いた。そしてなかなか重いガラス扉を開き、その木の板でできた床に足を踏み入れていく。

入口のすぐ横にある受付のような窓口に、人がいた。

チケット販売員のように、ガラス越しにこちらを伺っている。シートヘアーで、座ってるだけでお嬢様の雰囲気をかもし出しているその女子生徒は、いつも一本木先輩と一緒にいた、ええと――
―そう、りえ先輩だ。そういや、僕は彼女の苗字を知らなかったな。
「あら、柊木君。いかがなされました？ どういったご用件でしょう？」

長いまつげを瞬かせながら、花をめするような笑みを浮かべて先輩が聞いてきた。

「え、と。一本木先輩に用があつてきたんです。ここにいますか？」
「どういったご用件でしょう？」

同じ質問を投げかけてくる。

「え……と、この学園の完全閉鎖について、ちょっと聞きたいことがあります」

「生徒会長は現在忙しいので、急ぎの用でなければ後日出なおしていただきたいのですが？」

畳み掛けるように言ってくるりえ先輩。僕は内心困惑しつつ、

「い、いえ。実は生徒会長としてではなくて、自警委員としての一本木先輩に聞きたいことがあって来たんです」

「なるほど……」

口元をゆがめる程度の笑みを作って、先輩は頷いた。

「……まあ、いいでしょう。あなたは羽根音と個人的に面識がある方です。私もあなたが羽根音と何を話すのか一興ありますし、ね」
そう言って立ち上がるりえ先輩。横にある扉から廊下に出てきて
「こちらです」と言って歩き出した。僕もそれについていく。

先輩に続いて、白黒の集合写真があちらこちらに飾ってある、あからさまな「記念館」という雰囲気を出している廊下をすたすたと進んでいく。

結構長い廊下だなあ、と周りを見渡していると、ふと、りえ先輩が首だけこつちに向けてきて、

「……しかし、意外ですね。あなたが自分から動こうとするなんて」「そうですか？」

「ええ。あなたはどちらかというと、他人を観察して楽しむような方だと思ってましたから。この事件も、その他大勢と共にただ終わりを待っていきそうなものを。………何か、焦ってらっしゃるのかしら？」

「……いえ、そんなことはないんですけど」

どこまでも高貴な微笑を浮かべて聞いてくるりえ先輩に、僕はぼやかすように答えた。こういう人を相手にした経験がないせいか、どうもこの人と一緒にいるとリズムが狂っていくような気がする。

「んふふ。初めてあなたと合間見えた時は、あなたと私は至極似て

いると思いましたが。立場と云うか、状況と云うか、存在と云うか、その辺りのものが、ね。……しかしこうしてみると、あなたと私はずれていて——そして反対ですね」

「……反対？」

「ええ。反対、真逆です。同じ場所に居るのに、進んでいく方向がまったく逆なんです。ほんの少しずれているだけなのに、実はそのずれが、すごく重要なのですね」

りえ先輩は、自分で——自分だけで——納得したように、言葉を紡いでいく。僕はただ、それを聞いているしかない。

「ときに、柊木君。あなた、妹さんがいらっしやるんですってね？」

「え？ ええ、まあ」

どうして知ってるんだ？ ……多分、すだれから聞いたのか。

自警委員と生徒会。どちらも一本木先輩が関わってるし、学園の調査も一緒にやっていた。そんな遠くない組織だ。面識もあるんだろう。僕について二人が何を話していたのが気になるが。

「その妹さん、大事になさってますか？」

「大事に……ですか？ いやあ、別に仲がいい訳でもなくて、ケンカもちよくしてくれましたよ。この半年は一度も会ってませんしね」

「まあ。寂しがってるんじゃないですか？」

「いやあ、そんなことはないでしょう。きつとせいせいしてるんじゃないですか？ それに、実は僕の家って交通の便が悪いところにありますね、県内なんですけど、ここから帰るのに四時間近くかかるんです。とても半日じゃ行って帰ってこれないんですよ。だから、この学園にいる限りは会つのは無理でしょうね。向こうが来ない限り」

「なるほど、それは仕方ありませんわね」

先輩は柔らかな微笑を作りながら、それでも歩調を崩すことなく廊下を進んでいく。

「……私にも一人妹がいましたね、別の高校に行ってるんですが、

まあ姉としてなかなか可愛い子です。その子が言うにはですね、人の心なんていうのは複雑なようで、実はただの言葉の連なりではないと言うのです。私も最初はそれに同意しかねましてね、この子は何と呑気な子だろうと、悩みがまったくないのかしらと——まあ、そこが可愛いところでもあるんですが——そう思っていました。しかしこういう状況になってみて、ようやく私も自分の願望が至極単純なものだったことに気付いたんです。そう、私が求めているのはたった一つ。夢であっても欲であっても、願望でしかないんですから。その願望に沿って人は生きていくのですからね。んふふ、あなたの本当の願望というのは、一体どこにあるんでしょうね？

…さあ、着きましたよ」

そう言って、りえ先輩は仰々しく閉ざされているドアの前で立ち止まった。

第十章「リンク」―2

「失礼します」

恐る恐る言いながら、僕は扉を開けた。

視界に広がったのは、赤い絨毯とこげ茶色の大きな机。どこぞの会社の社長室を思わせるような、高級感のある部屋だ。荘厳という形容が当てはまる。

そしてその机の奥に、書類と睨めっこしている黒髪的女子生徒が座っていた。ふと顔を上げ、少し驚いたような顔をしたその生徒――生徒会長、一本木先輩――は、

「おや、柊木君。こんなところへ、どうしたんだい？ 私に何か用かな？」

「はい。先輩に、この完全閉鎖について聞きたいことがあって来ました」

「そうか。……正直言うと、私も色々忙しくてね。現在この学園の食料やら電気供給やらを管理しているのが、実は私なんだよ。まったく、こんな面倒なことになるとは思わなかった……。まあしかし、君の方も切羽詰っているようだし、そっちの話を先に聞こうか。……じゃあ、りえ、悪いが席を外してくれないか？」

「かしこまりましたわ」

りえ先輩は秘書官のようにぴしっとした会釈をして、部屋を出て行った。残されたのは僕と、一本木先輩だけ。

一本木先輩は握っていた書類を机の上に置き、イスから立ち上がりながら、

「で、君からの用件は何かかな？」

「単刀直入に聞きます。あなたは現状に満足してますか？」

「……満足？」

「ええ。つまり、この状況はあなたの望み通りか、と言うことです。この完全閉鎖があと何年も続けばいいと思っていますか？ 逆に不

満はありますか？」

「……ふむ、これは少し予想外の質問だが。しかし今の私を見てみたまえ。楽しそうに見えるかい？ 学園の管理を任されて、ほとんどこの部屋から出られないのだよ。食料、日用品、衣料品、そして電気や水の使用量を把握し、その流通を管理しなければならぬからね。自警委員の仕事がなくなって少しは楽になったが、それでも逃げ出したい気分なのが本音だよ」

疲れたような笑みを向けてくる一本木先輩。……なるほど、確かにそう見える。学園が閉鎖されたおかげで報われたなんて様子は、全然ない。この状況は彼女にとってプラスだとは思えない。ということ、この先輩はシロだということだろうか。

「……何だ、柊木君、その人を観察するような目は？ まさか生徒一人一人にそれを聞き周って犯人探しでもしてるのかい？ それはまた途方もない所業だな。……いや、地球がひっくり返っても君がそこまで真摯になるとも思えないな。……もしかして何人かに目星がついてたりするのかな？ その目星が生徒会だからということ、私のところに来たとか？」

「ええと、そうですね、実は——」

そして僕は小一時間、一本木先輩に乖離やすだれに話したのと同じことを説明した。やけに興味深そうな顔で耳を傾けつつ、僕の言葉の合間に相槌を打っていた先輩は、僕が話し終わると「うむ」と首を捻って、

「確かにその考えはおもしろいが、しかし的を得ているとも思えないな」

子供を諭すような声音で言ってきた。

「矛盾こそしていないが、ところどころ論理の飛躍が見られるね。君は『こう考えられる』と繰り返しているけど、それは全部確率に頼ったものだ。『時間がずれていたから』とか『同姓同名が何十人いたから』とかね。ただ単にマジョリティを選んでいるだけで、断定には結びつかないよ。一つでも偶然があれば、それだけで崩壊し

てしまう理論だ。その中でも特に『犯人は学園の完全閉鎖を目論んでいた』という部分。これが大前提になっているけど、それは仮定であって事実じゃない。そこが崩れれば、その推理は何の意味もなくなってしまうよ」

言われて、僕は考え込む。……………言い返せない。

「それに、自警委員はもともと 不審なものを排除するために作られた委員会で、しかもそのマニュアルは会員しか知らない——いや、会員でさえそれを知らない人もいる。乖離なんかそうだったんじゃないか？　かく言う私も、実は今まで知らなかった。こういう事態にならない限り、マニュアルなんて開こうとも思わないからね。つまり、自警委員に入る前から、学園を閉鎖する権限について知ることはできないんだ。学園の完全閉鎖なんて、最初から思いつきようがないことなんだよ」

「で、でも……自警委員に入った後、それを思いついたって可能性もあるじゃないですか。もしくは、その 不審なものは、自警委員を作るための口実とかだったらどうです？　つまり、その犯人が 不審なものを作り出して、その後で、それを理由に自警委員を作ったとか。それなら——」

「確かに前者の可能性は否定はできない。いわゆる魔が差すというやつだろうな。後者に関しても、私や奥沢には可能だね。自警委員が作られたのは私たちが一年の時だから。学園を完全閉鎖する権利を得るために、『魔術』で 不審なものを作って、自警委員を立ち上げたともね。——しかし、それもやはり矛盾している。……聞いているよ、ついさっき食堂でその 不審なものに襲われたんだってね？　目撃者からの情報が来ている。閉鎖が終わっているのに 不審なものが現れているのは変だろう？　目的が達成されたのに、もう不要なのに、その 不審なものが存在するなんて。それじゃあ、この学園をいたずらに危険にするだけだ。自分が住んでいる、この学園をね」

「——っ……………」

もう僕は、黙るしかなかった。

「君の理論はおもしろいし、君の思慮深さには拍手を送る。だが、それは非現実的だね。残念ながら——それでは何も解決しない」
にべもなく、僕はぴしゃりと言いつ放たれた。

……もう、どうしようもない。

一本木先輩いわく、僕の『自警委員に犯人がいる』という推理には決定的な証拠がない。

それに、乖離はわざわざ僕のところまで捜査の協力を仰ぎに来たところから犯人ではないし、すだれには学園を閉鎖するような大事をする余裕はなかった。一本木先輩には、この閉鎖を作っても何のメリットもない。そしてクルト先輩についても、すだれと一本木先輩が「ずっと学園内を調べていた」と言っていた。

加えて、学園が閉鎖された後も 不審なものがずっと存在していることから、閉鎖と 不審なものは無関係。だったら、自警委員とも無関係。そんな結論。

いつだかのように、考えの取っ掛かりが何もなくなくなってしまった。このままクルト先輩のところへ行っても——そしてさつきと同じように「現状に満足しているか？」と尋ねてみても——同じことを言われるのが目に見えている。これじゃあ行っても意味がないだろう。………そもそも、自警委員は関係ないんだっけ。

思考がこんがらがってきた。

考えるだけで事件を解決するなんていうのは、元々無理なのかもしれない。まして僕のような部外者には。

僕は頭をたれて、とぼとぼと砂利道を歩く。目指しているのは自分の部屋。少し休もうと思つて……。

空は、ようやく夕焼け。なんだか一日がとてつもなく長く感じた。乖離が僕の部屋を訪ねてきてからまだ一日も経っていないなんて、信じられないくらいだ。

「あちこち歩き回ったからなあ」
嘆息しながら呟き、僕はふっと垣根の方を見た。そこに見えた、
空白のスペース。

やはり、時計塔は消えている。

あの時はそれが大問題だったが、今にしてみれば、もうどうでもいいことのように思える。あってもなくても、僕は困らない。

ふと、何ともなしに、『この時計塔が消えたのも、この学園の閉鎖と関係あるのでは?』と考えてみた。単なる思い付き。

そもそも時期が完全にずれているし、リンクしているなんて可能性はどこにも――

――ん?

一つ、引つかかる。

一つの単語だけ、引つかかる。

どれだ? どれだ? どれだ?

閉鎖? ―― 違う。

生徒会? ―― 違う。

自警委員? ―― 違う。

那頭奈学園? ―― 違う。

違う、違う、違う、そうじゃない。

そうじゃなくて、

それは、その単語は――そう、『時間』。
『時間』だ。

学園が閉鎖されてから、僕らの時間感覚は狂ってしまった。

それは外界と隔絶されたからだと諦めていたが。

消えた時計と狂った時計。

その違いは?

違いは何だ？

そもそも狂った時計は、僕らが普段使っていた普通のもの。

それに対して、時計塔の時計は、

レンガ造りで、上に時計盤がくっついている——ねじ巻き式

の——

——ねじ巻き式？

.....

.....

——まさか

第十一章「クリアー」―1

上下左右をコンクリートで囲まれた回廊を、僕はコツコツと歩いていく。

反響がよく、周りには僕しかないはずなのに足音が数人分聞こえてくる。薄暗さと相まって、少々気味が悪い。怪談話の導入部分のようだ。

五分くらい歩いてようやく扉が見えた。

赤黒い、少し錆びた頑丈そうな扉。単体で十数キロありそう。反響音が強かったのは、こいつのせいもあるんだろう。

僕は手前右側に突き出した取っ手をかけた。そして時計回りに回す。これは一種の賭けだったが、ノブは簡単に回り、扉が自由になった。これで、ここで待つ必要がなくなった。話が早く進む。

がちやりと扉を開けると、少し目がくらんだ。中は廊下よりも明るい。目が慣れるのを待ってから見渡すと、教室のように蛍光灯が天井で瞬いていた。

そして、奥。

円筒の台の上に、胡桃を百倍に拡大したような物体が置かれている。これを見るのは初めてだが、これが何なのかは一瞬で分かった。

これが――『種』の『核』

この『那頭奈学園』が『那頭奈学園』である、根本的な理由。閉鎖されている原因。『魔術』の源。この『核』の欠片が僕らの学生証の中に入っているから、僕らは『魔術』を使うことができるのだ。

この『核』を少し触ってみようと思ったが、すぐに考え直した。僕がここに来た元々の理由はこれじゃない。これじゃなくて――

「やあ、柊木君。どうしたんだい？　こんなところに来て」

部屋の中に男の声が響く。その残響音と共に、『核』の向こうから現れたのは――

——クルト先輩。

「ふふふ。君がこの地下シェルターに用があるなんて思えないけど、一体どうしたのかな？」

「先輩こそ、ここを何をやってるんです？」

「ああ、実はここは俺のお気に入りの場所だね——なんてのは、わざとらしすぎるかな？」

くくく、と茶化したような笑みを向けてくるクルト先輩。僕はそれに構うことなく、

「実は僕、少しこの学園の完全閉鎖の犯人探しをしてましてね」

「ほう。……まさか、俺こそが犯人だって言うつもりじゃないだろうね？」

「……………ええ、違います。『あなたこそ』ではないです」

僕はなるたけ落ち着いて、ゆっくりとかぶりを振る。

「じゃあ、誰だって言うんだい？」

「ええ、それをちゃんと説明させてもらいますよ。そのためにここに来たんですから。それでは——まあ、僕が自警委員を疑ってるってところから始めてもいいですか？ もう、他の誰かから聞いてるんでしょう？」

「ああ、昨夜一本木に聞いたよ。実は、君が犯人を検挙するために動き回ってることも聞いている」

「そうですね、ならそこから始めましょう。——昨日、僕は一本木先輩に論破の嵐をこうむったわけですが、あの後、僕は一つ不審に思ったことがあったんです。一ヶ月前、急に消えてしまった時計のモニメントです。最初は、それはこの学園閉鎖とは無関係だと思ってたんですがね、しかし思い出したんです。その時計がねじ巻き式 だったことに。……で、考えてみました。『もしその時計塔が消えてなかったらどうなっていたか？』ということ。それを考えて、考えて考えて、そして僕はようやく気付きました。気付いたんですよ。そう、もしあの時計が完全閉鎖の後も存在してい

ば、僕らは――

―― 正確な時間 を知ることができたんです。

『サーチ』の磁場やらで狂った時計――今にして思えば、あれが本当に磁場の影響だったのかも怪しいですが――を、あれに合わせて元に戻せたはずなんです。バネと歯車で動く機構なら、磁力なんてほとんど関係ないんですから。僕らが時間感覚を失うこともなかったんです。しかし、一ヶ月前に時計塔が消されたせいでそれが不可能になったんですよ」

「なるほど……時計塔、ねえ」

あごを押さえ、微妙な表情で頷くクルト先輩。

「逆に考えると、正確な時間を知られるのがまずいからその時計塔を消したんじゃないのか？　そういう疑いが僕の中で出てきました。それで調べてみようと、僕はさっきコンピューター室に行ってみました」

「おいおい、コンピューター室は――」

「ええ、使用中止でしたね。でも、そこにもまた引っ掛かりがあったんです。そもそも、コンピューターの用途はインターネットだけじゃない。高校生だってゲームをしたりするし、プログラムを書けるやつもいるかもしれない。なのに、インターネットの回線が切れたからと言って部屋自体を使用中止にしてしまうのは強引じゃないですか？　何か隠してるんじゃないですか？　……………まあ、正直僕もあまり期待しないで行ってみたんですが――そうと知ってれば最初からそこに行ってしまったからね――しかし案の定、一つのパソコンだけインターネットに繋がれてました。試しに外の時間を見てみたんですが、これが驚きでした――

――閉鎖されてから、まだ二日しか経ってないんですからね」

言いながら、僕は少し先輩を睨みつけた。しかし先輩は、そんな僕の目線にも笑みを返すだけだった。

その余裕そうな素振りをいぶかしみつつも、目つきを弱めることなく僕は説明を続け、

「……いくら時間感覚が狂っているとしても、そこまで大幅にずれているとは考えられません。二週間くらい経った気がするのに、まだ二日とは。普通ならただ混乱するだけでしょう。もしくはパソコンの方を疑ったかもしれない。しかし僕らには『魔術』がある。あの範囲の時間経過を遅らせる『魔術』だって、実際に見たことがあるんです。だから、これは学園の領域内すべてに 時間の経過を遅くする魔術 をかけたんじゃないか？ 外と内の時間を断絶するための閉鎖だったんじゃないか？ そういう推理が可能なんです。そうなると、その『魔術』を使った者はこの『種』の近くにいると考えられる。学生証の『種』だけでそんな大規模な『魔術』が使えると思えませんからね。この地下シエルターにある『種』の本体である『核』を使うしかありません。そしてその『核』の近くにいたのは、そう——あなたです、クルト先輩」

「俺がここにいたから俺が犯人だって？ おいおいおいおいおい」

先輩は「待つてくれよ」と言うように肩を竦め、

「それはいささか雑な考え方じゃないか？ 俺も一昨日までずっと学園の調査をしてたんだ。そんな大きな『魔術』を使う余裕なんてなかったよ。それは、他のみんなも言ってたろ？」

「みんなで口裏合わせしてたんじゃないですか？」

「いや……それにしたって、君は乖離と色々調べまわったりしてたんだろ？ 乖離は学園の閉鎖を解決するために協力してたんだろ？ それはどう説明するんだ。学園閉鎖を解決するために心血を注ぐやつが、その主犯と口裏を合わせるなんてありえないだろ」

「さあ、どうですかね？ あれは乖離の自作自演ってやつじゃないんですか？ 昨日のあの 不審なもの に襲われたのも——あまり

考えたくありませんが——ちよろちよろ動き回っている僕が邪魔になり、あれで僕を行動不能にしまおうとしたとか、ね。幻覚でも使えば不可能ではないでしょう」

「じゃあ、風宮はどうなんだい？ あいつと君は近い間柄なんだろう？ そんな人間が君を騙すって言うのか？」

「近しくつても、隠し事ぐらいはしますよ。それは何の保証にもなりません」

「じゃあ……じゃあ、一本木はどうだ？ あいつはこの学園閉鎖に關して、不満たらたらだっただろう。そんなやつが加担してたって言うのか？」

「それも、疑われないための演技なんじゃないですか？」

「……そりゃまた、強引な解釈だね。……しかしそうなる——」

「ええ、そうです。確かにあなた方の話を聞く分には、それだけで全部つじつまが合っている。歯車のように、あなた方の証言は噛み合っている。逆に、それを否定するにはすべてを疑わなければならない。全員を疑わなければならない。そう、つまり——

——自警委員全員が犯人なんでしょう？」

僕の疑問文を借りた断定に、クルト先輩は苦笑いを浮かべた。

「はは、はははは……。何だいそりゃ？ その考え方は？ 閉鎖の内側で時間が狂ってるから、大規模な『魔術』が使われている？

大規模な『魔術』が使われているから、犯人は『核』の側にいる？

『核』の側にいるから、俺が犯人？ それを否定する人はみんな共犯者？ ……分かりやすい、確かに分かりやすいが、何とも

スマートじゃないねえ。君が一体どんな精錬された論理を展開するのか、俺も少し期待してたのに。見てきたからそうなんです、っただけじゃないか、それじゃ。これが推理小説だったらバッシングの嵐だよ。いや、推理小説じゃなくてもだ」

「別に、僕には不満はありませんよ。僕は元々、こういう底意地の悪い終焉が好きなんです」

「それは君が読者だからだろ？ …………… ふむ、そうか。この場合おかしいのは、むしろ君が読者じゃなく登場人物として動き回っていることなのか。なるほど、なるほど」

一人で納得したようにこくこく頷く先輩。

僕はその芝居じみた動作に構わずに、

「で、他に言うことはありますか？ ないなら、早く——」

「いや、あるね。あるある、おおありだ。確かにこれで可能性は否定はできなくなったけど、それはそれだけのことだ。俺たちを犯人と断定するには、問題が一つ解決してないじゃないか。つまりだね、君が言っていることは、依然としてすべて仮定の連なりなんだよ。百歩譲って、この閉鎖が学園の時間経過を遅くするためだということとは認めよう。それがこの『核』を使った『魔術』によるものだったこともね。しかし、それを俺がやったってことは証明されていない。俺がここにいるのは、たまたまかもしれないじゃないか。そう、俺はまだ追い詰められていない」

僕は、まるで追い詰めて欲しいような口ぶりだなと思いつつ、

「いえ、確信ならありますよ。さっきコンピューター室で、以前僕が見つけたこの学園の教職員と同名の名前が載ってるウェブサイトをみてきたんですが、そのうち二十個が消されてました」

「……ああ、その話は風宮に聞いたよ。教職員六十人の名前が、別の役職の人間としてネットに載ってたんだってね。でも、別におかしい話じゃないだろ？ この情報が目まぐるしく変わる時代、三割のページが消えてたって——」

「ええ。三割なら、ね」

言いながら、僕はクルト先輩を直視した。

「でももしこれが百パーセントだったら、問題だと思いませんか？」

「は？ いや、だから同名同名で、しかも同時期に別の仕事に就いていると書かれていたページっていうのが、六十個以上あったんだ

る？ そのうちの二十個が消えただけなんだろう？ だったらそれは三割程度でしか——」

「それ、嘘なんですよ」

僕の声に呼応して、ひゅっというクルト先輩の息を呑む音がする。そして先輩は、その顔から初めて——笑みを消した。

「そう、そんな、偶然にも同姓同名がいて、同じ時期に別の仕事をすることが書いてあるページなんて二十個しかなかったんです。百数人中、二十人です。で、昨日そのことを初めて人に話して、次の日にそれがすべて消されてるなんて、明らかな 作為 を感じませんか？ しかも、元々滅多に内容が変わらない、パブリックな学校や店舗のページですからね。一ヶ月どころか一年経ったってそうは消されない。まして二十個がいっぺんには、ね。恐らく僕がその話をした後、慌ててそのページをクラッキングに行っただけでしょうね。六十個と言われていたけど、そのうち二十個しか見つからなかった。だから一応この二十個を消しておこうと、何かの拍子で僕に見られたとしても六十個中二十個なら不自然じゃないだろうと、そう考えたんですね。あなた達のうち誰がやったのかは知りませんが——まあ、十中八九すだれでしょうか？——でも、そうすることによりあなた方の 作為 を露呈することになってしまった。その同姓同名が 本物 であり、それがあなた達にとって見られるとまずいものであることを 自白 してしまっただけです」

「……だ、だって、すだれからちゃんと報告を受けている。君がいつに渡したリストには、ちゃんと六十人分の名前が載っていたと君がそれをでっ上げたと云っても、外出できた内——つまり学園が閉鎖される前——にそれを準備する意味がわからないし、学園内でそれをするにも、俺たちの監視下にいたはずだ。そんなこと、物理的に不可能な——」

「だったら、物理を無視すればいいじゃないですか。そう——」

『魔術』を使えば」

ぎりっという歯軋りが、クルト先輩の口から聞こえてきた。

「……そんな、君が嘘なんて、掟破りなことを——」

「ええ。だって、周りが嘘つきだらけなら、こっちも嘘をついて對抗するしかないじゃないですか。何も知らないただの登場人物ではない僕は、もう、こうするしかないじゃないですか」

僕は逆なで声で言う。

逆上すると思っていたクルト先輩は、しかしそのままうつむいて、電池が切れたように黙り込んだ。

見えない表情。気味が悪いような無言。

そして数十秒くらいそうした後で、クルト先輩は再びゆっくりとこちらに顔を向けてきて——勝ち誇ったような、勝ち得たような、勝ち取ったような笑みを浮かべた。

そんな表情を貼り付けた先輩の口から聞こえてきたセリフは——

「——ふふふ。柊木君、君は——合格だ」

第十一章「クリアー」―2

「……………合格？ 別に僕は、今さら自警委員に入る気なんてないですが」

「いやいや、それとはまた別の話だよ。自警委員なんかとは関係ない。あんなものは、俺にとってもただの古巣さ。そうじゃなく、君には真実を知る資格がある——知った上でこの場所で生きる資格がある、ということだ。君ならきつと、選択を間違えないだろう。つまり俺は君の思考能力を買ってるわけだ。部外者の君が、ここまですぐ真相に近づいたわけだからね」

「……………まあ正直、分からないこともいくつかあるんですがね。例えば、乖離が僕のところに来たことのメリットとか」

「ああ、それは簡単な話だ。彼女は 二重人格 だからさ」

……………二重……………人格？

「そう。これは性格に裏表があるとかの比喻表現じゃないよ？ 本物の二重人格。精神分離のことだ。実は彼女、乖離というメインの人格の他に 憑依 っていう別の人格を持っていたね。何でそんなことになったかと言うと、入学して間もなく、乖離が閉鎖された学園生活のせいでストレスにやられてね。使命感が強い子だから一人でずっと耐えていたんだろうけど、その結果、その苦しさから逃れるために 憑依 という人格が生まれてしまった——らしい。」

憑依 からそう聞いている。そしてその 憑依 は、学園の中だからこそ存在する人格だからね、卒業する日が来るのを恐れてこの計画に賛同してくれたんだ。ひと時でも長く存在するために。……………

…逆に乖離の方は事情を何も知らない。自警委員が 本来の目的のために動いてるときは、 憑依 に登場してもらってたんだ。だから乖離は、自警委員を本当に 不審なもの に対抗するための組織だと思っている。それで、わざわざ君に助力を仰ぎに行ったわけさ。見分け方は簡単。ずつとしかめっ面なのが乖離、たまに笑う方

が憑依だ」

……そう言えば確かに、あいつは笑ったり、笑わなかったりだった。

テストのために僕を呼び出したときは笑っていて、調査の助力を仰ぎに来た時は笑ってなかった。でも不審なものに襲われた時は笑っていて……。

「一本木の方も、まあ分かりやすい話で、花塚と恋仲なんだ。知ってるだろ？ 花塚りえ。いつも一本木の隣にいるお嬢様だ。一本木の方も花塚の方もなかなか古風な家らしくってね、当然ながらそんな恋仲は認められるはずもない。だからできるだけこの学園の中で長い時間を過ごそうと、俺に協力していた」

……一本木先輩と、りえ先輩が……。

じゃあ、文化祭の時、一本木先輩が僕に「君なら問題ない」と言っていたのも、つまりはそういうことだったのか。

「風宮の方は……説明することもないか？ 君の方が詳しくそうだしね。まあ言ってしまうえば、ずっと一緒にいたい想い人がいるそうだよ。正直、俺もあの子には手を焼いたんだけど」

世間話のように、クルト先輩は軽いトーンで説明を続けていく。

「じゃ、じゃあ——」

僕は声を振り絞り、

「——クルト先輩は何でこの計画を実行したんですか？」

「ふふ。そう、俺はね——」

先輩は、まるでその問いを待ち焦がれていたかのような笑みを浮かべた。そしてその隣に山積みになされている本——図書館から借りてきたんだろう、背表紙にラベルが貼ってある——をなでながら、
「——この世のすべての知識を得たいんだ」

……知識？

「そう。この世には様々な学問があって、文学、心理学、経済学、天文学、工学、数学、物理学、言語学、医学、法学、数え上げればきりが無い。それぞれの専門の学者がいて、素晴らしい知識を積み

上げている。だけど一流の学者でさえ、その中でも一つ、良くても二個三個の学問だけを究めるだけで終わってしまう。——惜しいと思わないかい？ 悲しいと思わないかい？ 悔しいと思わないかい？ 君も知っているだろ？ 素晴らしい知識に出会えた時、その刹那に感じる、新しい世界が開かれたような感覚を？

知っている と 知らない では、世界の見え方が大きく変わってしまうんだ。

例えば、推理小説を読んだときのことを考えてみなよ。一回目はただの謎解きでしかないが、しかし二回目。犯人が分かった上でもう一度それを読んだ時。ヤリ玉に上がる前の犯人の言動が、その言動から受けるイメージが、完全に変わってしまうだろ？ 『そのセリフは嘘だったのか』、『その振る舞いは演技だったのか』つて、そんな発見が溢れている。そこには、一回目の読破の時とはまったく違う世界が構築されているものだ」

ここで先輩はプレスして、

「つまりはそれと同じことだよ。学問においてもまた同意なんだ。天動説を信じるか地動説を信じるかで空の見え方が違ってしまう。初めて地動説を聞かされた人々の驚きなど、想像も及ばないね。生まれた時から地球が回っていると教えられてきた俺達にとっては。当時その正しさを理解できた人間は、それはそれは驚いただろう。感動しただろう。太陽や月や星の見え方が変わっただろう。空の見え方が変わっただろう。大地の見え方が変わっただろう。世界の見え方が変わっただろう。……そう。知識っていうのは、そういうものだ。世界を解き明かし、認識を変えていくものだ。見える世界を変えていくものだ。そしてここにある書物には、その種がいくつも詰まっている。その絶頂感を体感できる可能性が、この中に数え切れないほど存在している。なのになのになのに、俺達はそれをすべては解決できないまま、あえなくすべからく死んでいくんだ。そ

う、俺達には時間が足りない。俺は時間が欲しかった。だからこそ、俺はこの計画を実行したんだ」

「……………そ、そんなくだらないことのために、こんなことしたんですか？」

「おいおいおい。くだらないなんて言うなよ。知恵っていうのは、人間が自然に誇る唯一の能力じゃないか。その知恵を蓄積していったものが知識だろ。その知識のおかげで、人間はここまで反映した。知識って言うのは、地球上で最上級に位置するものだ。だからこそ俺は三年かけてこの計画を準備してたんだから」

まるで自慢話でもするように、クルト先輩は嬉々と言葉を続ける。「そもそも、俺がこの学園に入ったのは運がよかった。なんせ『魔術』なんてものに出会えたんだからね。初めてこの『魔術』で時間をコントロールできると聞いた時の感動は、もう忘れられないよ。自分が神になったように感じたもんだ。何でもできると錯覚してた。……………しかし、やっぱりこれにも制約があったんだよな」

苦労話を振り返るように、クルト先輩はとくとくと話し続ける。「そう。確かにある範囲の時間の経過を遅くすることは可能だけど、それは安定しないんだ。現象が発散してしまう。何か困いを作って、現象が漏れないようにしなければ安定は得られない。現象を遮る境界が必要なんだ。で、その境界を作るために俺が作ったのが、いわゆる 不審なもの なんだよ」

自分の作った芸術品を解説するように、言い続ける。

「これを作った目的は二つある。一つは、もちろん時間の境界のノードを作るため、そしてもう一つは『自警委員』を作らせるため。

……………ふふ。そう、君の考えは大当たりだ。いくら境界を作っても、人間である以上ある程度の生活環境は必要になる。さすがに時間を完全に止めてしまうわけにはいかないしね。そこまでやるのは、この『種』の『核』を使っても役不足だ。だから、この生活環境が整っている『那頭奈学園』を閉じてしまおうと、そう思ったわけだ」

まったく言い淀みなく、言葉は続く。

「そこで邪魔になるのは、いわゆる大人だ。年功序列のこの国じゃ、どうしたって年上が主導権を握ってしまうからね。俺の理想が阻害されてしまう可能性が高い。だから俺は『幻覚』を使って少しずつ大人を入れ替えていき、今年の四月にようやくすべての教職員が『幻覚』へと変わった。あとはこれをいつぺんに消してしまえば、緊急事態の一丁上がり。学園を閉鎖する口実になる。俺が作ったマニュアル通りにね」

ここで、ようやく声がやんだ。言いたいことが言い終わったんだろう、先輩の顔には拍手喝采を浴びる演者のような表情が張り付いている。

僕はその表情を睨み付けながら、冷たい声を作り、

「……………で、そこまできれいに自白しておいて、何が言いたいんです？」

「ふふ。分かっただろ？ 理解できただろ？ 俺のこの行動は決して歪んだものじゃなく、人として当然の欲求を、理路整然と獲得していった結晶なんだよ。まったくもってやましいものじゃない。そこまで思考力がある柊木君なら、分かるだろ？」

……………。

「君は真実にたどり着いたが、それはそれだけでしかないものだ。ここでお終い。さあ、これからのことを考えよう？ 正直に言えば、この閉鎖の中では外の十分の一の速さでしか時間は過ぎない。つまり外での一年が、この中での十年なんだ。得したと思わないか？ ふふ。食料のストックは、全生徒十年分がストックしてある。つまり、俺達は他の人よりも九年間もの時間を得するわけだ。確かに外には出られないが、それがどうしたって言うんだ？ 一応ネット回線は一つだけ残ってる。結構それを作るのが面倒だったけど——気付いたかい？ コンピューター室に一匹だけ 不審なものが潜んで、境界を作ってたんだよ——でも、おかげで外の情報もある程度仕入れることができる。それに、ここには時間がある。——さあ、柊木君、君もこの場所で願望を満たそうじゃないか？ 君の望

みは何だ？ 知識か？ 愛か？ 夢か？ それともそのまま時間か？ さあ、君の願望を叶えよう！」

演説のように、僕の目の前で声高らかに、歌うように、踊るように僕に言葉を投げかけてくるクルト先輩。僕は、僕はただ一言――

「――くだらない」

第十一章「クリアー」― 3

「……………は？」

「どいつもこいつも、どいつもこいつも、どいつもこいつも、どいつもこいつも、どいつもこいつも、どいつもこいつも、どいつもこいつも、どいつもこいつも、どいつもこいつも、どいつもこいつも、どいつもこいつも……………」

僕は、感情を吐き出すように言う。

僕の視線の先、一瞬ぽかんと大口を開けたクルト先輩は、まるで意思疎通ができていないというような顔をしながら、

「おいおいおい、柊木君、一体どうしたんだ？ 何が気に入らないんだ？」

「――年上に説教するのも気が引けますがね、しかしあんたら、本当に、生き方が後ろ向き過ぎですよ」

――本当に、どいつもこいつも。

「あんたら、ただ時間が過ぎるのが怖いだけじゃないですか。今の時間にもっといたいってだけじゃないですか。時間よ止まれって、締め切り直前の作家かなんかですか？ 夢も半ばの若人が、よくもまあそんな枯れた発言ができますね。現に見てください、他の生徒達を。時間の束縛から自由になったと思ったら、みんな何もしないじゃないですか。勉強やらスポーツの練習やらに精を出してるのはごく一部ですよ、ごく一部。千人の中の、たかだか数人。他の人はみんな遊んでますよ。だべったりなんなり。先が見えなくなった途端、みんな立ち止まってしまいましたよ。そうですね、先がなくちゃ、生きる意味なんてない、意義なんてないんですよ。それをあんたらは、分かってない。本当に、分かってない」

「――ふふ、何だからしくない言葉が出てくるね。まさか君からそんな風なことを聞くとは思わなかったよ。ふふふ。その口ぶりからすると、君にも 先 があるってことになるのかな？ 一体どんな

先　なのか、聞いてみたいんだけど？」

「あなたに教える義理はありませんよ」

「……まあ、そりゃそうだ」

クルト先輩は顔を引きつらせ、しかし最低限の笑みを浮かべて言うてくる。そして鼻を鳴らしながら、

「………やれやれ、本当はこんな手段に出たくなかったんだが」

そう言つて、先輩はズボンのポケットから学生証を取り出した。

「さあ、悪いが今のことは全部忘れてもらおうか。別に痛くはないから、しばらくじっとしていてくれ」

「……ふざけないでください」

僕もカードを取り出し、そして間髪入れずに振った。

先輩は一瞬ビクツと構えたが、しかしそれ以上は何もせず、僕の右手に現れたものを凝視するだけにとどまった。僕の右手には、たった今僕が頭でイメージしたもの——金属の斧——が、天井の蛍光灯の光を反射している。……少し、重い。

「……まさか、柊木君、それで——」

「ええ、そうです——」

僕は腕に力を入れて斧を持ち上げ、

「——よっ」

前へ駆け出した。

先輩の横を抜けて『種』へ向かって走っていく。そして『種』に向かつて勢い良く斧を振り上げた、が——

「うおっ！」

いきなり腹に衝撃を感じ、そのまま横へ吹き飛ばされた。それがクルト先輩が『魔術』で起こした風であることに、周りに何も堕ちてないことと先輩が元の位置からまったく動いていないことを確認してから、理解した。

「まったく、似合わないことをするなあ。力比べでもしようつていうのかい？　もしくは『魔術』比べか？　まあしかし、『魔術』に關してはこっちの方が一日の長がある。俺はこのカードを使い始め

て三年近くだ。悪いけど、これ以上は近づかせないよ」

クルト先輩は床に伏したままの僕の方へ一歩踏み出しながら、指揮棒のようにカードを振った。次の刹那、突風が巻き起こる。僕は慌ててカードを握り直し、周囲に『ウォール』を張った。

ごうっとうと風が唸る。

間一髪、その突風は僕の目の前で遮られた。僕の周囲は無風。しかし、赤い壁に相当な風圧がかかっているを感じる。壁越しにその様子を見ているだけで、吹き飛ばされてしまいそうな気になってしまう。

ただの空気音でしかないはずなのに、その音量は轟音とも言えるほどだ。壁の向こうは、舞い上がる砂埃で何も見えない。

……まずったな。

僕の目的は『種』の『核』。それさえ壊せば、すべてのかたがつかと思っていた。クルト先輩は防御に徹しなければならず、僕はただ攻撃するだけでいい。こっちの方がだいぶ有利だと踏んでいたんだが……。

……まさか、ここまでとは。

学生証を使ってるだけなのに、ここまで『魔術』に差があるとは思わなかった。風の威力、そして持続時間。僕とは段違いだ。

風が一向に鳴り止まない。

台風の暴風域のさらに数倍くらいの風速の風が、『ウォール』の向こうで巻き起こっている。それも、数分の間ずっと、弱まることなく。

……どうする？

この状態を切り抜けるには、どうすればいい？

『ウォール』を解いて出て行くななんて、とてもできない。吹き飛ばされるのが目に見えてる。そしたら、完全に無防備だ。記憶を消されて終わりだろう。やはりこのまま、先輩の集中力が切れるのを待つしかないのか？

……しかし、

それまでこの『ウォール』はもつのか？ もたせられるのか？

僕の目の前、相当なスピードで、空気と舞い上がった砂粒がぶつかっている。ガラスだったらとつくに粉々だろう。もし、もしこの壁が壊れたりしたら――

――と、僕がそんなイメージを思い描いてしまった瞬間、
ぴししっ

氷が割れるような音が聞こえ、そして――

「――うわっ」

体が軽くなった――と思ったのも一瞬、背中に鈍い痛み。胸がつぶされる感覚とともに、僕は床に倒れた。

「ゲホッゲホ」

「さあ、もういいだろ？」

先輩の影が、一步一步僕の方に近づいてくる。

「痛くないし、苦しくない。さあ、動かないで――」

「う、うるさい！」

僕は床にへたりこんだまま、カードを振った。

先輩に向かって一直線に向かっていく青白い稲妻――しかし

先輩は、体を傾げるだけでこれかわす。

「分かってないな」

クルト先輩は、苦笑で答える。

「君は、『魔術』における競り合いつていうものが分かってない。

確かに稲妻は、当たれば相手を一撃で行動不能にできる可能性もある。だけど攻撃範囲が極端に小さくて、相手に当てるのは至難だ。

しかも、放電現象なんて身近で見る機会なんて限られてるし、雷だつて遠巻きに見るかテレビで見る程度だろう。そんなイメージだけで大規模な稲妻なんて作れやしない。それよりもっと身近な現象で、しかも広範囲にわたる『魔術』を使うのが定石なんだよ。例えば――こんな風に！」

言ったと同時に、先輩はカードを振った。

再度、暴風が巻き起こる。

なすがまま、僕は平衡感覚を失い、直後、背中に衝撃。体全体に圧迫感と、肌に無数の小さな痛みが突き刺さった。

手が動かない。腕が動かない。足が動かない。首が動かない。目
が開けない。口が開けない。——呼吸ができない。

くる、しい。

無理矢理息を吸い込んでも、肺に何も入ってこない。溺れたような感覚。意識が遠のいていく。

いや、逆に段々苦しくなってきた。何だか、ふわふわした気分。体中にかかる圧迫感も麻痺してきている。ただ、頭の片隅で「この状態はやばい」と警鐘がなっているが。

……やばい、やばい、やばい。このままじゃ、本当に意識が……

あ、あ、何でこんなことに？

何で僕は、こんな目に会ってる？

何のために僕は、こんな目に遭ってる？

そもそも僕が学園閉鎖について調べ始めたのは、乖離が僕の部屋に来たから。乖離が僕に『当て』を聞きにきたからだ。

そして僕は、それに応えた。

たまたま…… たまたまそれを知っていたから、何となくそれが分かっていたから、だからそれを乖離に教え、それを確認するた
めだけに協力した。

そこに、僕の意味なんてない。……なかつたんだ。

そう、それはただの義務感。それだけだ。別に僕は、学園閉鎖の解決なんて望んでなかったはずだ。傍観していようと思っていたはずだ。時間や他人が解決するのを待っていようと思っていたはずだ。閉鎖の開放なんて望んでなかった、望んでなかった、望んでなかった、望んでなかった、望んでなかった、望んでなかった……な

かった——

——本当に？

僕が動いたのは、本当にただの確認？ 義務感？ それだけか？
それだけのために、僕はわざわざこんなところまで出向いたのか？
本当に？ 本当に？ 本当に？ 本当にそうなのか？
さっき僕は、何と言った？

—— 先 がなくちゃ、生きる意味なんてない。

先 ？ 先 って何だ？ 僕の 先 っていうのは、一体何なんだ？

自分で言ったセリフのくせに、その意味が分からない。

僕の 先 って何なんだ？ 学園が開放されて、自由になって、
外に出ることができて、そしてその 先 に、一体何があるんだ？
何が僕を待ってるっていうんだ？

買い物に行ける？ 買い食いでできる？ ゲーセンに行ける？

いや、そんなことのために僕は動かない。動いたりはいしない。僕
を知る人間なら誰だって同意するだろう。僕はそんなアグレッシブ
な性格じゃないと。自分でだってそう思う。

だったら何のため？ 何のためだ？ 他に何がある？

—— 実家に帰れるとか？

半年振りに実家に帰って、母さんや父さんや妹やらに会って、ご
近所さんにも挨拶して、中学の友人と遊んで……って、だから
どうした？ 別に僕はこの半年、ホームシックにかかったことなん
てない。家や友人に電話はちよくちよくしてたし、みんなの近況は
大体分かってる。家族に会ったからって、旧友に会ったからって、
それはそれで楽しそうだが、でもただそれだけだ。それだけでしか
ない。

—— いや、本当にそれだけか？

何かもう一つ、期待してるんじゃないか？

沈んでいく意識の奥底、ぼんやりとイメージが浮かぶ—— 半
年振りの実家。十六年住んでた一戸建てを懐かしむようにまじまじ

と見上げる僕。チャイムを鳴らすと、少しして玄関のドアが開く。そこから顔を出してくる両親、妹。久しぶり、という挨拶。相変わらずの他愛無い会話。そして促されるように玄関に上がるうとして、ふと僕は顔を横に向ける。その僕の隣には、もう一人いて、それは――

――カチューシャで、丸眼鏡の――

――と、急に体が自由になった。

右半身に衝撃。わき腹が痛い。目を開けると、視界には木目。張りつけの状態から床に落ちたんだ。

そしてようやく僕は、世界の上下を認識した。

「げほっ、えほっ」

咳き込みながら視線を上げると、僕を見下ろすクルト先輩。細目を見開き、あざ笑うかのような顔を向けている。

「どうだい？ 力の差がわかったかな？ 年季の差。経験の差。俺と君の力の差は、こんなにも大きいんだ。抵抗するだけ無駄だよ。損だよ。さあ、おとなしく記憶を消されてくれ」

クルト先輩が、一歩二歩と近づいてくる。床に耳をつけているせいで、その足音がやたら耳に響く。

「……柊木君。別に君には、何も問題ないだろう？ 学園の閉鎖が続いたからって、君は別に何かを失うわけじゃない。まあ、何かあったからって、俺が立ちはだかる以上、君に勝ち目はないんだからね」

……そうか、そうだろう、そうだ、そうなんだ。

僕には勝ち目はない。ありやしない。僕がクルト先輩をかくぐって『核』を壊せる可能性なんてない。先輩と僕の『魔術』には、それほどの決定的な差があるんだ。

『魔術』というのは、思い描いたイメージを具現化するもの。そのイメージを『種』に流し込むことで『魔術』は発動する。イメージ

したものに限りにくく近い現象が起こる。そして『種』に流し込まれる想像がより強いほど、鮮明なほど、リアルなほど、濃いほど、『魔術』は強くなる。

では、そのイメージを濃くするにはどうすればいいか？

単純に、『魔術』を何度も使えばいい。魔術を何度も使い、その様を何度も見ればいい。目に焼き付けければいい。そうすれば魔術発動のイメージが掴みやすくなり、相乗的に魔術も強くなる。

だから、僕は先輩に勝てない。

僕は入学して半年。先輩は三年目。その差は二年。毎日『魔術』を一回ずつ使ったとしたら、ざっと八百回。二回なら千六百。三回なら二千四百。四回なら……いや、『魔術』に魅せられた先輩が、その程度のはずもない。きっと先輩が魔術を使った回数なんて僕の数千倍に及ぶだろう。その経験の差は大きい。大きすぎる。大きすぎるんだ。僕と先輩には覆しようのない差がある。覆しようのない、イメージ力の差が――

……………。

——ん？……………イメージ？

「安心してくれ、柊木君。君が俺たちに齒向かった記憶、齒向かうと思った記憶もすべて消してあげる。だから、今後は俺たちに齒向かうとする意識すら芽生えないだろう。風宮のようにな。だから、今後一切こんな風に君が苦しむこともないはずだ」

——イメージ……………『種』？

「ただ、万が一のことを考えて君のことは俺の側に置いておかなければならないけど。まあ、これからは友達として仲良くやっていくじゃないか、柊木君。思うに、俺と君はこの学園閉鎖がなければいい友人になれたと思うんだ」

——『種』……………破壊？———そうか……………！

「さあ、こんなつまらないことにかまけるのは止めにして、これらの時間を有意義に過ごせるように……………ん？ どうしたんだ、柊木君？ そんな真剣な顔で一体何を考えてるんだい？ まさ

か、またその斧で『核』を壊しにかかる気かな？　だつたら俺も、もう少し強硬な手段に出ざるをえないけど——」

「……別に、それはもういいんです」

僕は口を拭いながら、ふらふらと立ち上がった。そして力が入らない腕にできるだけの力を入れて、足元に転がっていた斧を拾う。

「もういい？　諦めたってことかい？」

「いえ、違います。方法が分かったんですよ、方法が。ようは、僕はその『核』を本気で壊しにかかるイメージをあなたに植え付けられれば、それだけでよかつたんです」

「それはどういう——」

僕は先輩のセリフを聞かずに斧を振り上げ、僕の横、壁沿いに建てられている本棚に向かって、勢い良くそれを振り下ろした。

破壊音と共に、飛び散る木片。

当然のごとく、木製の本棚は破壊され、ばらばらになった。床に落ちる板切れ。ぱらぱらと、足元に塵が降ってくる。

「なっ？　どうした、柊木君。一体何を——」

「さあ、これで先輩には、『斧で木を叩けば壊れる』という明確なイメージが浮かびました」

「は？　そ、そんなの当たり前だろう。何を今さら——」

「さて、先輩、ここで問題です。とっても簡単な問題ですよ。よく聞いて、そして考えてください。いきますよ——」

——この斧でその『種』を叩いたらどうなるでしょうか？」

僕がそう言った瞬間——

——ピシッ

弾ける音がした。見ると、『核』の端が、クッキーが欠けるように割れたところだった。

そして同瞬、

ピシッ

「あ、ああ、待て」

ピシピシッ

「ちよ、ちよっと、ま——」

ピシピシピシッ

「くそ、待て、待てったら、待て」

ピシピシピシピシッ

「頼むよ、待ってくれ、壊れないでくれよ」

ピシピシピシピシピシッ

「待てよ待てよ待てよ待てよ待てよ待てよ待てよ」

ピシピシピシピシピシピシッ

「壊れるな壊れるな壊れるなこわ、……れるな壊れるなこわ——」

ピシピシピシピシピシピシピシピシッ

「くそおおおおおおおおおおおおおおおおおお
お」

——そして

——『種』は

——飛沫のように

——完全に

——碎け

——散った。

終章「ホーム・エンド」

機関の人間が学園の中に入ってきたのは、『ウォール』が崩れた——つまり、『核』が壊れた——数分後だった。

何でも、四日間も音信不通になって調査委員が十数人調べに来たはいいが、『ウォール』のせいで中に入らず、外で待機していたそうである。機関の人間でもなかなか破れない、相当完璧な壁だったらしい。生徒会からの説明では、（学園外に 不審なものを 出さないためと称して）外からは入るが中からは出られないフィルタ—のようなものだったはずだが、もちろんそんなのは嘘だったわけで、外からも完全に遮断されていた。

本気で一年間、閉鎖し続けるつもりだったんだろう。

別に彼、彼女らが生半可な気持ちで行動を起こしたとも思っていないが、しかし改めて思い知らされた気がする。願望を叶えるため、あの面々はみんな本腰だったのだ。

本気で閉鎖し——そして開放された。

開放した本人が言うことでもないかもしれないが、なかなかに虚しい出来事だったと思う。もしかしたらこれは、開放した本人だからこそ思うことなのかもしれないが。

なお、開放された後は一体どうなったかという点、意外も意外で意外なほど意外なゆえに意外な感じで、お咎めはほとんどなかった。今回の事件は、表向きは『核』の暴発によるものということで収束していった。夜中に『核』に異常事態が発生して教職員総出で沈静しに行ったが逆に『魔術』が暴走して外部に飛ばされてしまい機関の調査委員の介入により収まったはいいが身体に影響があるかもしれないので現在教職員は全員機関で精密検査を云々かんぬん。それを全校集会で聞かされたときの木内の反応は、

「まったく、危ねえ話だよな。まあ、のんびりできてラッキーだったけど」

という呑気なものだった。知らないってのは幸せなことだと、つくづく思う。

また、この騒動における一番の損失は『種』の『核』だった——しかも、それを壊した張本人は僕である——わけだが、それに関しでは僕は別段とやかく言われなかった。説教とゲンコツを食らったくらいである。僕達のような生徒よりも、むしろこの事件を見過ごした元理事長なんかに責任が行くようだ。

加えて、機関にはこれと同じ『核』が数十個あり、この学園に置いてあったのは比較的性能が低いものだったらしい。なので、うだうだやるより事件を早く沈静化する方が先決だった——とのことだ。これは一本木先輩経由で聞いた話。

唯一、クルト先輩が大学進学の道を絶たれ、来年の四月から機関の内部で相当な低賃金で働くことになったそうだ。元々優秀な生徒だったらしいし、機関も機関でこれを捨て置くのはうまくないと思っただろう。社会的抹殺とか、そんな血生臭いことにならなくてよかった。これは当事者の一人としての感想だ。

ということ、一本木先輩も、そしてりえ先輩も、普通に大学受験して進学するそうだ。

この前、学園内でお二方と偶然すれ違った時、恨み言でも言われるんだらうと覚悟していたが、しかし二人とも相変わらぬ雅な笑顔で僕に挨拶をしてきた。

「まあ、こうなるとは思っていた。君に解かれたのは、ある意味救いだったよ」

とは、一本木先輩の弁。りえ先輩も隣で微笑んでいた。試みが成功したはいいが、忙しすぎて二人で過ごす時間が格段に減ってしまい、それが望むところではなかったのかもしれないが、そんなことは特に関係なかったのかもしれない。何にしても、ドロドロした感じにならなくて安心した、というのが正直なところである。

こんなことがあったわけだから、当然のごとく自警委員は解散。代わりに風紀委員が数年ぶりに復活した。そしてその新生風紀委員の初代会長を務めるのが、何をどうして隠そうか、野中乖離である。あの後も僕が彼女と同じ部屋で授業を受けているのは否定しようもない事実だが、どうも最近、乖離の表情が薄くなった気がする。これは 憑依 の存在に触れたことで生まれた相対評価によるものかもしれないが、しかし何か物足りない。この子はやればもっとやれるのに、みたいな感じ。

この高校三年間で、乖離 の無邪気な笑顔っていうのも見てみたいと思う。どうすりゃいいのかは分からないが。

そしてそしてそして、学園の完全閉鎖も解かれたわけで、不審なもの も消えたわけで、『種』の『核』すらなくなったわけで、これedyouやくすべてが元通り—— になると思っていたのに——

——時計塔は消えたままだった。

一日経っても二日経っても三日経っても四日経っても、寮の前の砂利道の丁字路の垣根の奥には、何も現れなかった。もしかしてあの時計塔は『魔術』で完全に消されてしまつて再生不可能になったのかも、とも思ったが、僕はもう一つの可能性を考えていた。

——それで、僕はその真相を聞くために、ここに彼女を呼び出したのである。

『ここ』というのは、何のことはない、駅前にある喫茶店だ。『種』の『核』が消えたおかげで、学園の閉鎖も緩くなった。機関からの圧力が弱まったんだろう。外出申請も形ばかりの簡単なものに変わり、このように気楽に外に遊びに出られるようになったのである。家に帰るという名目なら一泊くらいは寮を留守にしてもいいということにまでなったのは、少々驚きだった。掌を返されてそこ

から滑り落ちたような気分である。

とは言え、学生証の中の『種』は以前そのままなので、どこまでも自由というわけでもないが、ね。

と、自嘲を七十パーセントくらい含んだ思い出し笑いをしたところで、さっき注文したブレンドコーヒーが届いた。運んできたのは男のウェ이터だ。

「お待たせしました」

と日本の客商売のアベレージ近傍の営業スマイルをしながら、僕の前にカップを置く。取り立てて特徴のない、一般的な少年。僕と同じ年くらいだろうか？　ということは高校生？

ふと、その胸元にある名札が目に入った。この人は佐々木と言うらしい。よく聞く、一般的な苗字だ。

『那頭奈学園』の生徒がバイトなんかできるわけもなく、きっとこの人は別の高校で僕とはまったく違う一般的な高校生活を送っているんだろう。『魔術』なんていう非常識で非現実的なものとは一向に無縁で、日常的で現実的な毎日を送っていることだろう。

僕とはかけ離れた日常。

それとも、僕がかけて離れているのだろうか？

羨ましいような、そうでもないような。

去っていくウェ이터の背中を眺めながら、この中途半端な気分をため息にしてカップに吹きかけていると、

「やつ、粉雪君。お待たせ」

ヤッホーと言うように右手を上げて僕に声をかけてきたのは、力チューシャでセミロングの髪を後ろに流している丸眼鏡を装備した少女、風宮すだれだった。

「うふふ。喫茶店で待ち合わせって、まるで恋人みたいだねえ」

とくすくす笑いながら、すだれは僕の向かいに座った。

早速注文を取りに来た店員に、

「ミルクティーとイチゴのタルトお願いします」

と言ってメニュー表を返すすだれ。……………僕のおごりだとか言

い出さないだろうな？

向かい合って、教室の会話の延長線のような話をする事数分。ウェイターが紅茶とタルトを運んできて、すだれは待つてましたばかりにがつつき始める。そして一分も経たずに皿の上から消えてしまった。……………もう少し大事に食べたらいいのに。

ナプキンで口を拭いながらこれ以上ないほどの満足げな表情をしたすだれは、思い出したように、

「でさあ、あたしをここに呼んだ理由って何？」

……………ついでに聞いておこう、みたいな感じで言うな。そっちが本題のはずだろう。

僕はこほんと咳払いをしつつ、

「お前に聞きたいことがある」

「うん。なにに？———って、いつだかもこんなやり取りしたっけ？」

含み笑いを向けてくるすだれ。笑い話にできるほど悠長な記憶でもないが、笑って話せるのは恵まれていることなのかもしれない。

何にしても、と僕は思い直し、いくぶんシリアスな声音を作って、

「時計塔を消したのは、すだれ、お前なのか？」

すだれの反応が遅れたのを、僕は見逃さなかった。

次の言葉を搜しているような顔をしたすだれは、

「……………どうして分かったの？」

否定しなかった。そして、肯定した。

「時計塔が『魔術』で完全にデリートされていたとしても、『種』の『核』がなくなれば、同時に消された 時計塔に関する記憶は復活するはずだ。全校生徒の記憶を消すなんて『種』の『核』を使わなきゃできるわけないんだから。だけど、いまだにそれについて疑問を呈する人はいない。だから、あれは——あの時計塔は——元々存在しなかったんじゃないか、と思っただ。つまり、あの時計

塔は幻覚だつてことだ」

すだれは納得するように頷き、

「ふんふん。………で、何でそれをあたしに聞いてきたの？」

「それは、お前が明らかにあの時計塔に反応していた唯一の人物だからさ。僕の知る限り、ね」

「………うふふ。やっぱりすごいなあ、粉雪君は。クルト先輩を打破したのも、伊達じゃないね」

嬉しそうに言いながら、すだれは紅茶を口に含んだ。

「………そうだよ、あれはあたしが四月ごろに君にかけた幻覚だよ」
「何でそんなことした？」

「うふふ。ちゃんと説明するとね、あたしは四月の中旬で自警委員に入つてて、下旬くらいにはもう学園閉鎖の企みに加担してたの。でもね、やっぱりあたしも迷つてたんだよね。本当に一年間この学園を閉鎖しちゃつていいのかつて。それでクルト先輩に反対したり、止めるように言つたりもしたんだけど、その度に記憶消されちゃつてね。機関の人にばらそうにも、その連絡先を知ってるのは一本木先輩だけだし。当然その時点で大人は誰もいなかったわけだし、ね。他の生徒にばらしても、その人ごと記憶消去されちゃつてさあ。本当まいったよ。覚えてる？ 粉雪君にも一度話したことあるんだよ？ うふふ。まあ、そんなわけであたしは思い立つたんだよね。自警委員に気付かれない程度で、自警委員の企みをばらすものを作るうつて。それが、君にかけた幻覚なんだよ」

「………何で僕に？」

「粉雪君以外に友達がいらないのもあるんだけど……。言つたでしょ、あたしも迷つてるつて。つまり、学園の閉鎖もあたしの願望の一つだったりするんだよね。だからどっちがいいのか、君に選んでもらおうかなつて、思つたんだよ。………思つちやつたんだよ」

「………何で時計塔だつたんだ？」

「電気を使わない時計なら何でもよかったんだよ。実はグラウンドの端っこに日時計も作つておいたんだよ？ 粉雪君は気付かなかつ

たみたいだけど。……というより、気に入ってもらえなかったのかな？」

「うふふ、と照れ隠しのように笑うすだれ。」

「けどまあ、それも十月に先輩に見つかっちゃってね。具体的なこととはばれなかったみたいだけど——回りくどかったのが逆に功を奏した感じかな——でも、あたしの『魔術』はキャンセルされちゃった。もちろんその『反抗した記憶』も消されちゃったから、その後のあたしはずっと自警委員の手先だったわけだよ」

後悔が混じるように、言葉に息が混じる。

「……結果的に見れば、僕はお前の期待通り——もしくは思惑通り——に動いたってことになるのか？ お前の書いた脚本に沿って」「うふふ。それは言いすぎだよ。あたしはそこまで干渉してないよ。そうだね……あえて言うなら、セクションタイトルだけ考えたってところかな？」

「冗談めかしたように答えながら、すだれは紅茶を口に持っていく。そしてこくりと一口飲んで、カップをプレートに戻してという動作をした後、

「まあ、そういうわけでさ、嘘ついたりクルト先輩に内通したりして君のこと困らせちゃって、本当に悪かったなああって思ってる。だからさ——ごめんなさい。許してください。もうしません。本当にごめんなさい」

テーブルに両手を着いて、深々と頭を下げてくるすだれ。

「そう言えばすだれのツムジなんて初めて見たなあ、なんていう関係ないところに思考が飛びつつも、僕は

「……別に、もういいよ。お前にはお前の願望ってのがあったんだろつし。それに僕もお前に嘘ついたりしたんだしね。お互い様だ」

「……よかった」

顔を上げ、安堵の微笑をうかべるすだれ。そして紅茶のカップに手をかけながら、

「……でも思惑通りなんていうけどさ、粉雪君がまさかここまでや

るなんて本当思わなかったよ。正直、毎日寝て過ごすもんだとばかり思ってた。だから、そこに毎日押しかけようって考えてたのに」

「…………… 本当、閉鎖を解いというてよかった。」

「クルト先輩も一本木先輩も花塚先輩も、みんな不思議に思ってたよ？ 何で粉雪君があんな色々動き回ってたんだろって。あたしにも謎だよ。何でなの？」

「…………… 別に、僕は元々閉鎖された生活っていうのが嫌いだったんだ」
「…………… え？ 絶対嘘だよ。粉雪君がそんな曖昧な理由で動くわけないよ。本当、どうしてなの？」

「だから、本当にそれだけだ」

「…………… も、粉雪君はあたしに隠し事はつかするよね」

あからさまな不満顔を浮かべるすだれ。

「…………… まあ、いつかは本当のことをこいつに話すつもりではあるが、それは今じゃない。もう少し、時間が欲しい。もう少しだけ。」

「ん…………… 。じゃあさ、少し自由になって、何か変わった？」

「…………… いや、ほとんど何も変わってないよ。強いて言えば、家に帰れるようになったことくらいか」

「あ、そうか。粉雪君ちつて、行くのに時間かかるんだっけ。今度いつ帰るの？ そのときあたしも連れてってよ」

「…………… お前、僕の部屋だけじゃ飽き足らず、僕の家にも押しかけてくる気か」

「うん。粉雪君の家族見てみたい」

「見てどうするんだ」

「別に、おもしろそうじゃない。例の妹さんにも会わせてよー」

期待を輝かせた目を向けてくるすだれ。

「…………… まったくこいつは、閉鎖の前も後も変わらない。相変わらず僕の隣や真向かいにいて、相変わらずの笑顔を僕に向けてくる。僕の傍にしようとする。」

何が楽しくてここにいるのだろうか。

何が楽しくて僕の傍にいるのだろうか。

何が楽しくて僕に笑顔を向けてくるのだろうか。
もう、変わり者だとしか、言いようがない。

もし、この風宮すだれをうちの妹に見せたら、一体どんな反応をするんだろう？

恋人だとか言って紹介したら、一体どんな顔をするだろう？

——僕は少し、楽しみになった。

——END

閉鎖インサイド

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7875e/>

閉鎖インサイド

2010年10月8日14時24分発行